

敷島町文化財調査報告第5集
(山梨県)

松ノ尾遺跡

都市計画街路愛宕町下条線建設事業に伴う
古墳・平安時代遺跡の発掘調査報告書

1996

敷島町教育委員会

敷島町文化財調査報告第5集
(山梨県)

松ノ尾遺跡

都市計画街路愛宕町下条線建設事業に伴う
古墳・平安時代遺跡の発掘調査報告書

1996

敷島町教育委員会

卷頭圖版 I



1号



2号

宝冠阿弥陀如来坐像

序 文

昭和53年、敷島町の最南端、大下条地内で一つの遺跡が発掘調査されました。調査の結果、山梨県の弥生時代史を検討する大きな発見が相次ぎ、本県弥生時代の指標として、その遺跡の名『金の尾』は広く知られることとなりました。

この調査から16年後の昨年秋、本町の市街地を横断、甲府駅北口へと繋がる都市計画道路愛宕町下条線建設事業に先立ち、埋蔵文化財の発掘調査が行われました。この遺跡は『松ノ尾』と名付けられ、平成6年10月より、平成7年3月までの約5ヶ月間に亘って調査され、その結果、凡そ1000年から850年も前の平安時代後期に営まれた村の跡が永い眠りから醒め、私達の前に姿を現しました。

この遺跡からは、100点を超す皿や壺と呼ばれる上器、刀子などの鉄製品が出土し、豊穴住居跡も数多く確認されております。また、12号件居住付近からは、平安時代後期の製作と思われる銅製の坐像が2軸出土しました。この時代の仏像の出土は、木原では初めてのことです。多方面から注目を集め、山梨の古代史を解明する大きな手がかりを提示することとなりました。

今回の調査で得られた資料が、多くの方々の生涯学習や研究活動に役立てていただければ幸いに存じます。

最後に、調査、報告書作成にあたって山梨県教育委員会学術文化課、甲府土木事務所をはじめ多くの皆様よりご指導、ご協力をいただきましたことに深く感謝申し上げ、序文といたします。

平成8年3月

敷島町教育委員会

教育長 中込儀一

例　　言

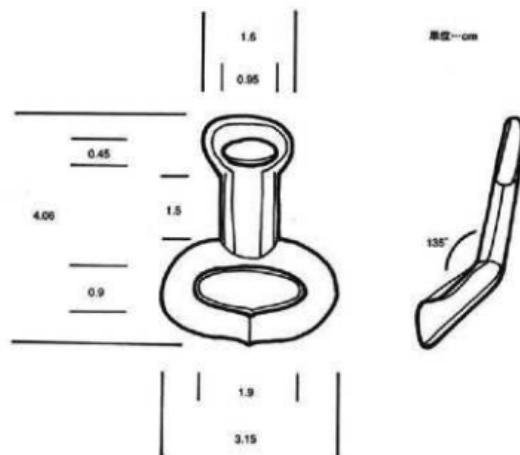
1. 本報告書は、山梨県中巨摩郡敷島町中下条、大下条地内に所在する松ノ尾遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、都市計画街路愛宕町下条線建設工事に先駆けて行なわれた発掘調査である。
3. 平成5年(1993)8月に試掘調査を行い、この結果を踏まえて発掘調査は、平成6年(1994)10月19日より平成7年(1995)3月31日まで行った。平成7年10月より平成8年(1996)3月までの間、整理作業、報告書作成を行なった。
4. 発掘調査にあたった組織は、次のとおりである。
調査主体者 敷島町教育委員会
調査担当者 大馬正之(敷島町教育委員会生涯教育課主任)
調査事務局 敷島町教育委員会生涯教育課
5. 本書の執筆、編集は大馬が行い、第3章 玉類(火測含)を石神孝子(県埋蔵文化財センター文化財主事)が担当した。遺物実測、トレース、図版作成については、飯室、石川、長田(巾)、小林(明)、末松、関本、高添、長田(竜)の諸氏の協力を得た。遺跡、遺物の写真は大馬が撮影し、遺跡の一部を株式会社スカイサーベイが行なった。
6. 山土した鉄製品、銅製品は、帝京大学山梨文化財研究所に委託し、処理を行なった。
7. 発掘調査、報告書作成にあたり、次の方々、関係機関より御指導、ご協力を頂いた。ここに御芳名を記して、厚く感謝申し上げる次第である。
西川新次(慶應義塾大学), 井上洋一、原田一敏、金子啓明、岩佐光晴(東京国立博物館), 内田理彦(鶴印藤都市文化財センター), 小泉充康(町田市立博物館), 濱田 隆、飯野正仁(山梨県立美術館), 鈴木 稔、畠 大介(山梨文化財研究所), 田代 孝、坂本美夫、小野正文、石神孝子(山梨県埋蔵文化財センター), 出月洋文、保坂康夫(山梨県教育委員会), 数野雅彦(甲府市教育委員会), 羽中田壯雄、植松又次、中込司郎(山梨県文化財保護審議会), 山下孝司(韭崎市教育委員会), 岐川 洋(竜王町教育委員会), 高須秀樹(双葉町教育委員会), 鈴木まり子、財團法人鹿島美術財团, 藤岡市教育委員会, 山梨県教育委員会学術文化課, 甲府土木事務所, 池谷建材店(順不同、敬称略)
8. 本遺跡の出土遺物及び、すべての記録は敷島町教育委員会に保管してある。

〔発掘調査、整理作業参加者〕

居村道夫、浅川松子、飯室久美恵、石川弘美、石橋二三江、尾澤玉江、長田由美子、小林邦隆、小林明美、清水光子、三枝延子、末松福江、関本芳子、高添美智子、近浦正治、近浦澄子、保坂広昭、保延 勇、三井裕子、三井やよい、山路宏美、山本米子、長田正寿、丸山政利、小林早苗、濱田初江、長田竜也、加藤千恵子（順不同、敬称略）

凡 例

1. 銅製品特殊遺物の計測値は、下図のとおりである。



2. 仏像は、台座無のものを1号仏像、台座有のものを2号仏像とする。

3. 水糸高は標高を示す。

4. 掘図中のスクリーノートンの内容は、下記のとおりである。

遺構 ■ (焼土範囲)

遺物 ■ (内黒土器) ■ (煤付着痕) 断面黒色 (須恵器)
黒字は墨書き文字

本文目次

序文	
例言	
凡例	
はじめに	1
第1章 遺跡をとりまく環境	1
1 遺跡の立地と地理的環境	1
2 遺跡周辺の歴史的環境	2
第2章 遺構と遺物	9
1 古墳時代	9
2 平安時代	17
3 墓穴状遺構	43
4 土坑	48
5 溝跡	56
第3章 遺構外遺物（一部遺構内含）	58
1 土器	58
2 石器・土製品・石製品	65
3 銅製品	66
4 鉄製品	69
5 玉類	72
第4章 総括	75

挿図目次

第1図 松ノ尾遺跡調査区位置図	3	第26図 19号住居跡出土造物（2）	41
第2図 周辺遺跡分布図	4	第27図 20号住居跡及び出土遺物	42
第3図 遺構配置平面図	5～8	第28図 1号方形竪穴状遺構及び出土遺物	44
第4図 4号住居跡及び出土遺物	13	第29図 5号方形竪穴状遺構	44
第5図 5号住居跡及び出土遺物	13	第30図 2号方形竪穴状遺構及び出土遺物	45
第6図 9号住居跡及び出土遺物	14	第31図 3号方形竪穴状遺構及び出土遺物	46
第7図 15号住居跡及び出土遺物	15	第32図 4号方形竪穴状遺構及び出土遺物	46
第8図 16号住居跡及び出土遺物	16	第33図 6号方形竪穴状遺構及び出土遺物	47
第9図 1・2号住居跡及び出土遺物	30	第34図 7号竪穴状遺構	48
第10図 3号住居跡及び出土遺物	31	第35図 1～16号土坑	50
第11図 3号住居跡出土遺物（2）	32	第36図 17～32号土坑	51
第12図 6号住居跡及び出土遺物	32	第37図 33～43号土坑	52
第13図 7号住居跡及び出土遺物	33	第38図 1～5号溝跡及び出土遺物	56
第14図 7号住居跡出土遺物（2）	34	第39図 遺構外遺物出土分布図	57
第15図 8号住居跡	34	第40図 遺構外遺物 土器（1）	61
第16図 10・11号住居跡	35	第41図 遺構外遺物 土器（2）	62
第17図 12号住居跡	35	第42図 遺構外遺物 土器（3）	63
第18図 10・11号住居跡出土遺物	36	第43図 遺構外遺物 土器（4）	64
第19図 12号住居跡出土遺物	37	第44図 石器・土製品・石製品	66
第20図 13号住居跡	38	第45図 銅製品 古銭	66
第21図 14号住居跡及び出土遺物	38	第46図 銅製品	68
第22図 14号住居跡出土遺物（2）	39	第47図 鉄製品	71
第23図 17号住居跡及び出土遺物	39	第48図 玉類	73
第24図 18号住居跡	42	第49図 宮内遺跡出土鍍金具	77
第25図 19号住居跡及び出土遺物	40		

表目次

第1表 竪穴状遺構観察表	43	第7表 遺構外遺物出土土器観察表	58
第2表 竪穴状遺構出土遺物観察表	43	第8表 石器・土製品・石製品観察表	65
第3表 上坑観察表	48	第9表 古銭観察表	66
第4表 各土坑土層説明 覧	52	第10表 仏像法量表	69
第5表 溝跡観察表	55	第11表 墓書土器一覧	74
第6表 溝跡出土遺物観察表	55	第12表 遺構時期分類	76

図版目次

卷頭図版 1、2号宝冠阿弥陀如来坐像

- 図版1 4・5号住居跡全景、9・16号住居跡全景、15号住居跡全景
図版2 1・2号住居跡全景、3号住居跡全景、6号住居跡全景
図版3 7号住居跡全景、8号住居跡全景、10・11号住居跡全景
図版4 12号住居跡全景、10号住居土器出土状況、12号住居土器出土状況
図版5 14号住居跡全景、17号住居跡全景、18号住居跡全景
図版6 19号住居跡全景、19号住居羽釜出土状況、20号住居跡全景
図版7 1号溝跡、3号溝跡、4号溝跡
図版8 1～8号土坑全景
図版9 9～16号土坑全景
図版10 17～24号土坑全景
図版11 25～32号土坑全景
図版12 33～40号土坑全景
図版13 41～43号土坑全景
図版14 4・5・9・15・16号住居跡出土遺物
図版15 1・3・7号住居跡出土遺物
図版16 10号住居跡出土遺物
図版17 11号住居跡出土遺物
図版18 12号住居跡出土遺物
図版19 14・17・19・20号住居跡出土遺物
図版20 1～4・6号方形壠穴状遺構出土遺物
図版21 遺構外遺物土器(1)
図版22 遺構外遺物土器(2)
図版23 遺構外遺物土器(3)
図版24 遺構外遺物土器(4)
図版25 石器・石製品・土製品
図版26 墓吉土器
図版27 仏像
図版28 仏像
図版29 鉄製品
図版30 銅製品、玉類・発掘調査参加者

はじめに

敷島町内における遺跡数は、平成8年3月現在116ヶ所を数える。今から24年前に刊行された文化庁編集『全国遺跡地図19山梨県』に収録されている敷島町内の遺跡データは僅に13ヶ所を数えるだけであった。24年の間に増加した遺跡は、遺跡分布調査で確認されたもの、工事中に発見されたものなど様々である。特に最近は、開発に先立つ試掘調査によって重要な性格を持つ遺跡の発見が相次いでいる。

松ノ尾遺跡は、甲府駅北口より県立甲府工業高校南側を通り、敷島町へと繋がる都市計画道路愛宕町下条線建設事業に先立ち、行なわれた発掘調査である。平成5年8月に行なった試掘調査によって10世紀末から11世紀代の土器類を確認し、翌平成6年10月より7年3月の間、本調査を行なった。調査面積は約7,000m²、確認された遺構は古墳時代後期、平安時代後期住居跡20軒を数え、200個体を超す土器、金銅製仏像、釘を中心とする鉄製品など膨大な数の遺物が出土した。標高290.7mを測る遺跡である。

第1章 遺跡をとりまく環境

1 遺跡の立地と地理的環境（第1図）

遺跡の所在する敷島町は、甲府盆地の北西端部に位置し、県都甲府市の西方に隣接する。町域は東西約4km、南北約1.5kmで、南北に細長く帯状を呈している。町の北方は、標高1,743mを測る茅ヶ岳や1,295mの太刀岡山など茅ヶ岳、黒富士火山によって形成された千m級の山々が点在する山岳地帯である。また、町の南部は、奥秩父山系の企峰山に源を持つ荒川によって形成された扇状地域となっている。本町は、町域の凡そ8割が山岳地帯となり、一部丘陵を形成し、扇状地となっている。この扇状地の扇頂部分に市街地が広がる。

松ノ尾遺跡は、町東端を南流する荒川の右岸扇状地上に営まれた遺跡である。

荒川は、その名のとおり、過去において度数となく水害を齎した「暴れ川」である。近年の発掘調査によって、少なくとも南北に3ヶ所の大規模な河道の痕跡が確認されている。これらは過去台風など極端な水位の変化によって流れを変えた荒川の跡と考えられ、本町は東西に微高地と谷が連続する地形となっている。松ノ尾遺跡はこの微高地上に位置するが、遺跡全体に砂礫層があり、東端には荒川の氾濫によって運ばれたと思われる花崗岩質の礫群が南北に看取された。

2 遺跡周辺の歴史的環境 (第2図)

遺跡の所在する敷島町は、山間、丘陵、低地とからなり、各時代ごとにこの地形を利用して様々な生活が営まれてきた。敷島町が属する中巨摩郡内においても比較的遺跡の多い地域と言えよう。

遺跡から南西へ約800mには、弥生時代後期の集落遺跡として知られる金ノ尾遺跡が所在する。金ノ尾遺跡からは縄文時代前期末の十二菩提式期、中期中葉の勝坂式期などの住居が出土しているが、遺跡の性格を代表するものは弥生時代後期に営まれた集落とそれらに伴うと考えられる周溝墓群である。本遺跡では窪穴住居33軒、周溝墓26基が調査され甲府盆地における弥生時代の生活体系を知る重要な遺跡である。

古墳時代に入ると、山梨県では甲府盆地南東部に位置する東八代郡を中心として、中道町鏡子塚古墳に代表される大型古墳が出現し、その後曾根丘陵から笛吹川流域にかけて濃厚な古墳分布が認められる。松ノ尾遺跡周辺の甲府盆地北西部での古墳の築造は6世紀に入ってからである。荒川を挟み対岸には、6世紀後半とされ県内有数の石室規模を誇る加牟那塚古墳や万寿森古墳があり、遺跡西方には双葉町双葉1号墳や竜王町きつね塚1号墳などに代表される7世紀前半の赤坂台古墳群が存在する。本町は丁度この後期古墳群の中心に位置するが、田畠の開墾整備などによって、数基の古墳が消滅し、現在敷島町内には2基の円墳が残るのみとなっている。松ノ尾遺跡からも、遺物包含層より水晶製の切子玉やガラス玉など古墳の副葬品と思われる遺物が数点出土しており、周辺に古墳があった可能性が考えられる。また、遺跡西方約300mには、古墳時代前期の水晶製丸玉の半加工品が出土した御岳田遺跡がある。工房跡は確認されていないが、周辺に存在した可能性は高いと思われる。この遺跡からは、古墳前期の住居跡2軒とともに、長方形形状の窪穴遺構が発見されている。本遺構からは、4世紀後半から5世紀初頭と考えられる煮やS字状口縁付甕など3個体の土器が一列に並び、すべて西に向いて倒れた状態で発見されており、その他の状況から祭礼に関する遺構と考えられる。

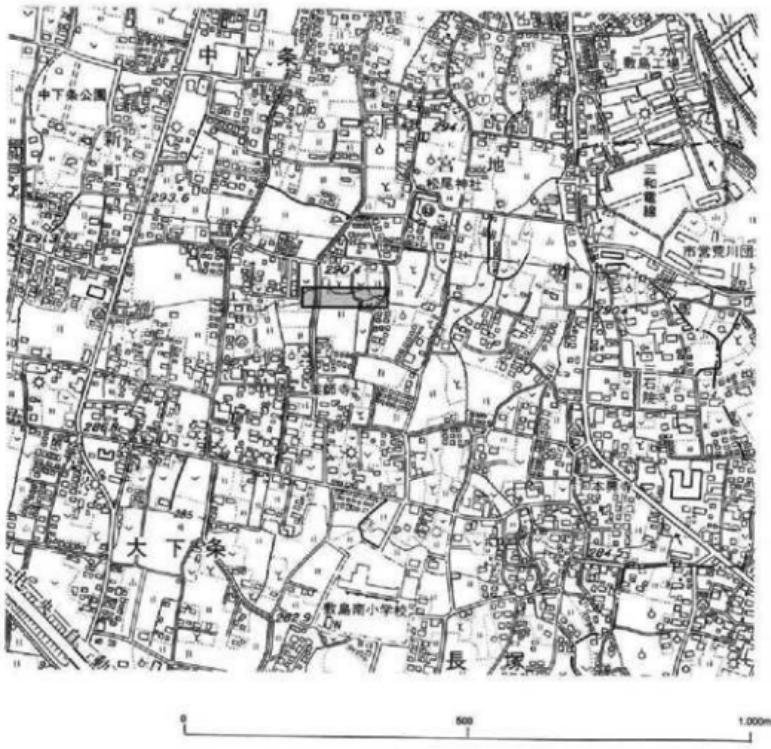
周辺の歴史環境でもっとも注目されるのが、松ノ尾遺跡から北西へ約1.9kmに位置する生産遺跡、天狗沢瓦窯跡である。調査の結果3基の登り窯跡と溝跡、膨大な量の瓦が出土している。出土瓦のうち、様々な特徴を示す軒先瓦は中房連子1+6の素井八葉蓮草文鏡瓦で、素縁と有段縁の2種類が存在する。年代的には7世紀後半に位置づけられるが、需要先である寺院などはいまだ発見されていない。

これまで、古代における有力豪族の存在や当時の中心領域を示す材料となっていた瓦の出土は、春日居町の寺本庵寺や一宮町の甲斐国分僧、尼寺、甲府市東部の川田瓦窯や上土器遺跡など盆地東部地域に限られ、これらの地域が、古代甲斐国の政治、文化の中心地としてきた。

しかし、上記遺跡出土瓦とは異なる瓦当文様を施した瓦が犬狗沢瓦窯より発見されたことによって、盆地西部地域が注目を浴びることとなった。

松ノ尾遺跡を中心として、敷島町内には古墳時代の遺跡が53ヶ所、奈良、平安時代の遺跡が70ヶ所登録されており、縄文、弥生期の遺跡数に比べ、極端な増加を示す。奈良時代以降律令体制下の甲斐国は、都留、山梨、八代、巨麻の4郡が置かれ、支配体制が確立する。律令体制以前の古墳時代における甲斐国様相を4郡に重ね合わせると、概略山梨郡と巨麻郡地域において、特に後期古墳の築造が目立つ。その後山梨郡には寺本庵寺や川田瓦窯が、巨麻郡には天狗沢瓦窯が構築され、松ノ尾へと続くのである。

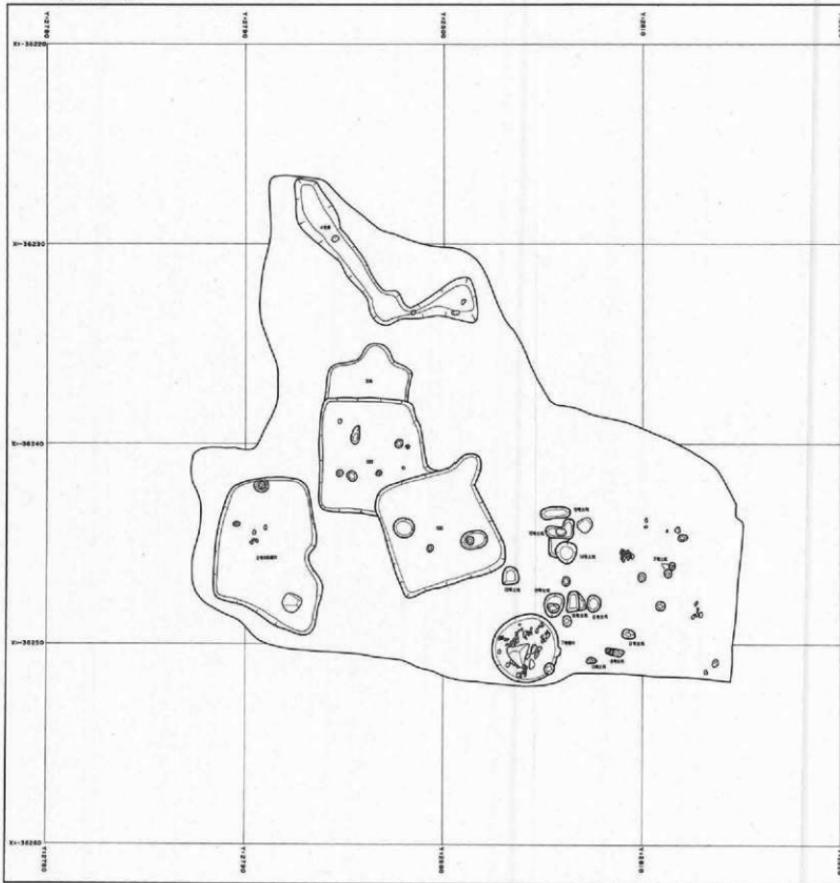
以上、松ノ尾遺跡周辺の歴史的環境について概要を記したが、特に敷島町周辺は古代甲斐国における山梨郡勢力と対比関係に位置づけられる巨麻郡の中心であり、古代史解明に大きな役割を持った地域といえよう。

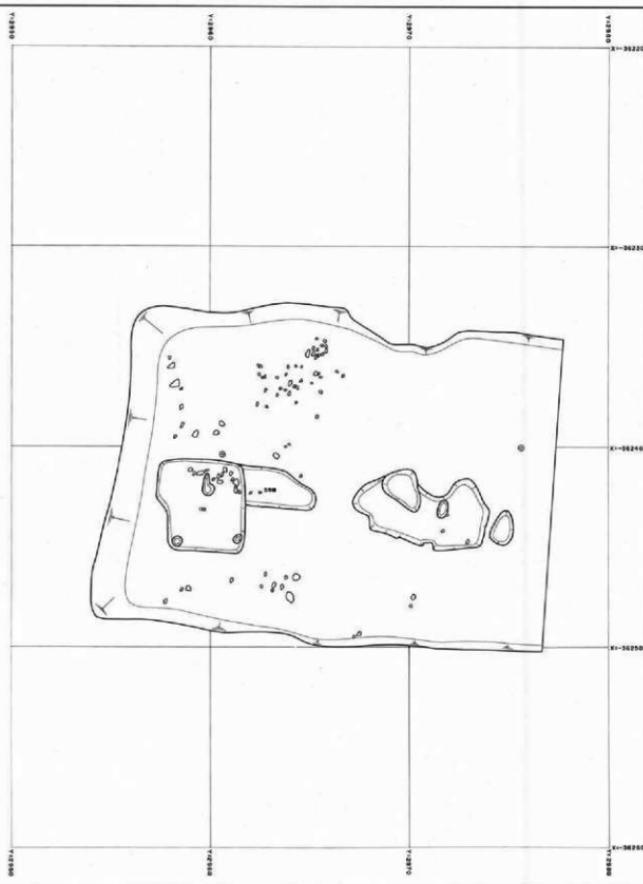
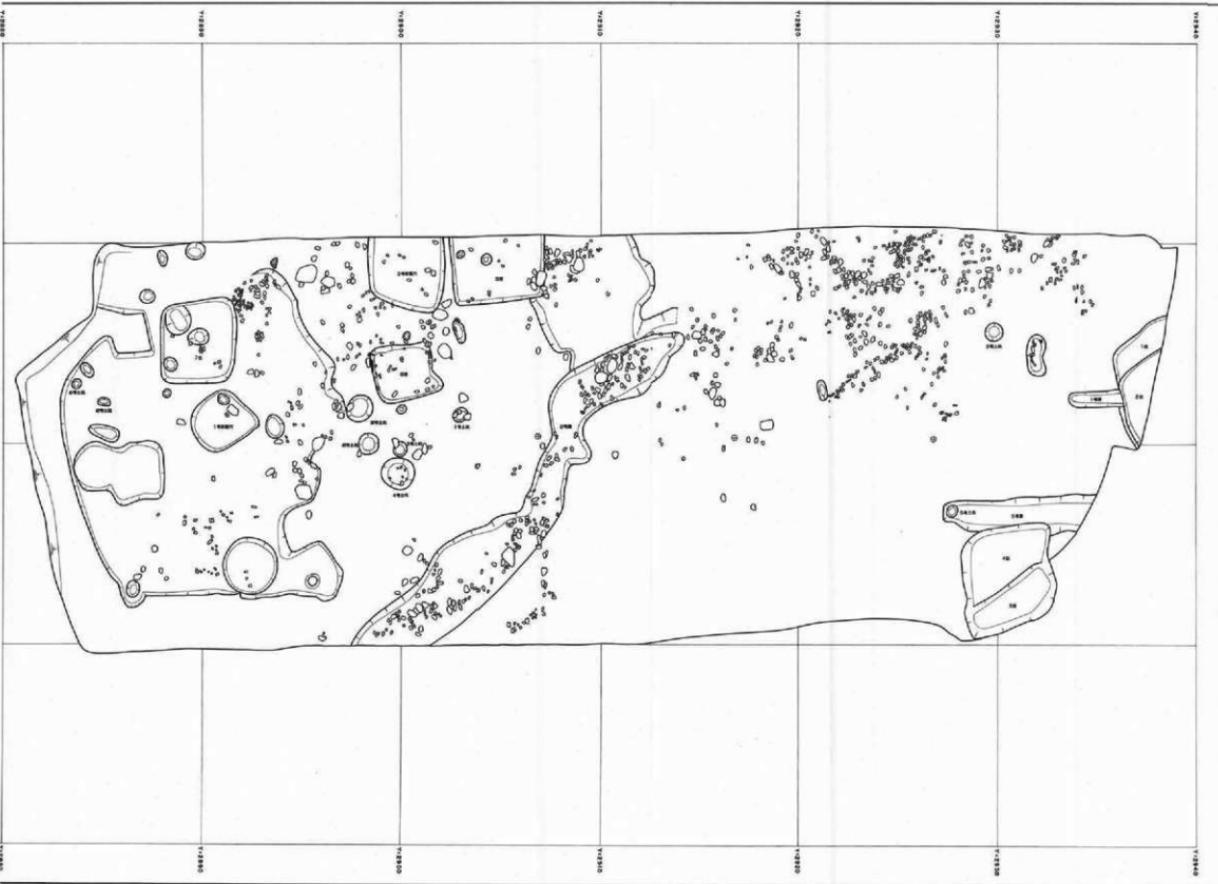


第1図 松ノ尾遺跡調査区位置図



第2図 周辺遺跡分布図





第2章 遺構と遺物

1 古墳時代

松ノ尾遺跡における古墳時代の遺構と遺物は、遺跡全体からみるとその数は僅少である。しかし、遺構残存状況を平安期のものと対比した場合、この地域の歴史的環境を探る上で大変重要な事柄を提示してくれた。

遺構としては、豊穴住居跡5軒である。

4号住居跡（第4図、図版1）

位置・概要 第1調査区D-2、3グリットに位置し、5号住居と重複関係にある。

遺構南東側は、町道が南北に走り、調査区外となる。このため木住居の東壁一部及び南壁については確認できなかった。5号住居との関係は、堆積状況、遺物などから5号住居を埋め立てて、4号住居が造られたと思われる。残存状況は良好であった。

形状・規模 平面形は東西4.5m、南北4.8m（調査可能な範囲）の方形を呈す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは平均35cmを測る。柱穴は4ヶ所で、径2.0～3.5cm、深さ2.5～3.5cmである。

カマド 調査の結果、カマドは確認されなかった。住居東南側において、調査不可能な部分があるため、東壁に設けられていた可能性もある。

遺物 1は分銅型土製品である。高さ7.1cm、幅は最小3.7cm、最大6.5cmを測る。上部に径1.1cmの穿孔があり、重量は、282.5gである。この他須恵器壺片が1点出土している。

5号住居跡（第5図、図版1）

位置・概要 第1調査区D-2、3グリットに位置し、4号住居と重複関係にある。

遺構南東側は、町道が南北に走り、調査区外となる。このため木住居の東、西壁の一部及び南壁は確認できなかった。4号住居との関係は、前述のとおりである。残存状況は良好であった。

形状・規模 平面形は東西4.2m、南北2.2m（調査可能な範囲）を測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、高さは約5.0cmである。柱穴は2ヶ所確認され、径3.6～3.5cmである。

カマド 確認されなかった。住居東南側において、調査不可能なヶ所があるため、東壁に設けられていた可能性もある。

遺物 1は、床面直上より出土した口径11.4cm、高さ3.6cm、底径4.6cmの壺である。胎土はキメが細かく、色調は黒茶色を呈す。焼成は良で内、外面とも口縁に横方向のナデ調整が認められる。

9号住居跡（第6図、図版1・14）

- 位置・概要** 第2調査区に位置し、16号住居と重複関係にある。住居南側半分は、16号住居によって切られており、確認はできなかった。
- 形状・規模** 東西4.5m、南北2.7mで、壁はほぼ垂直に立ちあがり、高さ約3.0cmを測る。柱穴は確認できなかった。
- カマド** 明確にカマドといえる施設は確認できなかった。しかし、住居北壁際に長径1m、短径6.0cm、深さ5.0cmの掘り込みが確認され、第3層より径2cm前後の焼土塊が全体に認められた。3層からは、長胴壺や瓶などが出土している。
- 遺物** 遺物はすべて住居北壁の掘り込み部より出土している。
- 1は土師器長胴壺で、口径12.6cm、器高27.5cm、底径5.9cmを測る。胎土は、キメが粗く色調は茶褐色を呈す。焼成は良で体部外、内面にヘラ削りが認められ、底部に木葉痕を有す。
- 2は土師器瓶で、口径21.5cm、器高25.3cm、底径8cmを測る。胎土はキメが粗く、石英、長石の粒子が目立ち、色調は茶褐色である。焼成はやや不良で、外面に縱方向、内面は横方向のハケ目を有す。
- 3は推定口径2.5cmの土師器壺で、1~3mm程度の小石を全体に含む。焼成は良である。
- 4は土師器小型壺で、口径1.5cm、器高1.3cm、底径6.6cmを測る。胎土はキメが粗く、色調は褐色を呈し、焼成は良である。底部に木葉痕が認められる。
- 他に土鍬1点が出土している。（第8表参照）

15号住居跡（第7図、図版1・14）

- 位置・概要** 第2調査区に位置し、16号住居と重複関係にある。住居北側は、16号住居との重複により明瞭に出土地しなかったが、一部壁が確認されており、本住居が16号住居を切って存在したと考えられる。堆積土は微砂粒が全般にわたって多く検出されており、第1調査区出土の当該期住居と比較し、河川流水の影響を若干受けているものと考えられる。
- 形状・規模** 平面形は東西5.7m、南北5.85mの方形を呈す。壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がり、高さは平均3.0cmで、直径3.5cmの柱穴と思われるものが2ヶ所認められた。
- カマド** カマドは認められなかったが、北東コーナーにおいて焼上が高さ約1mにわたって確認された。

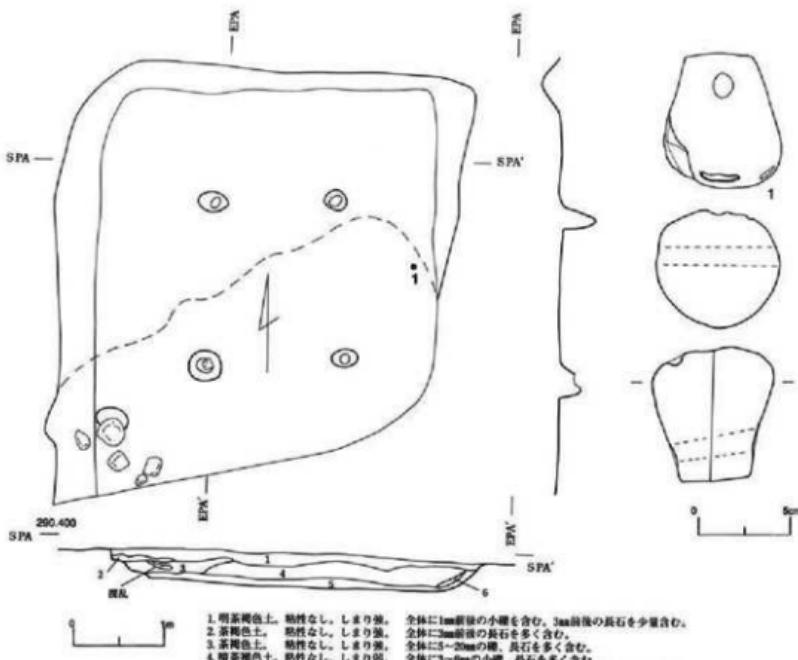
- 遺物** 1は土師器手捏ね土器で、口径3.9cm、器高5.7cm、底径5.7cmを測る。キメ細かく緻密で、明茶褐色を呈す。焼成は良好で、外面全体に磨きが施される。甌型を呈し、座りは不安定。
 2は土師質土器で、口径9.8cm、器高2.5cm、底径4.3cmの小皿である。12世紀初頭のもので、覆土上層より出土しているため堆積時に流れ込んだものと考えられる。胎土はキメが細かく、企畫母を多く含む。色調は茶褐色で焼成は良く、底部に糸切り痕が認められる。ロクロ回転右。
 3は口径14.6cm、器高14.7cm、底径8.3cmの土師器小型甌である。胎土はキメが粗く、色調は外面褐色、内面茶褐色である。焼成はやや不良で底部に木葉痕が見られる。
 4は土師器手捏ね土器で、口径9.1cm、器高9.8cm、底径7.2cmを測る。キメは粗く、粗雑な作りである。色調は外面褐色、内面茶褐色で、焼成はやや不良である。体部外側にヘラ削り、底部に木葉痕が取看される。
 5は須恵器環で、推定口径10cm、器高4cm、底径6cmを測る。胎土はキメが細かく、緻密で、青灰色を呈し、焼成は良好である。
 6は土師器甌の底部である。
 7は土師器甌の底部である。
 また、造構確認面において古錢8枚が出土している。
 他に磁石1点が出土している。(第8表参照)

16号住居跡(第8図・図版1・14)

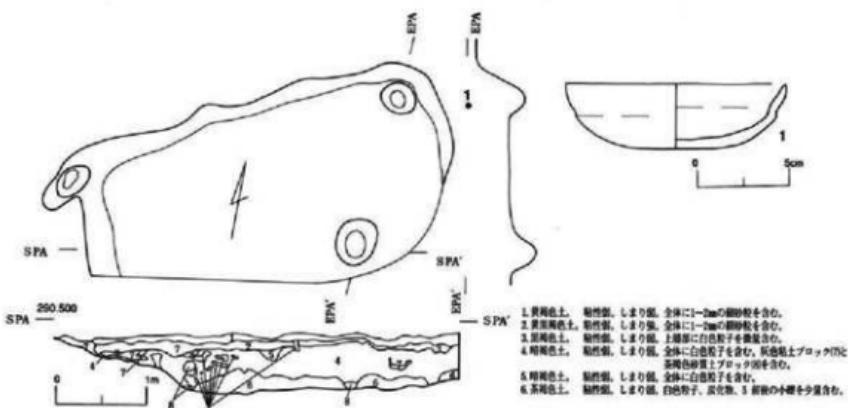
- 位置・概要** 第2調査区に位置し、9号・15号住居と重複関係にある。北壁は9号住居によって、南壁から東壁にかけては15号住居によって切られている。本住居内において15号住居北壁の一部が確認されている。堆積土は15号住居と同じである。
- 形状・規模** 平面形は、東西5.75m、南北5.6mの方形を成し、壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がり、高さは東西壁約30cm、南壁20cmである。柱穴は3ヶ所確認され、径平均4.0~5.0cmである。
- カマド** カマドは確認されなかった。
- 遺物** 1は土師器手捏ね土器で、口径4.8cm、器高3.1cm、底径1.4cmを測る。胎土はキメ粗く、砂粒・小石を多く含む。淡茶色を呈し、焼成不良。全体に厚く、不整形。
 2は土師器手捏ね土器で、口径5.3cm、器高3.4cm、底径2.4cmを測る。キメ粗く、砂粒・小石を多く含む。淡茶色を呈し、焼成不良。全体に厚く、不整形。
 3は土師器手捏ね土器で、口径5cm、器高3.7cm、底径3.5cmを測る。キ

メ粗く、砂粒・小石を多く含む。淡茶色を呈し焼成不良。全体に厚く、不整形。

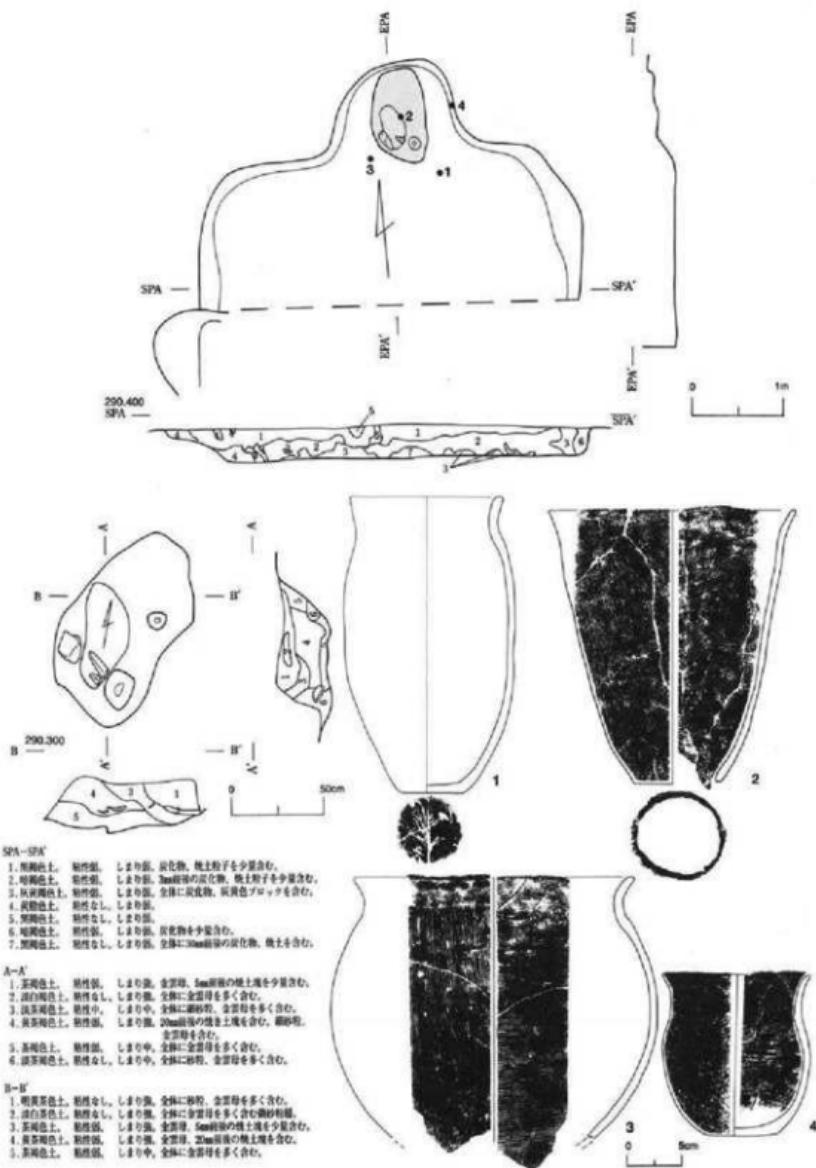
4は須恵器坏で、推定口径12.7cm、器高3.1cm、底径6.4cmを測る。
覆土上層より、土師器壺、壺片などが多く出土している。



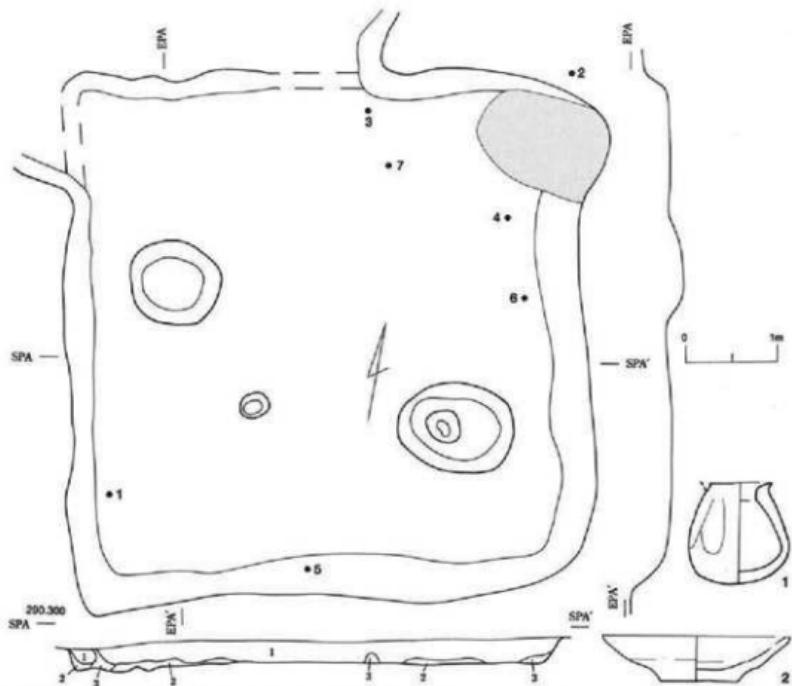
第4図 4号住居跡及出土遺物



第5図 5号住居跡及出土遺物



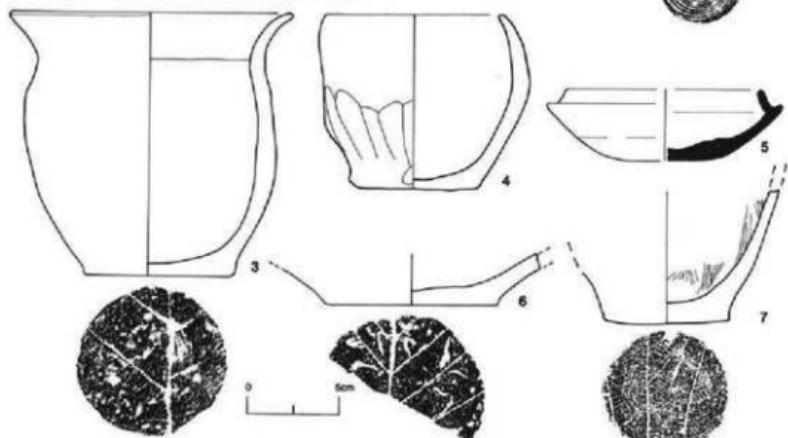
第6図 9号住居跡及出土遺物



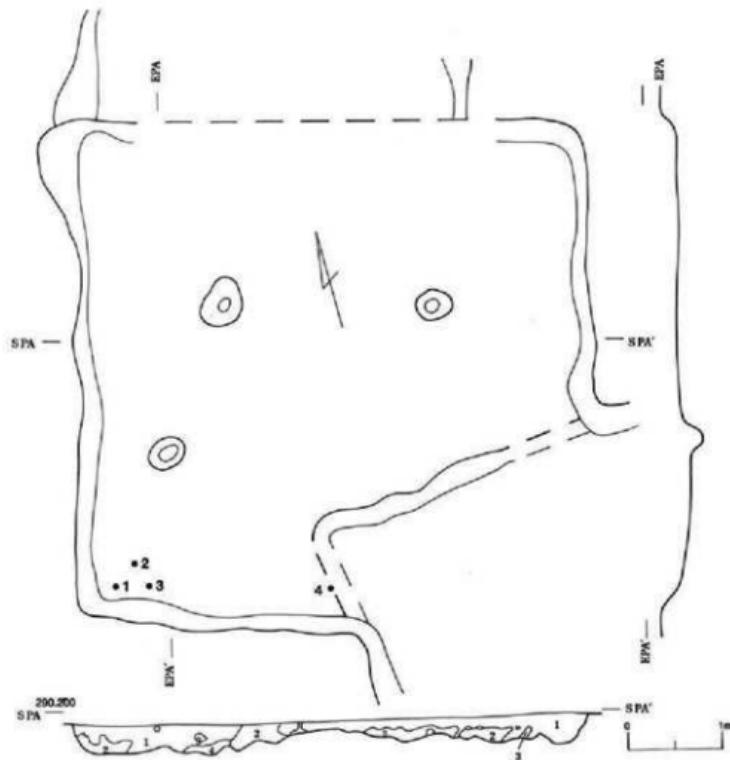
1.培養色土。粘性弱。しまり強。燒土粒子、炭化物粒子、30~40mmの種を少量含む。

2.培養色土上。粘性中。しまり弱。1~2mmも小塊を少量含む。

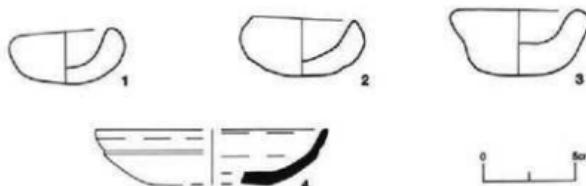
3.用耕褐色土。粘性弱。しまり中。1~2mmの小塊を多量に含む砂質層。



第7図 15号住居跡及出土遺物



1. 明黄褐色土。粘性弱。しまり強。全体に1mm前後の小礫を含む。燒土粒子、炭化物を少量含む。
2. 蘇褐色土。粘性弱。しまり強。明黄褐色土ブロック混入。
3. 明黄褐色土。粘性弱。しまり強。1mm前後の小礫を含む。
4. 明黄褐色土。粘性中。しまり強。全体に燒土、小礫を含む。



第8図 16号住居跡及出土遺物

2 平安時代

松ノ尾遺跡のなかで、もっとも多くの遺構がこの平安時代のものである。

1号住居跡（第9図、図版2・15）

位置・概要 第1調査区A-1グリッドに位置し、2号住居と重複関係にある。

遺構東側は、町道が南北に走り、調査区外となる。また、南側は2号住居によつて切られている。このため、本遺構の東壁および南壁は確認できなかった。遺構内は、砂粒層、花崗岩質の小砾が多く堆積し、河川氾濫の影響を受けていると思われ、残存状況はあまり良くなかった。

形状・規模 半円形は、東西3.6m、南北3.15mを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、高さ平均1.2cmである。径2.5cm、深さ1.4cmの柱穴が1ヶ所確認された。

カマド 確認されなかった。東側に設けられた可能性もある。

遺物 1は土師質小皿で、口径9.3cm、器高2.5cm、底径5.75cmを測る。胎土はキメ細かく、全体に金雲母を多く含む。色調は暗茶褐色で、焼成は良好である。底部に糸切り痕跡が認められ、ロクロ回転右。

2は土師質上器小皿で、口径8.5cm、器高2.75cm、底径4.6cmを測る。胎土はややキメが粗く、全体に金雲母を多く含む。色調は外面暗茶褐色、内面黒茶色で、焼成は良好である。底部に糸切り痕が認められ、ロクロ回転右。

3は土師質小皿で、口径9.1cm、器高2.6cm、底径5cmを測る。胎土はややキメが粗く、全体に金雲母を多く含む。色調は暗茶褐色で、焼成は良である。底部に糸切り痕が認められ、ロクロ回転方向は右である。

体部に径5mmの2個の穿孔を持つ。体部内面にうっすらと黒色に変色したヶ所が看取できることなどから、本遺物を灯明皿とした場合、孔は灯芯を通すために設けられたとする考えができる。ただ、明瞭な煤や灯芯の痕跡が確認されないためさらに詳細な分析調査が必要である。

4は土師質の坏で、推定口径13.7cm、器高5cm、推定底径6.4cmを測る。胎土はキメがやや細かく、全体に金雲母を多く含む。色調は暗茶褐色で、焼成は良好である。底部に糸切り痕を有す。

5は土師質の高台付坏で、口径14.5cm、器高5.7cm、底径7.5cmを測る。胎土はキメ細かく、全体に金雲母を多く含む。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。ロクロ回転方向右。

他に刀子1点が出土している。（第3章鉄製品参照）

2号住居跡（第9図、図版2）

位置・概要 第1調査区B-1グリットに位置し、1号住居と重複関係にある。

遺構東側は調査区外となる。このため、本住居の中心から南東半分は調査不可能であった。本住居は1号住居を切って存在した。遺構内は、砂粒が多く堆積し、花崗岩質の川原石も数点確認されているため、現荒川による氾濫の影響を受けているものと考えられる。

形状・規模 遺構の1/2が調査区外になるため、全体の形状などは明確にはならなかったが、確認された範囲では東西1.8m、南北4.15mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは約30cmで、径20~50cm、深さ平均15cmの柱穴3ヶ所が確認された。

カマド 確認されなかった。

遺物 上師質土器の破片が多く出土したが、図化できるものはなかった。

3号住居跡（第10・11図、図版2・15）

位置・概要 第1調査区A-8グリットに位置し、3号方形堅穴状遺構と重複関係にある。

遺構北側は、調査区外となり、西側は堅穴状遺構と切り合っているため、北壁及び西壁は確認されなかった。また、東壁北側も攪乱によって確認されなかった。住居内は、砂粒層が多く堆積し河川氾濫の影響がうかがえる。

形状・規模 北、西壁の確認ができなかったため、住居の規模等は明確ではないが、推定で東西4m、南北4.3mの方形を呈すものと考えられる。南壁は緩やかに立ち上がり、高さ25cmを測る。住居北側において5ヶ所の穴跡を確認したが、このうち柱穴と考えられるものは径40cm前後の3穴と思われる。

カマド カマドは、東壁南寄りに施設され、袖幅60cm、奥行約80cm程の掘り込みが認められる。右袖石が残存し石材は花崗岩である。最下層は焼土塊、炭化物が約4cmに渡り堆積していたが、火床面における全面的な焼土、及び袖石における被熱はあまり認められなかった。

遺物 1は上師器環で、口径11.2cm、器高4.6cm、底径3.9cmを測る。胎土はキメ細かく緻密で、色調は明茶褐色。焼成は良好、体部内、外面上部にナデ調整、外面下部にヘラ成形、底部に糸切り痕有り。ロクロ回転方向右。

2は土師器環で、口径11.2cm、器高4.25cm、底径3.3cmを測る。胎土はキメ細かく緻密で、色調は明茶褐色。焼成は良好で体部外面上部にナデ、下部にヘラ成形、底部に糸切り痕有り。ロクロ回転方向右。

3は土師器環で、口径14.3cm、器高5.5cm、底径4cmを測る。胎土はキメ細かく緻密で、色調は茶褐色。焼成は良好で、外面下部にヘラ成形、底部に糸切り痕が認められる。

4は灰釉陶器高台付环で、推定口径9.1cm、器高3.85cm、推定底径4.

6 cmを測る。キメ細かく、緻密。小石を微量含む。白灰色を呈し、硬質で焼成は良好。内面全体に施釉されている。

5は土師器環で、口径11.3cm、器高4.2cm、底径4.5cmを測る。胎土はキメ細かく緻密で、明茶褐色を呈す。焼成は良好で、外面下部にヘラ成形、口縁部に灯明煤が付着する。底部に一部糸切り痕が看取される。

6は土師器環で口径10.9cm、器高4.1cm、底径3.2cmを測る。胎土はキメ細かく、小石を微量含む。色調は明茶褐色で、焼成は良好である。外面下部にヘラ成形、底部にヘラ調整痕が看取される。

7は土師器蓋で、推定口径3.0cmを測る。キメやや粗く、金雲母を多く含む。色調は茶褐色を呈し焼成は良好。内面口辺部から体部にかけて横方向のハケ目が施される。外面口辺部は横ナデ仕上げ。体部に縦方向のハケ目が施される。

8は土筋壺瓶で、推定底径2.5cmを測る。キメやや粗く、金雲母を多く含み、茶褐色を呈す。焼成は良好で、内面横方向のハケ目、3.0cm間隔で粘土輪積痕が看取される。外面は縦方向のハケ目が施される。

6号住居跡（第12図、図版2）

位置・規模 第1調査区B-9グリットに位置する。

本住居内は、径2.0～5.0cmの花崗岩礫が一面に堆積しており、河川氾濫などの影響によるものと思われる。また、住居北西コーナ付近は、砂粒層を掘り下げて造られており、北壁及び西壁の一部、また、その周辺の床面には砂粒、礫が多く認められる。

形状・規模 平面形は東西3.15m、南北2.85の方形を呈す。北壁はやや垂直に立ち上がるが、それ以外は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。高さは平均3.0cmを測る。柱穴は確認されなかった。

カマド カマドは東壁南寄りに施設され、袖幅7.0cm、奥行約9.0cmほどの掘り込みが認められる。両袖とも2枚の花崗岩の袖石が残り、炊口部中央やや奥に径1.0cm、長さ2.0cmの支脚が立てられた状態で出土した。カマド内中心部はほぼ単層で粘性は無く、砂粒を多く含み、5～10mmの焼土を含んだ粘土ブロックが疊らに検出された。

遺物 1は土師器環で、推定口径10.8cmを測る。胎土はキメ細かく、緻密。色調は赤褐色で、焼成は良好である。体部外面下部にヘラ成形、内面に放射状暗文を有す。

2は土師器蓋で、推定口径12.7cmを測る。胎土はキメ細かく、緻密。色調は赤褐色で焼成は良好である。内外面に渦巻状暗文を有す。

3は土師器蓋である。胎土はキメが細かく、微砂粒を多く含む。カマド内より出土している。

4は土師器壺で、推定口径21cmを測る。胎土はキメやや粗く、色調は赤褐色を呈す。焼成はやや悪く、口縁部に横ナデが見られる。

7号住居跡（第13・14図、図版3・15）

位置・概要 第1調査区A-11、B-11グリットに位置する。

本住居内第2、3層は、砂粒を多く含み、粘性は無く、径20～30cmの花崗岩礫が多く堆積する。このため、河川氾濫等の影響を受けているものと考えられる。

形状・規模 平面形は、東西3.75m、南北4.15mの方形で、壁は傾きをもって緩やかに立ち上がり、高さは平均35cmを測る。北西コーナーに貯蔵穴と考えられる径1m、深さ40cmの穴を持つ。

カマド カマドとする明確な施設は確認できなかったが、北壁やや東寄りと東壁南寄りに焼土が確認された。北壁の焼土は、壁から外にかけて確認され、北カマドかと考えたが焼土範囲が上層のみで明確にはできなかった。東壁側のものは、径30cmにわたり確認された。

遺物 1は土師質土器の小皿で、口径8.4cm、器高1.8cm、底径5cmを測る。胎土はキメ粗く砂粒を多く含み、全体に金雲母が認められる。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。口縁の一部に灯明の煤が付着する。底部に糸切り痕があり、ロクロ回転方向は右である。

2は土師質上器の小皿で、口径8.5cm、器高2.4cm、底径3.7cmを測る。キメはやや粗く、全体に金雲母を含む。色調は明茶色で一部媒のためと思われ、黒色を呈す。焼成は良好、底部糸切り痕あり。ロクロ回転右。

3は土師質土器の小皿で、口径8.3cm、器高2.6cm、底径4.3cmを測る。胎土、色調、焼成、底部様相、ロクロ回転方向は1に同じ。

5は土師質土器壺で、口径12.2cm、器高5.35cm、底径5.3cmを測る。胎土は1に同じ。色調は明茶褐色で焼成は良好。口縁部に2ヶ所灯明媒痕が認められ、内1ヶ所には灯芯と思われる付着物が看取された。底部様相、ロクロ回転は1に同じ。

4は土師器壺で、口径13.1cm、器高4.45cm、底径5.7cmを測る。胎土はキメ細かく、緻密で全体に微量の雲母が混入する。茶褐色で内面一部黒色。焼成は良好で、内面は磨きによる調整が施される。底部に糸切り痕有り。

6は土師器壺で口径12.6cm、器高3.9cm、底径4cm。胎土はキメ細かく、全体に微量の雲母を含む。茶褐色で、焼成は良好。体部外面下部にヘラ成形、底部ヘラ整形。

7は土師器壺で、口径14.4cm、器高5.3cm、底径5.6cmを測る。全体に1mm前後の小石を含み、キメはやや粗い。色調は茶褐色で、焼成は良好。体部

外面下部にヘラ削り、底部へラ整形。一部糸切り痕が看取される。

8は土師器壺の底部。底径7. 9cmでキメ粗く、小石を多く含む。茶褐色を呈し、底部に木葉痕が看取される。

9は土師器壺の口辺部で、推定口径31. 6cm。キメやや粗く、全体に小石、金雲母が含まれる。口縁は折り返しの二重口縁で、口辺部、体部内面が横方向、外面体部に縱方向のハケメが看取できる。色調は暗茶褐色。

10は土師器皿で、口径13. 4cm、器高1. 9cmで、胎土はキメ細かく小石を若干含む。茶褐色を呈し、焼成は良好。体部外面に『燐』の墨書が対になつて認められる。玉縁口縁

11は土師器壺で、口径13. 1cm、器高4cm、底径3. 2cmを測る。キメは粗く、1mm前後の長石を全体に含む。淡茶色で焼成は良、体部外面に『燐』と『燐』の墨書が対で認められる。『燐』の字の下部が欠損しているため、おそらく『燐』と同一の字と考えられる。体部外面下部にヘラ削り、底部に糸切り痕が見られる。

8号住居跡（第15図、図版3）

位置・概要 第1調査区A-19、20グリットに位置し、29号土坑と重複関係にある。住居東壁は、29号土坑によって切られている。

各層に炭化物や焼土などが混入する。

形状・規模 平面形は東西4. 2m、南北3. 3mのやや長方形を呈し、壁はなだらかに立ち上がり、高さ2. 5~3. 0cmを測る。柱穴は径約1. 8cm、深さ約1. 2cmのものが各コーナーに1ヶ所確認された。

カマド 東壁南寄りに設けられ、袖幅約5. 0cm、奥行5. 0cmの掘り込みが認められる。袖石や粘土などの構築材は認められなかった。堆積土第1層中には5~5. 0mmの焼土塊が多く混入し、粘性は強。しかし、下層には焼土など混入せず砂粒層であった。

遺物 土師器小片が数点出土した。

10号住居跡（第16・18図、図版3・16）

位置・概要 第1調査区C、D-16、17グリットに位置し、11号住居と重複関係にある。

堆積状況などから、11号住居に先行するかたちで10号住居が存在したものと考えられる。南壁は明確に確認されなかった。北、西壁は11号住居と重複する。遺構南側で2枚重の皿が出土している。

形状・規模 平面形は東西4. 85m、南北4. 6mの方形である。東西壁はやや角度をもち、北壁はなだらかにそれぞれ立ち上がる。高さは平均3. 5cmを測る。柱穴は確

認されなかった。カマドは確認されなかった。

遺物

1は土師器皿で、口径12.3cm、器高2.7cm、底径4.5cmを測る。キメやや粗く、砂粒、長石を全体に多く含む。色調は明茶褐色で、焼成は良好、外面白辺部ナデ仕上げ、体部下半にヘラ削り、底部にヘラ調整が見られる。外面口辺部に『千』の墨書がある。本遺物は、試掘調査時に正位二枚重で出土したもので、このうちの上にあったものである。

2は土師器皿で、口径11.7cm、器高2.4cm、底径4cmを測る。キメ細かく茶褐色を呈す。焼成は良好で、体部外面下半ヘラ削り、底部ヘラ調整。二枚重の下にあったものである。

3は土師器皿で、口径12.3cm、器高2.7cm、底径3.8cmを測る。胎土はキメ細かいが1mm前後の小石を全体に含む。色調は黄茶褐色で焼成は良好である。体部外面下半ヘラ削り、底部糸切り痕有り。玉縁口縁。

4は土師器皿で、口径11.2cm、器高2.8cm、底径3.5cmを測る。キメ細かく緻密。色は茶褐色を呈し、焼成は良好である。口縁部内外面ナデ仕上げ、体部外面ヘラ削り、底部ヘラ調整。

5は土師器皿で、口径12.6cm、器高2.45cm、底径3.8cmを測る。キメ細かく緻密。小石を小量含む。色調は明茶褐色で焼成は良好。体部ヘラ削り、底部ヘラ調整。玉縁口縁。

6は灰釉陶器高台付皿で、推定口径13.5cm、器高2.6cm、推定底径6.5cmを測る。キメ細かく緻密で硬質。色調は灰白色で焼成は良好。

7は土師器皿で、口径12cm、器高4.2cm、底径3.6cmを測る。胎土はキメ細かく、色調は茶褐色を呈す。焼成は良好で、体部外面下半ヘラ削り、底部ヘラ調整を施す。

8は土師器皿で、口径12.2cm、器高4.5cm、底径4.2cmを測る。キメ粗く、全体に砂粒、小石を多く含む。色調は明茶褐色で、焼成は良。口縁から体部にかけてナデ仕上げ。底部ヘラ調整。

9は土師器皿で、口径11.6cm、器高4.7cm、底径4.7cmを測る。胎土はキメ細かく緻密で、全体に赤色粒子を含む。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。口辺部は横ナデ仕上げ、体部外面下半に斜めヘラ削りが認められる。

10は土師器皿で口径12.4cm、器高4.2cm、底径4.5cmを測る。胎土はキメ細かく緻密で、小量の赤色粒子が見られる。色調は暗茶褐色を呈す。焼成は良好で、口辺部構ナデ、底部ヘラ成形が看取される。玉縁口縁。

11は土師器皿で、口径14cm、器高4.6cm、底径5cmを測る。胎土はキメ細かく、赤色粒子及び小石を小量含む。色調は外面明茶褐色、内面は黒色である。焼成は良好で、体部外面下半に斜めヘラ削りが施される。内黒土器

12は土師器皿で、口径14.6cm、器高5.45cm、底径5.3cmを測る。

キメはやや粗く、全体に砂粒、小石を多く含む。色調は茶褐色で、焼成は良。体部ヘラ成形、底部ヘラ調整を施す。

11号住居跡（第16・18図、図版3・17）

位置・概要 C、D-16、17グリットに位置し、10号住居と重複関係にある。

本住居の2/3は10号住居によって切られる。遺構南壁にて2枚重の坏が出土している。

形状・規模 平面形は、東西6.75m、南北5.7mのやや長方形を呈す。壁は東西、南北ともなだらかに立ち上がり、高さは約25cmを測る。西側南寄りの壁及び柱穴は確認されなかった。

カマド カマド施設は明確にできなかった。しかし、東壁南寄りにおいて南北90cm、東西1m、深さ20の範囲で焼上、炭化物層が確認された。構築材等は出土しなかつたが、他住居のカマド位置の状況から同施設であった可能性は高い。

遺物 1は土師器皿で、口径12cm、器高2cm、底径3.8cmを測る。キメ細かく緻密で、茶褐色を呈す。焼成は良好で、体部外面下半に横方向帯状のヘラ削りが看取される。下縁口縁

2は土師器皿で、口径11.7cm、器高2.1cm、底径4.9cmを測る。胎土はやや粗く、微粒の長石、赤色粒子を含む。色調は焦茶褐色を呈し、口縁は下縁である。焼成は良好

3は土師器皿で、口径12.2cm、器高2.3cm、底径3.2cmを測る。胎土はキメやや粗く小量の長石及び赤色粒子を含む。色調は褐色を呈し、体部外面下半に斜め方向のヘラ削りを行し、焼成は良好。

4は土師器皿で、口径12.6cm、器高2.7cm、底径5.1cmを測る。キメやや粗く、小石、赤色粒子を小量含む。焼成は良好で、色調は淡茶褐色を呈す。

5は土師器皿で、口径12.6cm、器高2.75cm、底径4.4cmを測る。キメはやや粗く、小石、赤色粒子を小量含む。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。

6は土師器皿で、口径12.6cm、器高2.8cm、底径4.5cmを測る。キメ細かく長石および小量の赤色粒子を含む。茶褐色を呈し、焼成は良好である。体部外面下半に斜めヘラ削りが施される。下縁口縁

7は土師器皿で、口径11.7cm、器高3.3cm、底径5.4cmを測る。キメはやや粗く、長石及び赤色粒子を小量含む。淡茶褐色を呈し、焼成は良。口縁部は横ナデ仕上げ、体部外面下半に細く斜めにヘラ削りが施される。ロクロ回転方向左。

8は土師器坏で、口径11.5cm、器高4.4cm、底径4.5cmを測る。胎土はキメ粗く、長石及び小量の赤色粒子を含む。色調は明茶褐色、焼成は良である。

口辺部は横ナデ仕上げが看取され、体部外面下半に斜めヘラ削りが施される。

9は土師器環で、口径13.4cm、器高5.3cm、底径5.8cmを測る。キメやや粗く、微砂粒を含む。色調は外面茶褐色、内面灰茶色を呈し、焼成は良好。体部外面下半にヘラ削り、内面口辺部に帯状の暗灰色が見られる。

10は土師器環で、口径14.7cm、器高5.2cm、底径5.2cmを測る。胎土はキメ細かく緻密で、赤色粒子を小量含む。色調は赤褐色を呈し、口辺部は横ナデによる仕上げ、体部外面下半に斜めヘラ削り、底部は糸切り後ヘラ成形が施される。焼成は良好。

11は土師器環で、口径13.6cm、器高5.4cm、底径5.5cmを測る。胎土はキメやや細かく、微砂粒を含む。色調は茶褐色で焼成は良好。体部外面下部にヘラ削り、底部ヘラ調整、内面口縁部に一部ヘラナデ痕が看取される。内面全体に放射状暗文、口辺部に灯明模が付着する。2枚重土器の上の物。

12は土師器環で、口径11.6cm、器高4.5cm、底径4.85cmを測る。胎土はキメ細かく、緻密。1mm前後の小石が疎らに混入する。色調は明茶褐色で、焼成は良好。体部外面ヘラ削り、底部ヘラ調整。2枚重土器の下方の物。

12号住居跡（第17・19図、図版4・18）

位置・概要 本住居は、C-14・15、D-14・15グリットに位置する。住居北壁覆土上層より銅製の小仏像が、また住居北方約1.8mの地点で金銅製の小仏像が出土している。10・11号住居同様遺物も多く出土し、南壁復上より土師器皿が正位のかたちで3枚重なった状態で出土している。遺構規模も大きい。

形状・規模 平面形は東西4.9m、南北5.25mの正方形を呈す。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は1.7cmを測る。北東コーナーに直徑約8.0cm、深さ2.8cmの穴跡を有す。

カマド カマド施設は確認されなかった。

遺物 1は土師器皿で口径12.5cm、器高2.3cm、底径3.5cmを測る。胎土はキメ細かく緻密で、明茶褐色を呈し、焼成は良好である。口縁から口辺部にかけて横ナデ仕上げ、体部外面下半に斜め方向ヘラ削りが施される。底部糸切り痕有り。体部外面に逆位に「田」の墨書きがある。3枚重ね出土の上位のもの。玉縁口縁。

2は土師器皿で口径12.8cm、器高2.5cm、底径4.5cmを測る。キメ細かく緻密で微量の長石、赤色粒子を含む。明茶褐色を呈し、焼成は良好である。口縁から口辺にかけて横ナデ仕上げ、体部外面下半に斜め方向ヘラ削り。底部ヘラ成形で玉縁口縁。3枚重ね出土の中位のもの。

3は土師器皿で、口径12cm、器高2.5cm、底径5cmを測る。キメ細かく緻密で赤色粒子を小量含む。明茶褐色で内面に一部灰色がかかる。焼成は良好で、

口縁から口辺にかけて横ナデ仕上げ、体部外面は斜め方向にヘラ削りが施される。玉縁口縁で、底部は糸切り後のヘラ調整が看取される。3枚重ね出土の下位のもの。

4は土師器皿で、口径13cm、器高2.3cm、底径4.9cmを測る。キメ細かく緻密で赤色粒子を微量に含む。明茶褐色で焼成は良好。口縁から口辺にかけて横ナデ仕上げで、底部糸切り後ヘラ調整が施される。玉縁口縁

5は土師器皿で、口径12.4cm、器高2.65cm、底径4.1cmを測る。キメ細かく緻密で赤色粒子を小量含む。明茶褐色で焼成良好、口辺部横ナデ仕上げ、外面体部下半は斜め方向のヘラ削り。玉縁口縁

6は土師器皿で、口径13cm、器高2.95cm、底径5cmを測る。キメ細かく赤色粒子を多く含む。明茶褐色を呈し焼成は良好。口辺部横ナデ仕上げ、外面体部下半は斜め方向にヘラ削りが施され、底部は糸切り後ヘラ成形。

7は土師器皿で、口径12.3cm、器高2.75cm、底径4.3cmを測る。キメ細かく緻密で、1mm前後の小石及び小量の赤色粒子を含む。明茶褐色を呈し焼成は良好。内面口辺部は全体にヘラ成形、外面口辺部は横ナデ仕上げ、体部下半は斜め方向のヘラ削りが施され、底部はヘラ成形。

8は土師器皿で、口径12.4cm、器高2.75cm、底径3.8cmを測る。キメ細かく緻密で赤色粒子を小量含む。色調は明茶褐色を呈し、焼成は良好。口辺部ナデ仕上げ、外面体部下半は斜め方向のヘラ削りが施される。底部は糸切り後ヘラ成形。

9は土師器皿で、口径12.4cm、器高3.2cm、底径4.5cmを測る。キメ細かく、石英、長石、赤色粒子を小量含み、色調は明茶褐色を呈す。焼成は良好で、口縁部横ナデ仕上げで、外面体部下半は斜め方向にヘラ削りが施され、底部は糸切り後、ヘラ成形。

10は土師器皿で、口径12.1cm、器高2.9cm、底径4.2cmを測る。キメ細かく、緻密で、赤色粒子を小量含む。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良好。外面体部下半斜め方向ヘラ削り、底部糸切り後ヘラ成形。外面体部に「も」の墨書きあり。ロクロ回転右。

11は土師質土器の小皿で、口径9.2cm、器高2.5cm、底径4.7cmを測る。キメやや粗く、金雲母を多く含む。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好。底部糸切りでロクロ回転右。

12は土師器皿で、口径12cm、器高4cm、底径5.1cmを測る。キメは外面粗く、内面は黒色処理によって細かい。雲母、石英、小石を含み、色調は内面黒色、外面明茶色を呈す。焼成は良好で内面に放射状暗文が施される。底部糸切り痕あり。内黒土器

13は土師器皿で、口径11.9cm、器高3.8cm、底径4.6cmを測る。キ

メ細かく、1mm前後の小石、赤色粒子、石英を少量含む。色調は明茶褐色を呈し、焼成は良好。口辺部横ナデ仕上げ、外面体部下半は斜め方向のヘラ削り。底部は糸切り後ヘラ成形。ロクロ回転右

14は土師器壺で、口径13.3cm、器高5.85cm、底径4.25cmを測る。キメ細かく緻密で、赤色粒子を少量含む。明茶褐色を呈し、焼成良好。口辺部横ナデ仕上げ、外面体部下半は斜め方向のヘラ削り。底部ヘラ成形。

15は土師器壺で、口径14.8cm、器高5.85cm、底径4.7cmを測る。キメ細かく、色調は茶褐色を呈し、焼成は良好。口辺部ナデ仕上げ。外面体部下半は斜め方向のヘラ削り。底部は糸切り後ヘラ成形。

16は土師器壺で、推定口径31.6cmである。キメやや粗く、長石、金雲母を少量含む。色調は黒茶色を呈し、焼成は良。内面口辺部から体部にかけて横方向のハケ目、外面体部は縦方向にハケ目が施される。

17は土師器小型甕で、推定口径13.1cm、存在器高7.3cmを測る。キメやや粗く、長石を含む。色調は暗茶褐色を呈し、焼成は良。口縁部ナデ仕上げ。内面横方向のハケ目を施す。

13号住居跡（第20図）

位置・概要 第3調査区に位置する。北壁は5号溝によって切られ、西壁北側も擾乱を受けている。

形状・規模 平面形は東西3.75m、南北約4.1mのやや長方形を呈す。壁高は北壁を除き約2.2cmを測り、南西及び南東コーナーと共に直径3.0cm、深さ2.5cmの柱穴が認められた。

カマド 認められなかった。

遺物 図化できるものは出土しなかった。

第14号住居跡（第21・22図、図版5・19）

位置・概要 A-16・17グリットに位置し、17号住居跡と重複関係にある。切り合いでから、14号住居が先行し、その後17号住居が造られたと考えられる。遺物量も多くない。

形状・規模 住居平面形は東西3.6m、南北3.5mのほぼ正方形を呈す。壁高は住居東側が17号住居によって壊されているが、一部残存している箇所でみると、東西平均3.2cm、南北は北側で4.0cm、南側で3.2cmを測り、比較的残りは良好である。柱穴は北側2ヶ所、中央東よりに1ヶ所確認でき、深さは北側2ヶ所が1.0cm、残りは1.4cmである。また、中央や西よりに直径8.0cm、深さ1.4cm、その南側に直径1m、深さ約2.0cmの土坑が認められる。これが住居に伴う遺構であるかは不明である。

- カマド** カマドについては確認できなかった。住居南東側が切り合っているため、この場所にあった可能性もある。
- 遺物** 1は土師質土器小皿で、口径8.3cm、器高1.8cm、底径1.7cmを測る。キメやや細かく金雲母を多く含む。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好で、底部に径9mmの凹形に近い欠損部がある。糸引き痕あり。
2は土師質上器小皿で、口径8.9cm、器高2.1cm、底径4.2cmを測る。キメ細かく金雲母を多く含む。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好。底部糸切り痕あり。ロクロ回転右。
3は土師質土器小皿で、口径9.5cm、器高2.5cm、底径4.9cmを測る。キメやや粗く、金雲母を多く含む。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好。底部糸切り痕あり。ロクロ回転右。
4は土師器蓋で、底径7.8cmを測る。キメやや細かく、色調は外面暗茶色、内面茶褐色を呈す。焼成は良好で、外縁方向のハケ口、内面は横方向のハケ目後縁方向にヘラみがきが看取される。底部木葉痕。上半部を欠損する。

第17号住居跡（第23図、図版5・19）

- 位置・概要** A-16グリットに位置し、14号住居と重複関係にある。切り合いから14号住居が先行していたと考えられる。14号住居に比べ遺物はやや多い。
- 形状・規模** 住居平面形は、東西、南北ともに3.55mを測り正方形を呈す。壁高は東西平均3.2cm、南北平均3.0cmの高さであるが、西壁は、14号住居との切り合いにより鮮明に壁を確認することはできなかった。また、南壁は北、東壁と異なり壁高は5cmあまりで残存はよくない。柱穴と思われるものは5ヶ所確認され、北壁側のものが深さ約2.0cmで、その他は1.0cm程度であった。土坑は東壁側で直径8.0cm、深さ4.0cmのものが確認された。
- カマド** 明確にカマドとなる施設は確認されなかったが、北壁東より直徑約3.0cm、深さ4.0cmの焼土を含む掘り込みが発見された。
- 遺物** 1は土師質土器小皿で、口径8.2cm、器高1.9cm、底径2.9cmを測る。キメやや粗く、金雲母を多く含む。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好。底部糸切り痕あり。ロクロ回転右。
2は土師質土器耳状皿で、最大口径7.9cm、器高2.8cm、底径3.2cmを測る。キメ細かく、金雲母を多く含む。色調は暗茶褐色を呈し、焼成は良好。口縁は対をなす部分が1ヶ所双方体部から内側に折り曲げられる。底部はやや柱状を呈し、糸切り痕がある。
3は土師質土器小皿で、口径8.2cm、器高2.4cm、底径4.1cmを測る。キメ細かく、金雲母を含む。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好。底部糸切り痕あり。ロクロ回転右。

4は土師質土器小皿で、口径9.7cm、器高2.9cm、底径5.3cmを測る。キメ細かく、金雲母を多く含む。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好。内面に一周段を持つ。底部糸切り痕あり。

5は土師質土器柱状高台付皿で、口径8.6cm、器高2.9cm、底径4.6cmを測る。キメ細かく緻密で、金雲母を含む。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好。底部に糸切り痕あり。

6は土師質土器杯で、口径1.3.2cm、器高4.4cm、底径5.7cmを測る。キメ細かく、金雲母を多く含む。色調は茶褐色を呈し焼成は良好。底部に糸切り痕あり。ロクロ回転右。

7は土師器甕で、底径9.1cmを測る。キメやや粗く長石、金雲母を多く含む。茶褐色を呈し焼成は良好。内面横方向のハケ目、外縁方向のハケ目を施す。底部木葉痕有り。

18号住居跡（第24図、図版5）

位置・概要 A-18グリットに位置する。住居の北側は調査区外になるため、住居南側のみの調査となった。このため遺物量も少數である。

形状・規模 住居の $\frac{1}{3}$ は調査区外になるため、全容は明らかにできなかったが、確認できた範囲で、南辺東西3.6m、西辺南北1.5mである。南辺は完全に確認されたため、東西、南北とも3.6m前後の方形を呈すと推定される。柱穴は確認されなかった。壁高は、南壁で2.6cm、東西壁は3.2cmを測る。

カマド 確認されなかった。

遺物 遺物については、土師器杯片、土師器甕片の2点のみである。

19号住居跡（第25・26図、図版6・19）

位置・概要 D-18、19グリットに位置する。南側は調査区外にあたる。形状は一般的な住居と比べ異型を呈すが、出土遺物などから、住居とした。

形状・規模 東西平均4.5mで、南北については南壁が調査区外により確認されていないため明確にできないが、北壁から南側までは4mを測る。平面形は台形状を呈す。壁高は東西平均1.2cm、北壁2.0cmを測る。柱穴は確認されなかった。北壁やや東よりに直径9.0cm、深さ2.0cmの円形状の土坑が確認された。

カマド 確認されなかった。

土器 1は土師器鉢で、口径1.6.2cm、器高1.0.1cm、底径6.2cmを測る。キメ細かく、小石、長石、石英を多く含む。色調は明茶褐色を呈し、焼成は良。外縁部は横方向、底部下は縦方向にハケ目が看取できる。

2は土師器小型甕で、口径1.4cm、器高1.8.8cm、底径6.2cmを測る。石英、長石を含み、色調は暗茶褐色を呈す。焼成は良好で口縁部全体にヘラなどに

よる刻みがあり、外面口辺部は横ナデ仕上げ、体部は縦方向のハケ目が認められる。

3は土師器皿で、口径12.3cm、器高2.7cm、底径3.5cmを測る。キメ細かく緻密で、赤色粒子を多く含む。色調は明茶褐色を呈し、焼成は良好。体部下方にヘラ削りが一周施される。

4は土師器皿で、口径11.3cm、器高4.6cm、底径4.75cmを測る。キメ細かく緻密で、赤色粒子を多く含む。色調は明茶褐色を呈し、焼成は良好で外面体部下半は斜め方向のヘラ削りが施される。

5は土師器皿で、口径11.6cm、器高4.3cm、底径3.7cmを測る。キメ細かく緻密で、赤色粒子を多く含む。色調は明茶褐色を呈し、焼成は良好。外面体部下半に斜め方向のヘラ削りが施される。

6は土師器皿の口辺部から頸部にかけてである。砂粒、長石を多く含み、キメやや細かい。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好。頸部下方にヘラによる刻み文が施された粘土紐が一周する。

7は土師器皿で、口径22.6cm、器高2.9.2cm、底径9cm、体部最大径2.4cmを測る。キメやや粗く、長石、石英を多く含む。茶褐色を呈し、焼成は良好。内面に横方向のハケ目、外面口辺部縦方向、体部に斜め方向のハケ目が施される。底部木葉痕あり。

8は土師器皿で、口径3.3.1cm、現存器高2.4cmを測る。キメやや粗く砂粒、靈母を多く含む。暗茶色を呈し、焼成は良好。内面体部上方に一部横方向のハケ目が看取される。

20号住居跡（第27図、図版6・19）

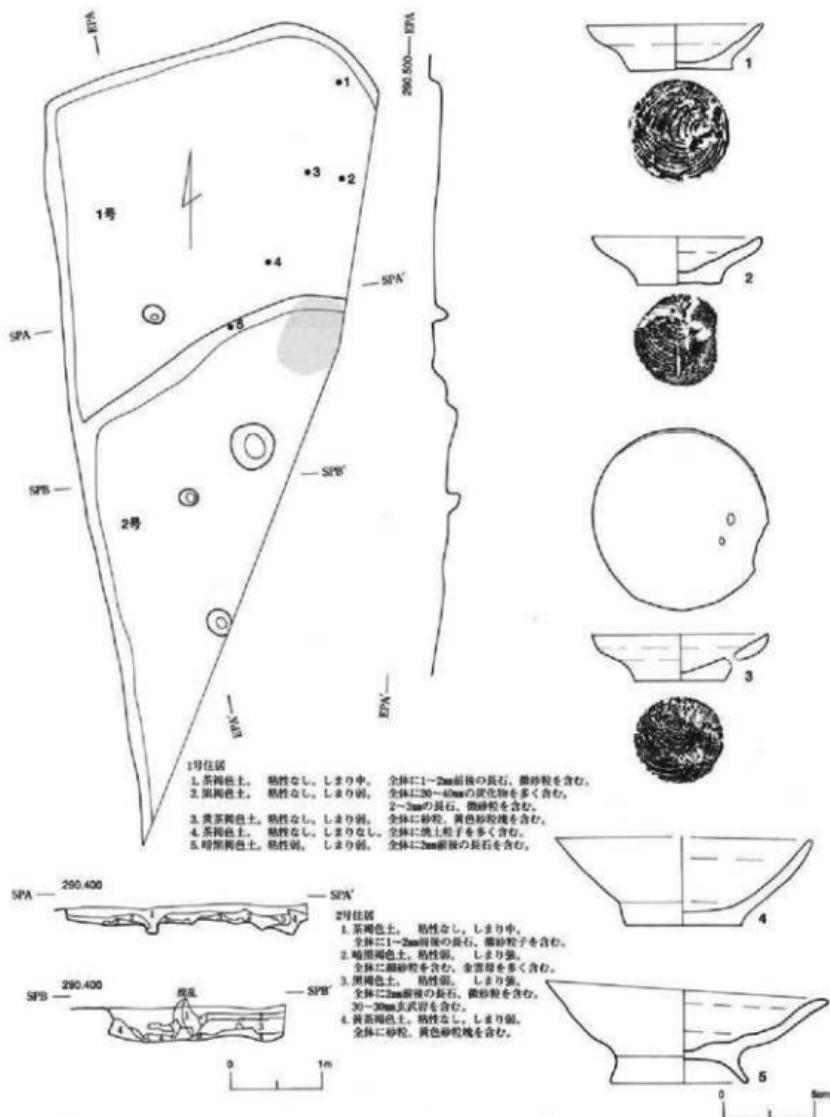
位置・概要 C-1.8、1.9グリットに位置する。遺物量は少ない。

形状・規模 住居平面形は東西3.8m、南北3.75mのやや正方形を呈す。壁高は東側が落ち込み部と切り合い関係になるため明瞭に確認されず、約5cm、西壁は2.3cm、北壁は比較的残存が良く約3.0cm、南壁は1.2cmを測る。柱穴は確認されなかった。南西コーナーよりに直径8.5cm、深さ1.8cmの円形上坑が確認された。

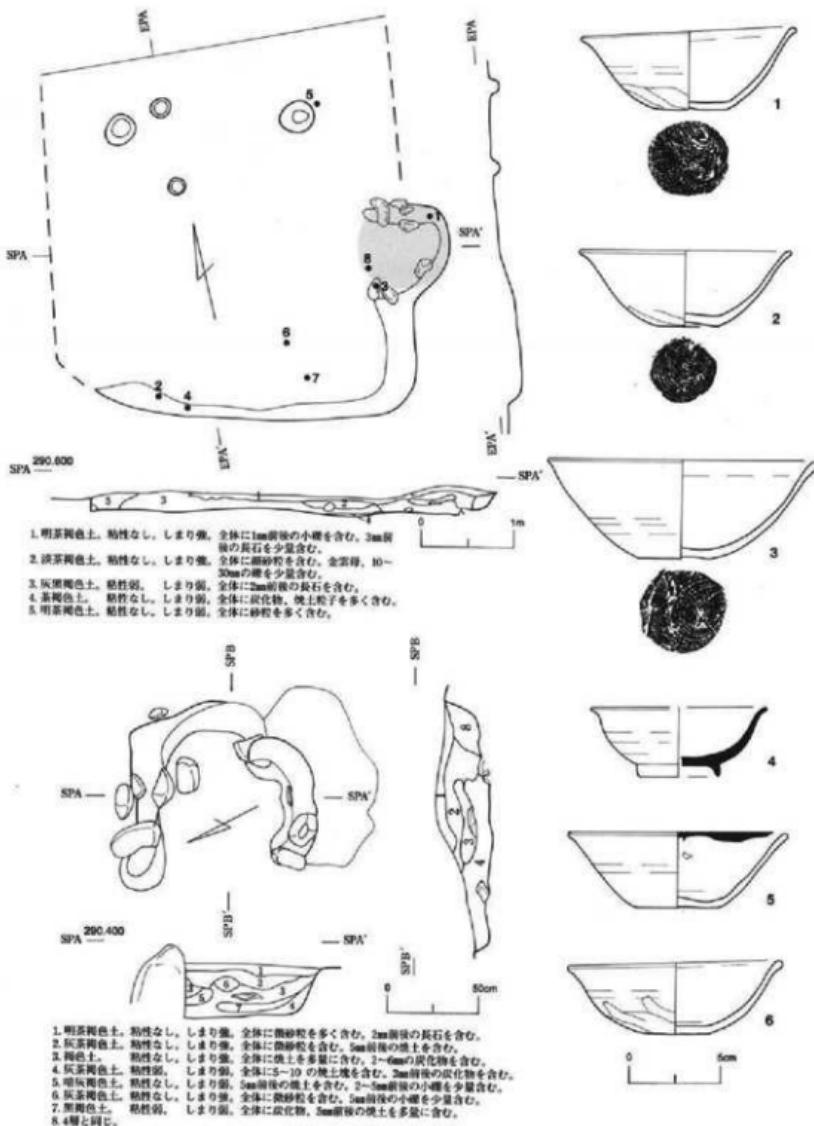
カマド カマドは確認されなかった。

土器 1は土師器皿で、口径12.7cm、器高2.2cm、底径6.2cmを測る。キメ細かく緻密で、赤色粒子を小量含む。色調は明茶褐色を呈し、焼成は良好。内面に渦巻き状暗文が施され、底部に糸切り痕あり。

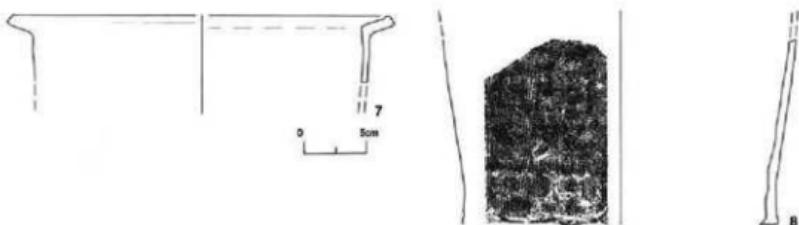
2は土師器皿で、推定口径11.5cm、器高4.1cm、推定底径4.3cmを測る。キメ細かく赤色粒子、石英を含む。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好で内面体部にうっすらと放射状暗文が施され、内・外面口縁部は横ナデ仕上げ、外面体部下半に斜め方向のヘラ削りが施される。底部はヘラ成形。



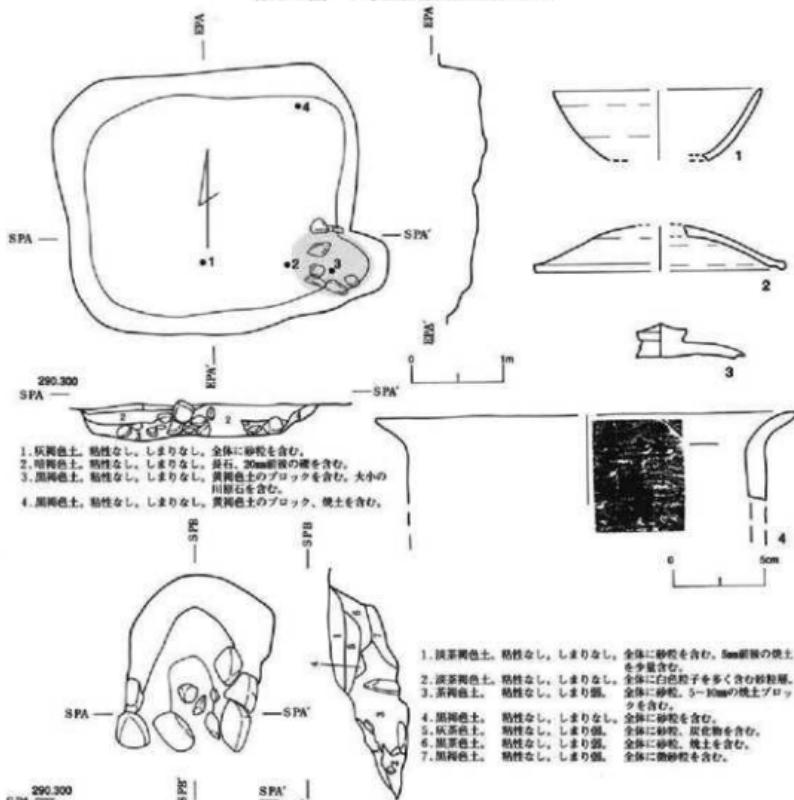
第9図 1号・2号住居跡及出土遺物



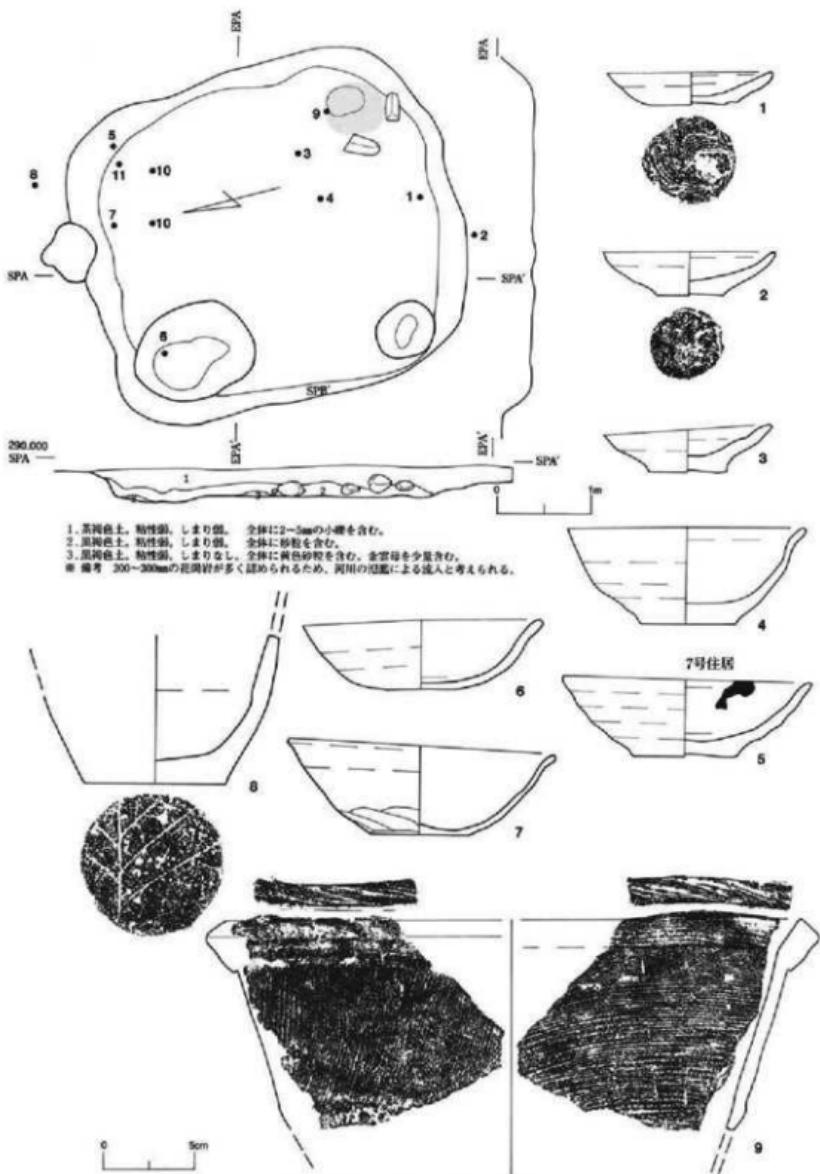
第10図 3号住跡及出土遺物



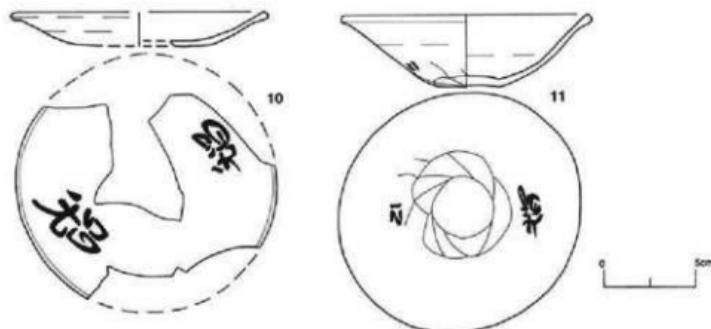
第11図 3号住居跡出土遺物（2）



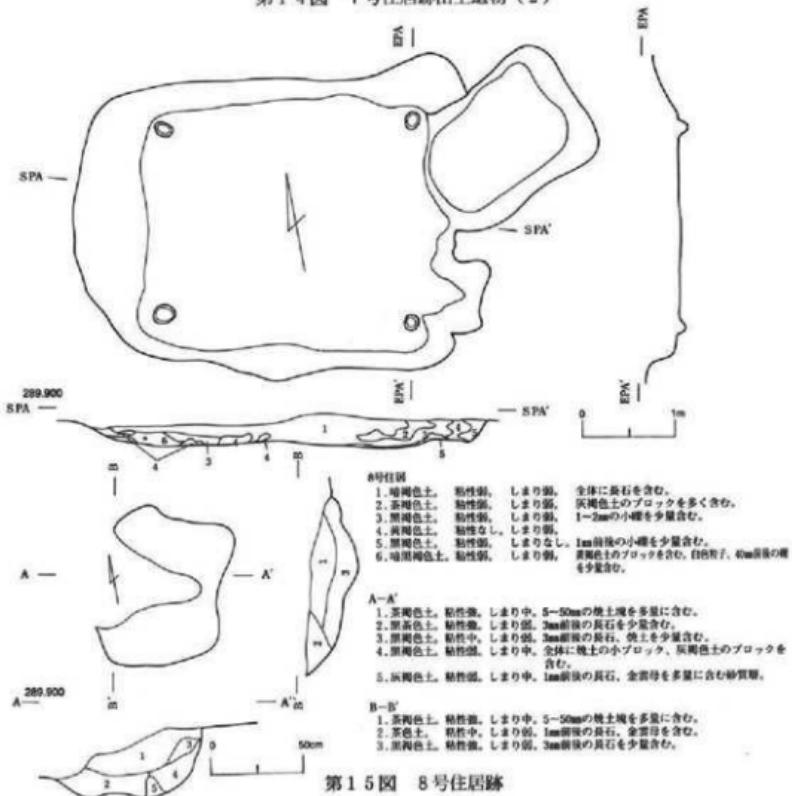
第12図 6号住居跡及出土遺物



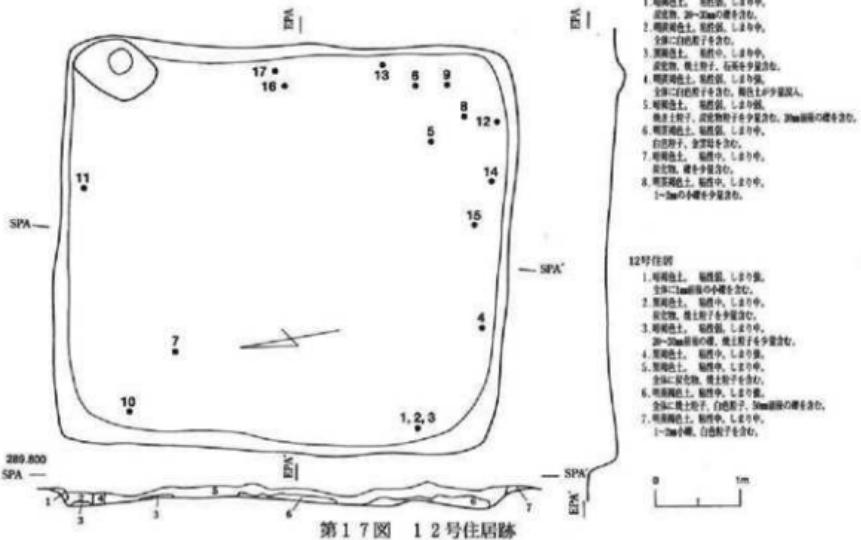
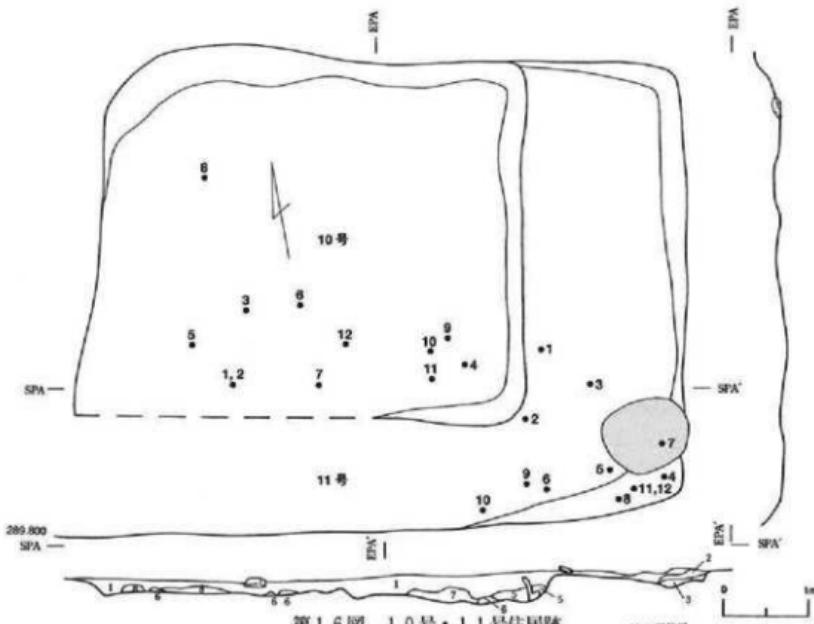
第13図 7号住居跡及出土遺物



第14図 7号住居跡出土遺物(2)



第15図 8号住居跡

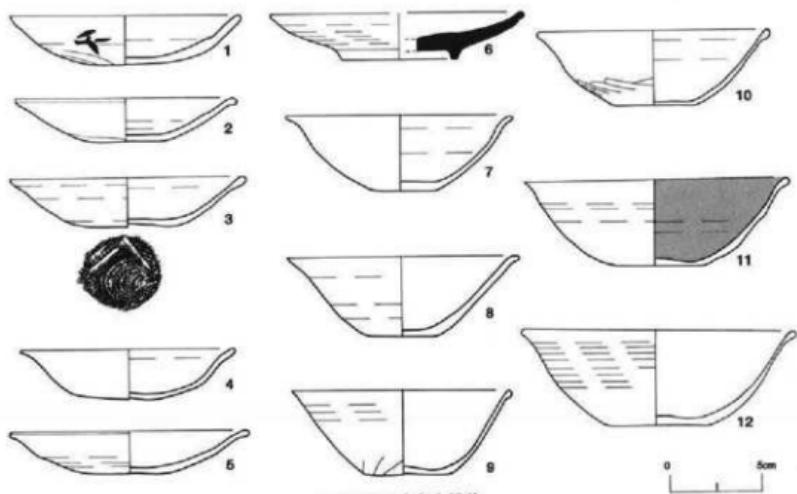


10,11号住居

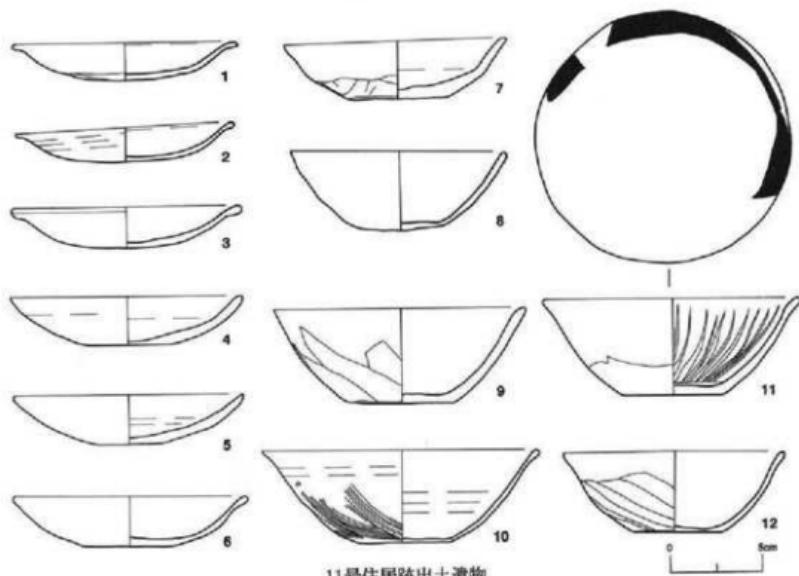
1. 可用地土。褐色的。しまり中。
泥炭物。20~30mmの量を含む。
2. 可用地土。褐色的。しまり中。
全深さ20cmの量を含む。
3. 可用地土。褐色的。しまり中。
泥炭物。灰白色。5mmの量を含む。
4. 可用地土。褐色的。しまり中。
5. 可用地土。褐色的。しまり中。
全深さ20cmの量を含む。褐色と少量混入。
6. 可用地土。褐色的。しまり中。
白灰色。全量含む。
7. 可用地土。褐色中。しまり中。
泥炭物。量を含む。
8. 可用地土。褐色中。しまり中。
1~2cmの小礫を少量含む。

12号住居

1. 可用地土。褐色見。しまり強。
全深さ20cmの量を含む。
2. 可用地土。褐色見。しまり強。
泥炭物。量を含む。
3. 可用地土。褐色見。しまり中。
20~30mmの量を含む。褐色土を少量含む。
4. 可用地土。褐色中。しまり強。
5. 可用地土。褐色中。しまり中。
全量に泥炭物。褐色土を少量含む。
6. 可用地土。褐色中。しまり強。
7. 可用地土。褐色中。しまり中。
全深さ20cmの量を含む。褐色土を少量含む。
8. 可用地土。褐色中。しまり中。
1~2cmの小礫を少量含む。

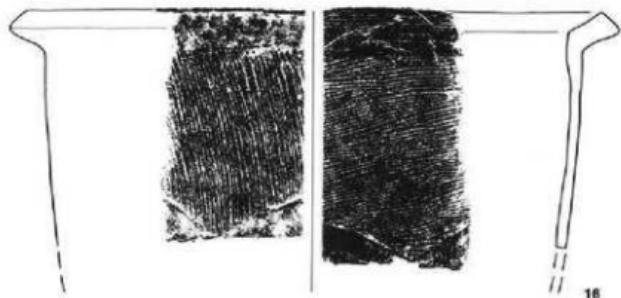
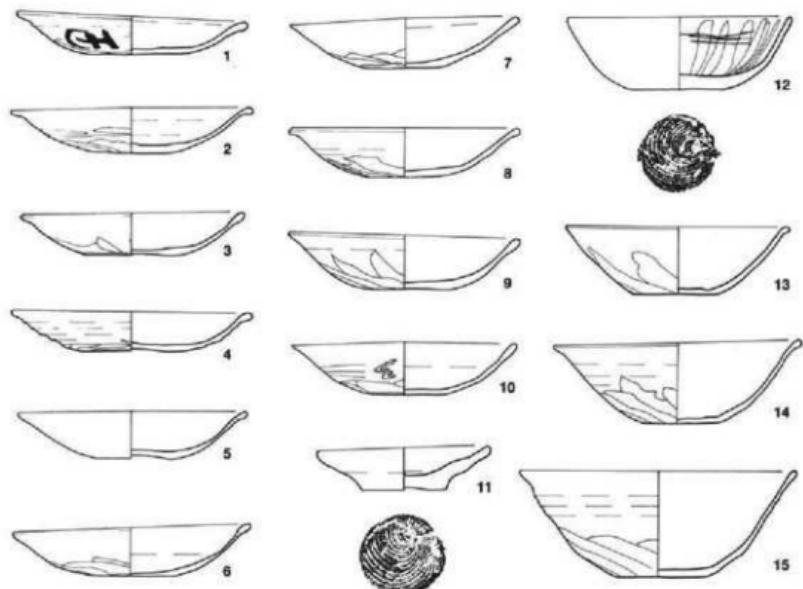


10号住居跡出土遺物

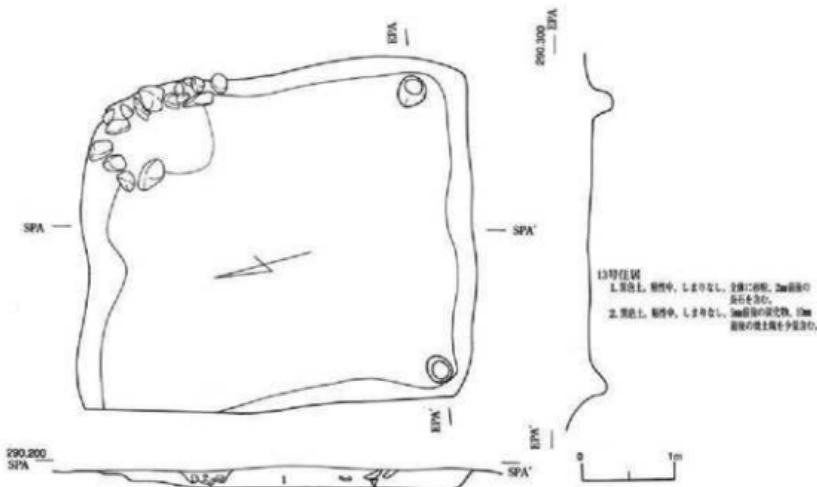


11号住居跡出土遺物

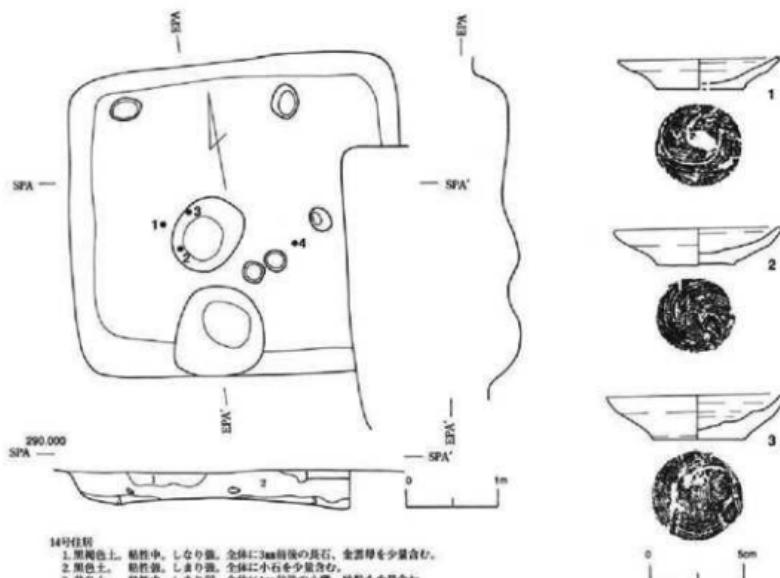
第18図 10号・11号住居跡出土遺物



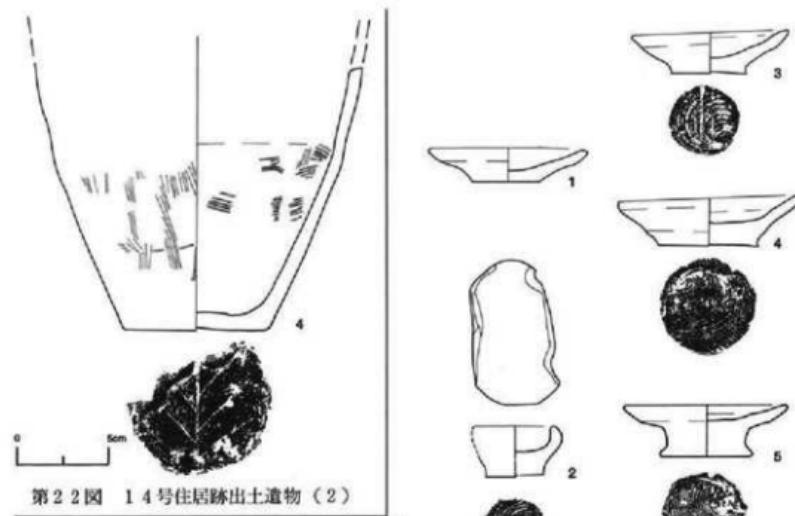
第19図 1.2号住居跡出土遺物



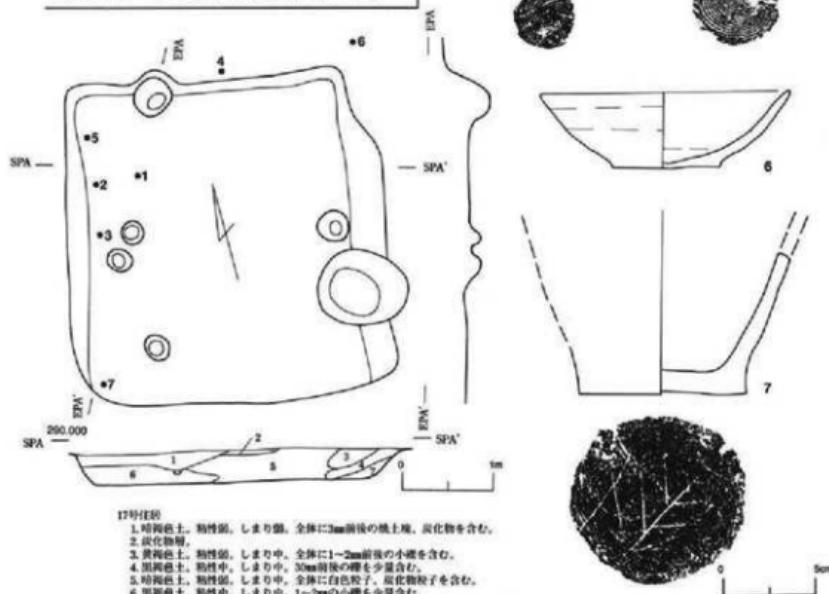
第20図 13号住居跡



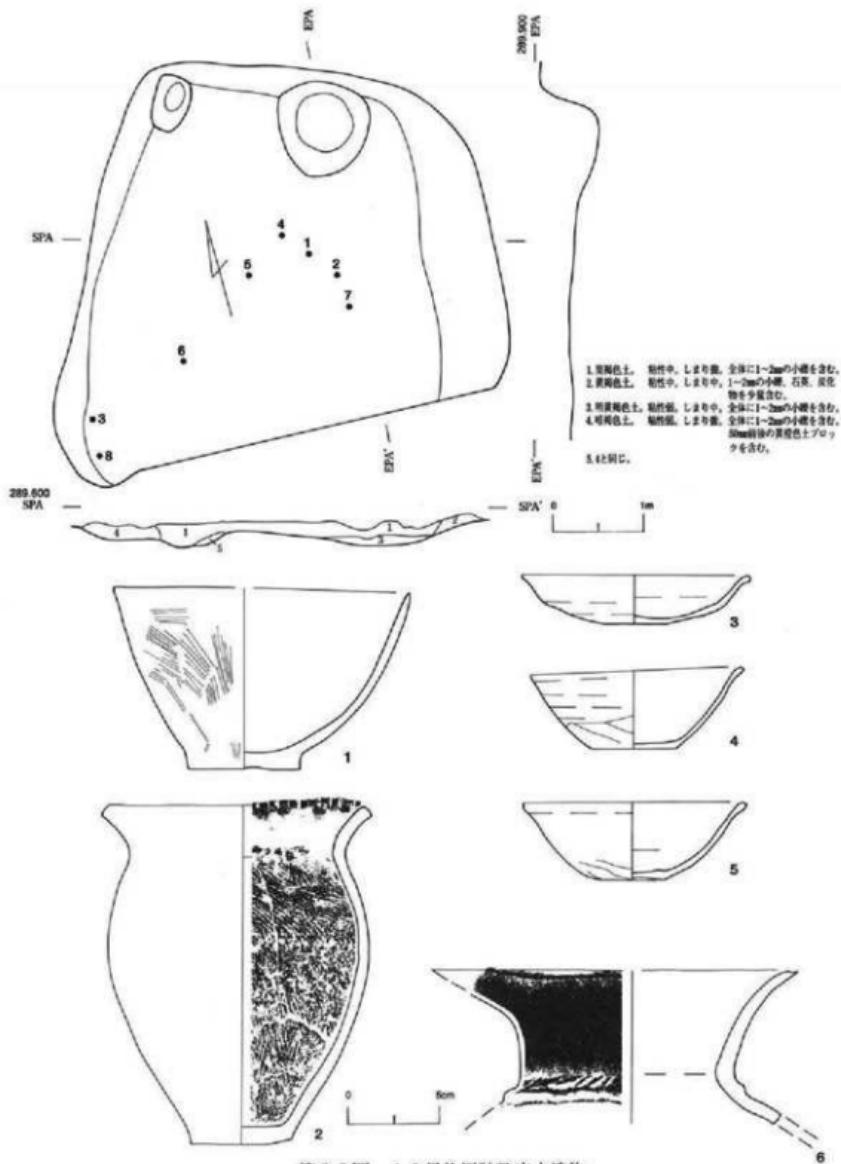
第21図 14号住居跡及出土遺物



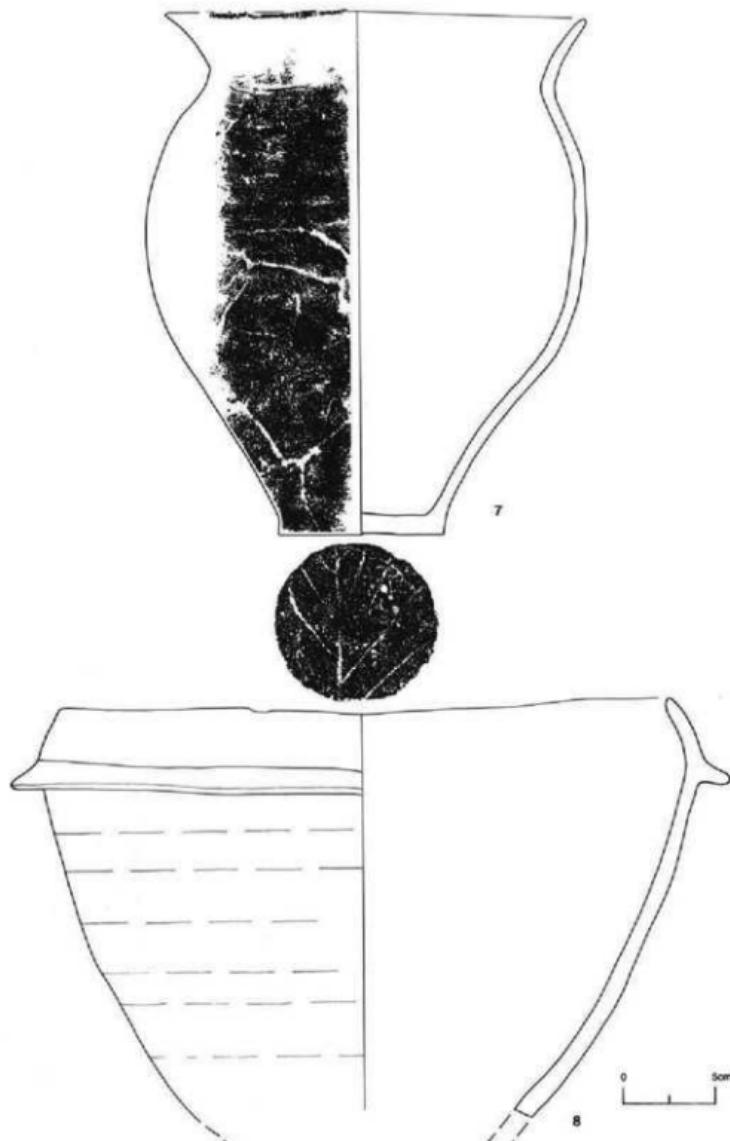
第22図 14号住居跡出土遺物(2)



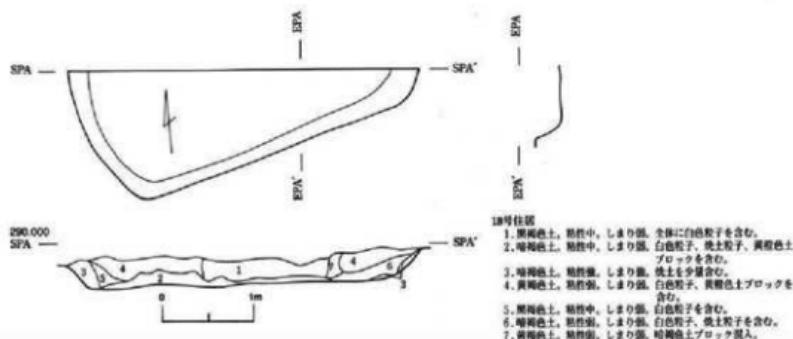
第23図 17号住居跡及出土遺物



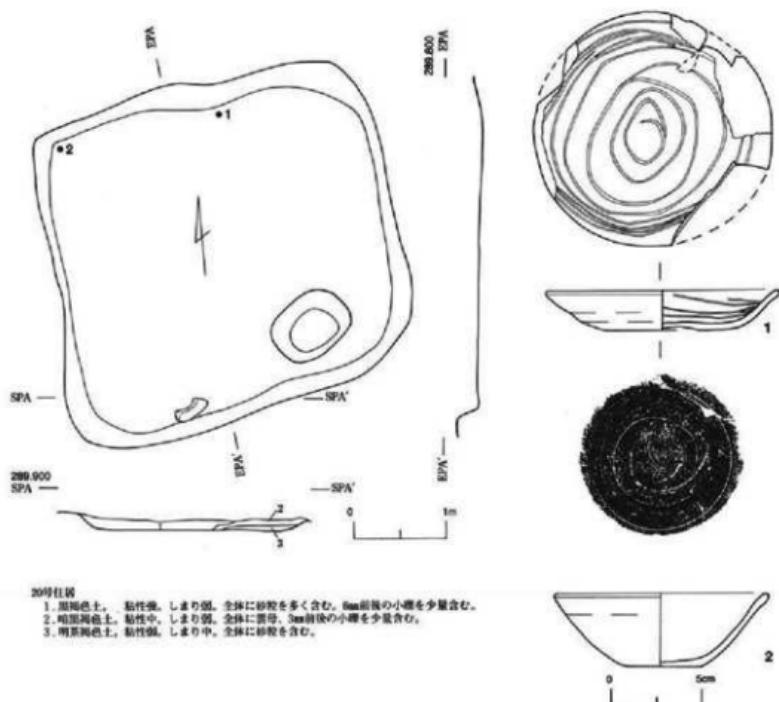
第25図 19号住居跡及出土遺物



第26図 19号住居跡出土遺物(2)



第24図 18号住居跡



第27図 20号住居跡及出土遺物

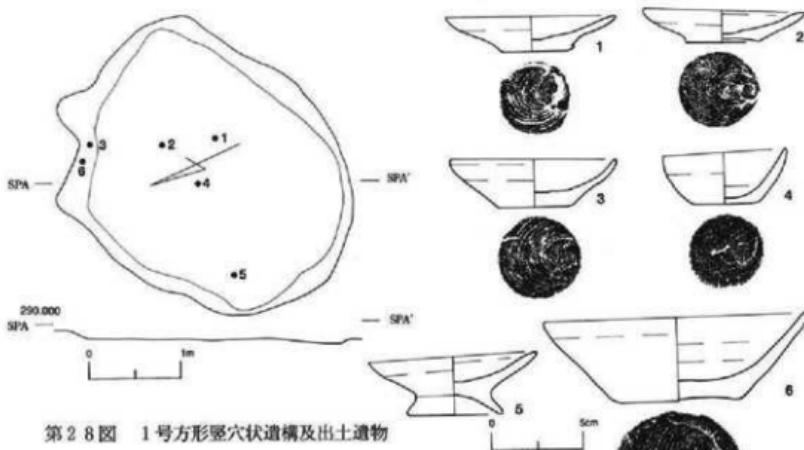
3. 穫穴状遺構 (第28~34図、図版20)

【第1表】 穫穴状遺構観察表

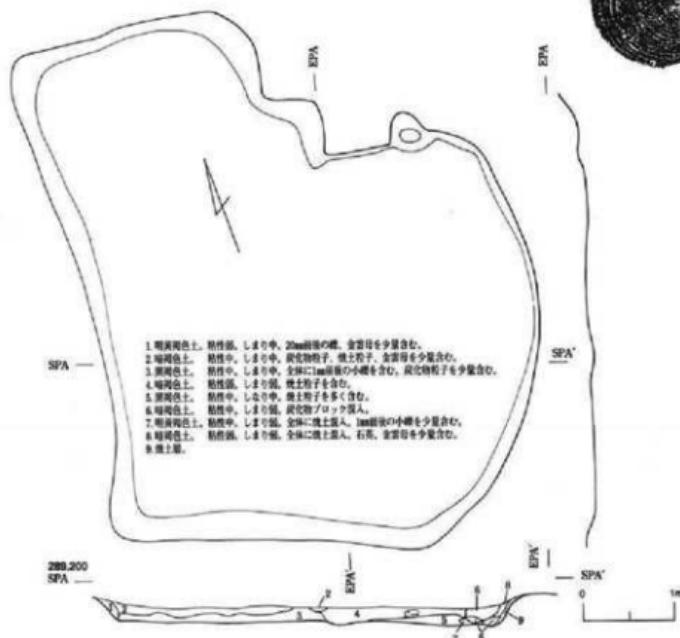
No.	調査区	グリット	規模(m)	(1)東西 (2)南北	平面形	壁高(cm)
1	1	B-11		3.40 2.75	隅丸長方形	10
2	2			5.30 8.00	不整形	40
3	1	A-9		4.15 3.70	不整形	30
4	1	A-16、B-16		4.00 5.10	隅丸長方形	30
5	1	A-14		4.90 5.85	不整形	20
6	1	B-20、C-20		5.40 5.25	不整形	35
7	2			3.50 3.40	円形	65

【第2表】 穫穴状遺構出土遺物観察表

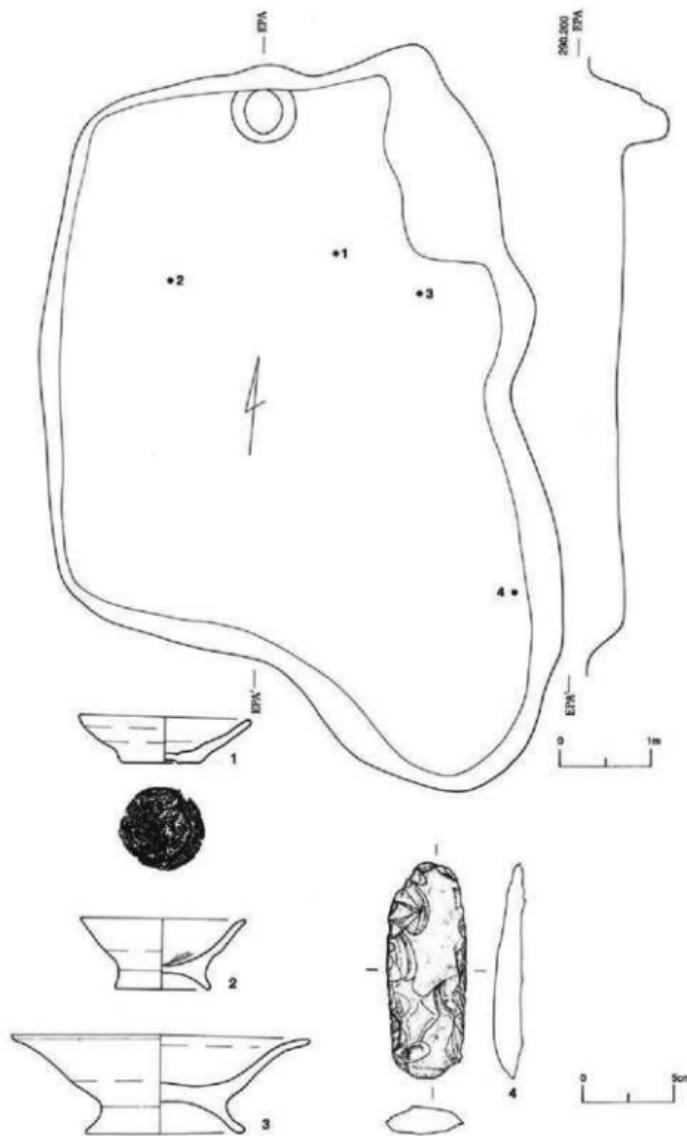
No.	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器の特徴
1号方形空穴状遺構							
1	土師質土器	小皿	高さ 2.0cm 口径 9.3cm 底径 3.7cm	キメ細かく緻密 金雲母を多く含む	茶褐色	良好	底部糸切痕跡 ロクロ回転右
2	土師質土器	小皿	高さ 2.0cm 口径 8.5cm 底径 4.1cm	キメ細かく緻密 金雲母を多く含む	〃	良好	〃
3	土師質土器	小皿	高さ 2.8cm 口径 9.0cm 底径 4.1cm	キメ細かく 砂粒を多く含む	明茶褐色	良好	〃
4	土師質土器	ミニチュア土器 (小型盆)	高さ 3.05cm 口径 6.7cm 底径 3.5cm	キメ細かく 金雲母を多く含む	茶褐色	良好	〃
5	土師質土器	高台付小皿	高さ 3.5cm 口径 9.2cm 底径 5.2cm	〃	暗茶褐色	良好	ロクロ回転右
6	土師質土器	壺	高さ 4.7cm 口径 14.2cm 底径 6.8cm	キメやや粗く 金雲母を多く含む	暗茶色	良好	内外面口部に模様有り、唇 部に切り妻有りロクロ回転右
2号方形空穴状遺構							
1	土師質土器	小皿	高さ 2.7cm 口径 9.3cm 底径 4.9cm	キメ細かく 金雲母を多く含む	暗茶褐色	良好	底部糸切痕がかかる に看取られる
2	土師質土器	高台付壺	高さ 3.95cm 口径 8.7cm 底径 5.0cm	キメ細かく金雲母と 小石 砂粒を多く含む	黄茶色 内面暗 部のろ茶褐色	良	内面底部に花弁状暗 部粘付高台有り
3	土師質土器	高台付壺	高さ 5.5cm 口径 16.2cm 底径 8.8cm	キメ細かく 金雲母を多く含む	暗茶褐色	良好	貼付高台有り ロクロ回転右
4	石 器	打製石斧	幅 4.35cm 厚さ 1.45cm 長さ 12cm	〃	黄灰色		
3号方形空穴状遺構							
1	土師器	壺	高さ 4.3cm 口径 12.1cm 底径 4.3cm	キメ細かく 赤色粒子を多く含む	茶褐色	良好	外表面下斜め方向へのハラ割 り、裏面へラ筋を走す
2	土師器	壺	高さ 4.5cm 口径 11.9cm 底径 4.3cm	キメ細かく緻密 赤色粒子を多く含む	赤褐色	良好	〃
3	土師器	皿	高さ 3.3cm 口径 12.2cm 底径 2.8cm	キメ細かく赤色粒子、 長石を多く含む	茶褐色	良好	体部外面下部へラ割り
4	土師器	皿	高さ 3.15cm 口径 12.6cm 底径 3.5cm	キメ細かく 赤色粒子を多く含む	茶褐色	良好	底部へラ成形
5	土師器	高台付皿	高さ 3.3cm 口径 13.6cm 底径 6.2cm	Iaa前後の小石を含む	外面 明茶褐色 内面 黒色	良	
4号方形空穴状遺構							
1	石 器	砥石	幅 1.35cm 厚さ 0.6~1.65cm	石材、花崗岩	淡茶色		上面に直径5mmの穿孔及び 直徑2mm孔有す。使用面に沿 先端部は薄く刃状を呈す
2	石 器	打製石斧	長軸 12.7cm 短軸 4.8cm	石材、花崗岩	灰茶色		
6号方形空穴状遺構							
1	須恵器	壺	高さ 3.4cm 口径 8.2cm 底径 3.5cm	きめ細かく緻密	灰色	良好	
2	土師質土器	小皿	高さ 2.6cm 口径 9.4cm 底径 4.9cm	キメ細かく 金雲母を含む	茶褐色	良好	内部全体にハラ割きを施す。 底部は削出しによるかたな 合板を呈す。糸切痕有り
3	土師器	ミニチュア土器	高さ 6.1cm 口径 4.8cm 底径 3.7cm	キメ細かく砂粒、画面、 長石を多く含む	〃	やや不良	
4	土師器	壺	底径 6.1cm	金雲母を多く含む	〃	やや不良	
5	鉄 製 品	刀子	現存長さ 11.4cm・茎部長さ 5.3cm	備考 第3章鉄製品参照			



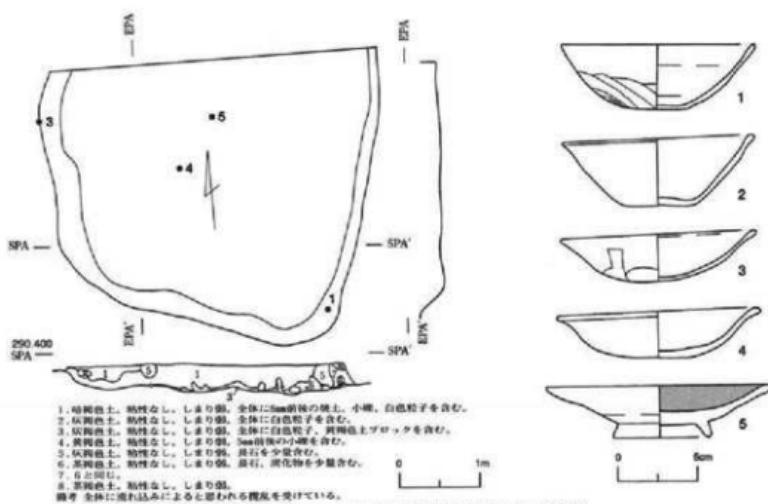
第28図 1号方形竪穴状造構及出土遺物



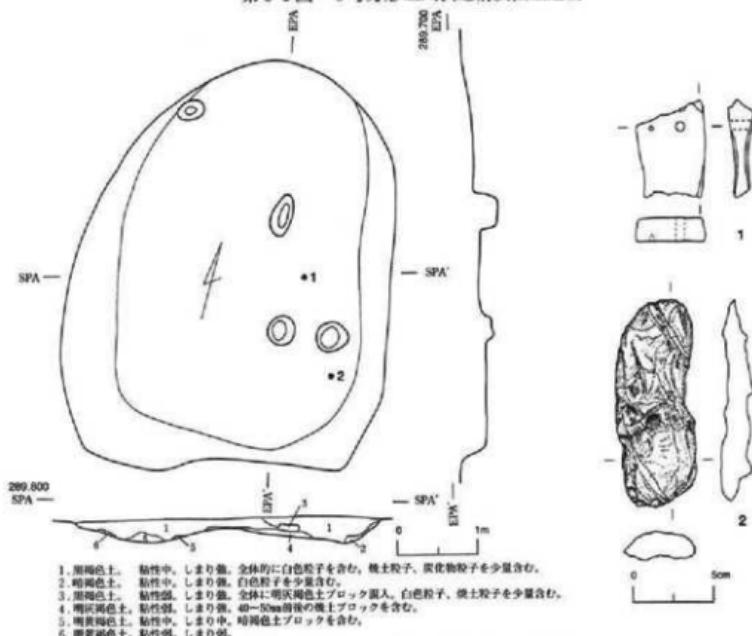
第29図 5号方形竪穴状造構



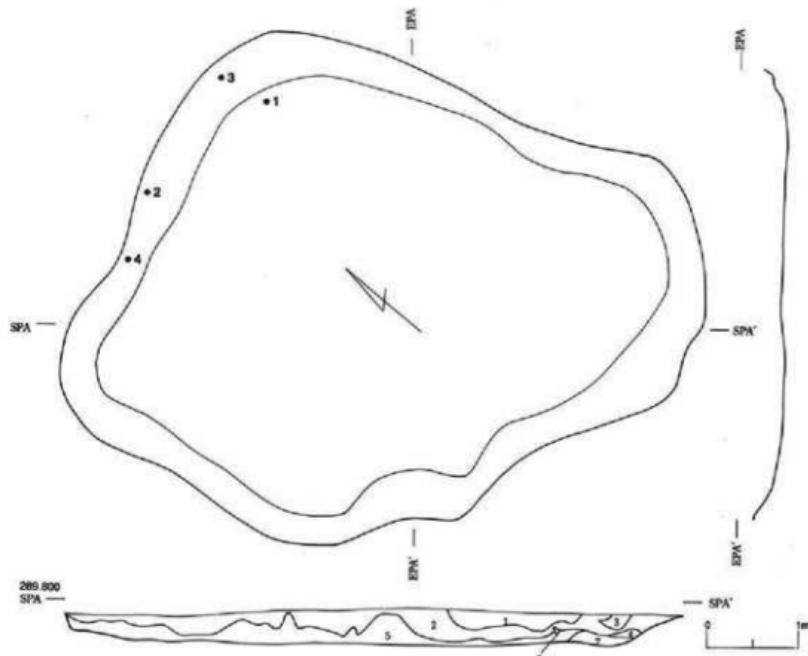
第30圖 2号方形竖穴状遺構及出土遺物



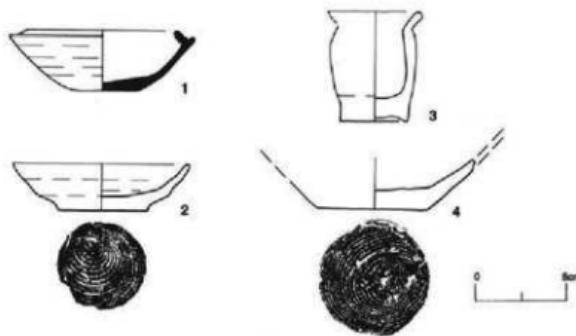
第3-1図 3号方形堅穴状遺構及出土遺物



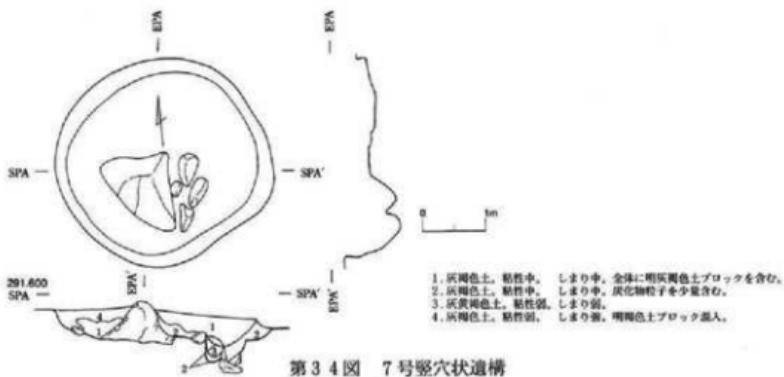
第3-2図 4号方形堅穴状遺構及出土遺物



1. 喀褐色土。粘性弱。しまり中。10~50mmの塊を少量含む。
 2. 黒褐色土。粘性中。しまり中。燒土、炭化物を少量含む。
 3. 喀褐色土。粘性中。しまり中。全体に1mm前後の小塊を含む。
 4. 喀褐色土。粘性弱。しまり中。1mm前後の小塊を含む。
 5. 喀褐色土。粘性中。しまり中。燒土粒子、白色粒子を含む。
 6. 黄白色ブロック。
 7. 黑褐色土。粘性中。しまり中。全体に白色粒子を含む。



第33図 6号方形堅穴状遺構及出土遺物



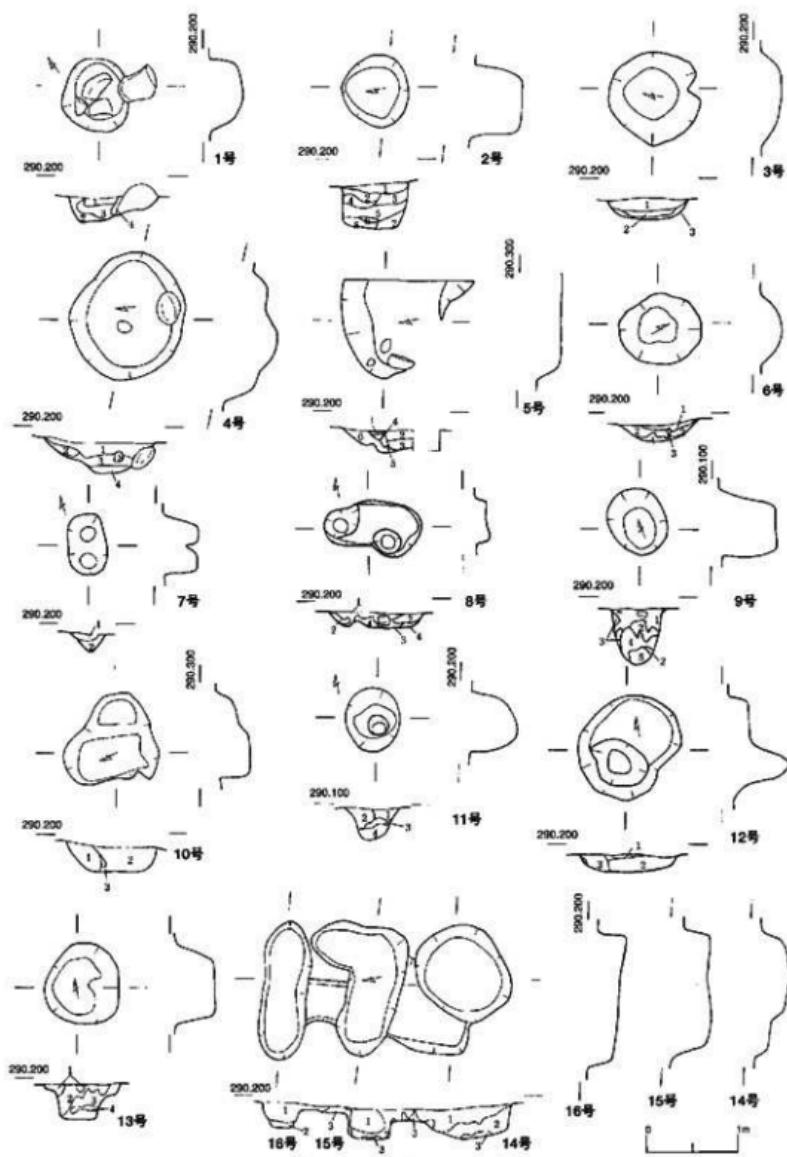
第34図 7号竖穴状造構

4. 土坑 (第35~37図、図版8~13)

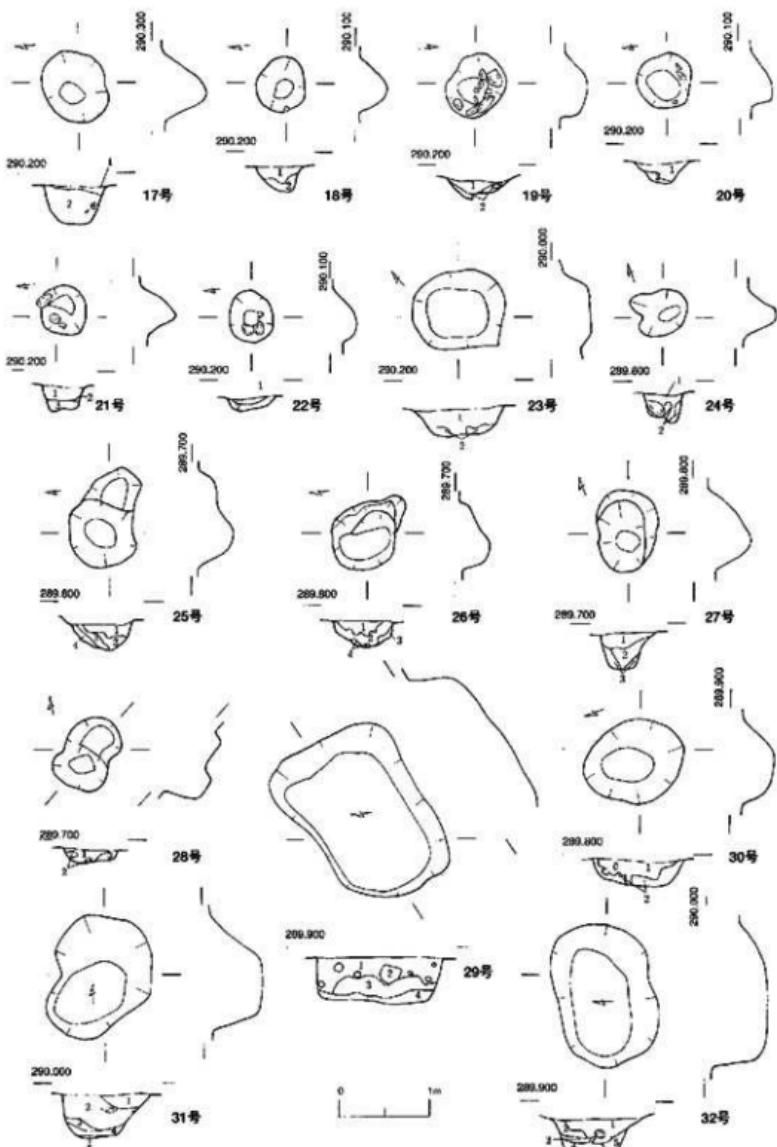
【第3表 土坑観察表】

No.	調査区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	小穴	形 状	位 置 (グリット)
1	1	80	74	38		円 形	B-8
2	1	97	90	56		円 形	B-3
3	1	106	100	34		円 形	C-9
4	1	162	160	54		円 形	C-9
5	1		104	37		不整形	C-3
6	2	92	79	24		楕円形	
7	2	68	43	35	2	圓丸長方形	
8	2	108	60	18	2	不整形	
9	2	76	64	62		椭円形	
10	2	106	94	35	2	不整形	
11	2	72	60	38		椭円形	
12	2	116	109	62		椭円形	
13	2	89	82	39		円 形	
14	2	108	106	40		円 形 14号・15号・ 16号はつながっている	
15	2	144	62	42		不整形	

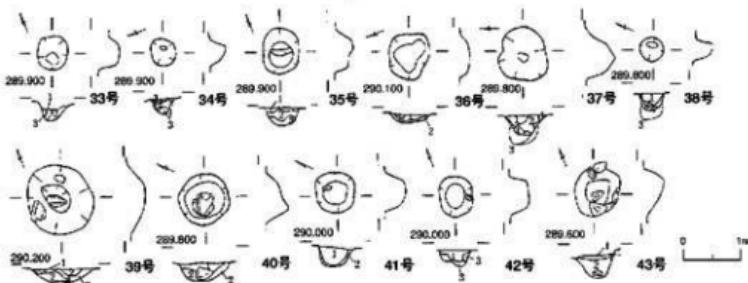
No	調査区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	小穴	形 状	位 置 (グリット)
16	2	15.4	4.8	3.2		開丸長方形	
17	1	7.4	6.9	4.4		円 形	A-13
18	1	6.2	5.3	3.0		円 形	B-13
19	1	7.4	6.6	2.6		円 形	A-13
20	1	6.0	5.8	2.6		円 形	B-13
21	1	6.2	4.9	3.0		円 形	B-13
22	1	5.9	4.7	1.8		椭 圓 形	B-13
23	1	10.0	8.6	3.0		椭 圓 形	B-14
24	1	6.4	5.2	3.6		椭 圓 形	C-17
25	1	10.8	7.6	3.6	2	不 整 形	C-17
26	1	7.6	7.0	3.0		椭 圓 形	C-18
27	1	9.0	6.2	4.2		椭 圓 形	C-18
28	1	8.4	5.4	2.4	2	不 整 形	C-18
29	1	19.6	13.2	5.0		開丸長方形	A-19
30	1	10.6	9.4	3.6		椭 圓 形	A-19
31	1	10.4	12.8	5.4		椭 圓 形	A-21
32	1	16.0	10.8	5.2		椭 圓 形	A-21
33	1	6.0	5.4	3.0		円 形	B-20
34	1	5.0	5.0	6.0		円 形	B-20
35	1	8.2	6.8	3.2		椭 圓 形	A-19
36	1	8.4	8.0	1.8		不 整 形	A-21
37	1	9.8	9.0	5.2		円 形	A-18
38	1	4.4	4.2	3.2		円 形	B-18
39	1	12.4	12.0	2.8		円 形	B-89
40	1	9.6	9.2	4.2		円 形	C-40
41	1	7.2	7.2	3.8		円 形	B-12
42	1	7.2	6.4	3.6		円 形	B-12
43	1	8.6	7.8	3.4		円 形	C-14



第35図 1号～16号土坑



第36図 17号～32号土坑



第37図 33号～43号土坑

【第4表 各土坑土層説明一覧】

土坑番号	土層番号	上色	粘性	しまり	含有物
1号	1	黒褐色	弱	中	赤黃褐色上のブロックがまだら状に混入。燒土粒子、炭化物を少量含む。
	2	明黄褐色	弱	中	暗茶褐色土が混入。焼土粒子を含む。
	3	黒褐色	中	中	1～2mmの小礫、石英、長石を含む。
	4	褐	弱	中	全体に白色粒子を含む。
2号	1	茶褐色	なし	なし	砂粒を多く含む。金雲母、3～8mmの長石を少量含む。
	2	暗茶褐色	弱	弱	細砂粒、2mm前後の長石を少量含む。
	3	暗茶褐色	なし	なし	全体に砂粒を多く含む。金雲母を少量含む。
	4	茶褐色	なし	なし	全体に細粒を含む。錐状に砂粒が認められる。10～20mmの礫を含む。
	5	暗茶褐色	なし	なし	全体に砂粒を含む。10mm前後の礫、2mm前後の長石を少量含む。
	6	黄茶褐色	なし	なし	1mm前後の長石、石英を多く含む砂粒層である。
	7	淡茶褐色	弱	なし	全体に細砂粒、2mm前後の長石を含む。
	8	黒褐色	なし	なし	全体に砂粒、2mm前後の長石を含む。
3号	1	灰黒褐色	弱	強	1～2mmの小礫を含む。
	2	灰黒褐色	弱	中	赤黃褐色土がブロック状に混入する。
	3	明黄褐色	弱	弱	暗褐色土が少量混入する。1～2mmの小礫、石英を含む。
4号	1	灰黒褐色	弱	弱	1～2mmの長石を少量含む。
	2	黒黒褐色	弱	弱	暗黒褐色土がブロックを含む。10～20mmの礫を少量含む。
	3	黄茶褐色	なし	なし	暗黒褐色土がブロックを含む。
	4	暗茶褐色	なし	なし	ブロック。2層と同じ。
	5	暗茶褐色	なし	なし	
5号	1	暗褐色	なし	弱	砂質土。
	2	暗褐色	なし	弱	砂質土。炭化物を上層に含む。
	3	褐	なし	中	砂質土。黄色粒子を含む。
	4	暗褐色	なし	弱	炭化物、長石を含む。
	5	暗褐色	なし	弱	金雲母、炭化物を少量含む。
	6	褐	なし	弱	石英、金雲母を含む。
6号	1	灰褐色	なし	弱	白色粒子、黄橙色土のブロックを少量含む。
	2	暗茶褐色	なし	弱	1mm位の焼土粒子、黄橙色土のブロックを含む。
	3	灰褐色	なし	弱	ブロック。
	4	黄褐色	なし	弱	暗褐色土のブロックを含む。
7号	1	暗黄褐色	なし	弱	2mm前後の小礫を少量含む。
	2	茶褐色	なし	弱	20mm前後の黄橙色土ブロックを含む。

土坑番号	土層番号	十 色	粘 性	し ま り	含 有 物
8号	1	茶褐色	なし	弱	黄橙色土のブロックを少量含む。
	2	暗黒褐色	なし	弱	黄褐色土のブロックを少量含む。
	3	茶褐色	なし	強	黄褐色土のブロックを多量に含む。
	4	黄橙色	弱	強	砂質層。
9号	1	暗灰褐色	なし	弱	黄橙色土のブロック、灰褐色土のブロックを含む。
	2	黄褐色	弱	弱	全体に黄褐色土を含む。
	3	灰橙褐色	なし	弱	
	4	茶褐色	弱	弱	
	5	暗黒褐色	弱	弱	
10号	1	茶褐色	弱	弱	全体に長石、金雲母を多く含む。
	2	茶褐色	弱	中	3mm前後の小礫、金雲母を少量含む。細砂粒層。
	3	淡茶褐色	なし	なし	全体に金雲母を含む。1mm前後の長石を少量含む。
11号	1	暗黒褐色	弱	弱	5cm前後の黄橙色土のブロックが多数混入。
	2	暗黒褐色	弱	弱	
	3	黑褐色	弱	弱	
	4	黒褐色	弱	弱	黄褐色土のブロックを含む。
12号	1	茶褐色	弱	弱	全体に3mm前後の金雲母を含む。
	2	黑褐色	中	弱	全体に3mm前後の金雲母、長石を含む。3~5mmの黄褐色砂粒を含む。
	3	黒茶色	弱	強	全体に少量の金雲母を含む。
13号	1	黄褐色	なし	強	長石を少量含む。
	2	灰褐色	なし	強	黄褐色土のブロックを含む。
	3	黄褐色	なし	強	全体に黄褐色土のブロックを多く含む。炭化物を少量含む。
	4	灰褐色	なし	強	
14号	1	黄褐色	なし	強	褐色、焼土の小フロックが全体に混入。長石を多量に含む。
	2	黄褐色	なし	強	1層より混入物はやや少ない。
	3	灰褐色	なし	強	全体に金雲母を含む。
15号	1	黄褐色	なし	強	褐色、焼土の小ブロックが全体に混入。長石を多量に含む。
	2	黄褐色	なし	強	1層より混入物はやや少ない。
	3	灰黄色	なし	強	全体に金雲母を含む。
16号	1	黄褐色	なし	強	褐色、焼土の小ブロックが全体に混入。長石を多量に含む。
	2	黄褐色	なし	強	1層より混入物はやや少ない。
17号	1	暗黒褐色	中	弱	全体に細砂粒、2mm前後の小石を含む。
	2	黒褐色	弱	弱	全体に砂粒を含む。60~70mm前後の礫混入。
18号	1	黒褐色	中	なし	全体に砂粒、金雲母を含む。
	2	茶褐色	なし	弱	全体に1mm前後の長石、砂粒、金雲母を含む。
19号	1	黑褐色	弱	なし	全体に1mm前後の長石を多く含む砂粒層。
	2	茶褐色	なし	なし	全体に1mm前後の長石を含む砂粒層。
20号	1	黑色	強	なし	全体に3mm前後の長石を少量含む。
	2	黄褐色	なし	なし	全体に1mm前後の長石を多く含む砂粒層。黑色土を部分的に含む。
21号	1	茶褐色	強	弱	金雲母を少量含む。
	2	黄褐色	弱	なし	全体に金雲母、1mm前後の長石を多く含む。
	3	黑褐色	強	弱	全体に金雲母、細砂粒を含む。
22号	1	黑茶色	中	なし	全体に金雲母を含む。2mm前後の長石を多く含む。
	2	黑褐色	弱	なし	全体に5mm前後の小礫を多く含む砂粒層。金雲母を少量含む。
23号	1	黑色	強	中	全体に1mm前後の長石を含む。金雲母を少量含む。
	2	黑褐色	中	なし	全体に3mm前後の小礫を含む砂粒層。

土坑番号	土壤番号	上色	粘性	しまり	含有物
24号	1	黒褐色	中	中	2 mm前後の小礫を少量含む。黄褐色土が一部混入。 1 mm前後の小礫を少量含む。黒褐色土が混入。
	2	黄褐色	中	中	
25号	1	黒褐色	強	中	全体に白色粒子を含む。黄褐色土のブロック混入。 3 mm前後の小礫を少量含む。黄褐色土のブロック混入。 全体に白色粒子を含む。 白色粒子を少量含む。黄褐色土のブロック混入。
	2	黄褐色	強	強	
	3	黄褐色	中	強	
	4	黒褐色	強	強	
26号	1	黒褐色	中	強	全体に白色粒子を含む。 暗褐色土のブロック混入。
	2	黄褐色	中	中	
	3	明黄褐色	弱	中	
	4	黄褐色	弱	中	
27号	1	黄褐色	弱	中	白色粒子を少量含む。 5 mm前後の小礫を少量含む。 炭化物を少量含む。
	2	黄褐色	中	中	
	3	暗褐色	中	中	
28号	1	黒褐色	中	中	全体に白色粒子を含む。 1 mm前後の小礫を含む。
	2	黄褐色	弱	中	
	3	黒褐色	弱	中	
29号	1	暗褐色	中	弱	全体に白色粒子を含む。黄褐色土のブロック混入。 炭化物、白色粒子を含む。 炭化物、土器片を含む。 全体に1 mm前後の小礫を含む。
	2	黒褐色	中	弱	
	3	暗褐色	中	弱	
	4	黄褐色	中	弱	
30号	1	暗茶褐色	強	弱	全体に砂粒を含む。金雲母を少量含む。 全体に細砂粒を多く含む。3 mm前後の小礫を少量含む。
	2	茶褐色	強	中	
31号	1	黒褐色	強	強	2 mm前後の小礫を少量含む。 全体に砂粒、3~5 mm前後の小礫を多量に含む。 全体に砂粒、2 mm前後の長石を多量に含む。金雲母を少量含む。 70mm前後の礫を下層面に多く含む
	2	暗茶褐色	中	中	
	3	黒褐色	中	弱	
	4	暗茶褐色	強	弱	
	5	黒褐色	強	弱	
32号	1	茶褐色	強	弱	全体に3 mm前後の小礫を含む。20~150mm前後の礫を少量含む。 全体に3 mm前後の小礫、砂粒を含む。 砂粒、2 mm前後の小礫を含む。 少量の雲母を含む。 全体に砂粒、全雲母を多く含む。40mm前後の礫を多く含む。
	2	茶褐色	強	強	
	3	明茶褐色	中	弱	
	4	黑褐色	強	弱	
	5	明茶褐色	強	中	
33号	1	黒褐色	弱	弱	全体に1 mm前後の長石を含む。 全体に微砂粒を含む。2 mm前後の小礫、全雲母を少量含む。
	2	茶褐色	中	なし	
34号	1	暗茶褐色	強	なし	全体に微砂粒、1 mm前後の長石を含む。 全体に微砂粒、2 mm前後の長石を多く含む。全雲母を少量含む。 全雲母を多量に含む砂量層。黒褐色土のブロック混入。
	2	黑褐色	中	なし	
	3	黄褐色	なし	なし	
35号	1	黒褐色	強	中	全体に3 mm前後の小礫、砂粒を含む。 全体に2 mm前後の小礫、砂粒を多く含む。全雲母を少量含む。
	2	黄褐色	強	中	
	3	明黄茶色	強	中	
36号	1	黒褐色	強	強	少量の砂粒を含む。 全体に砂粒を多く含む。2 mm前後の小礫、全雲母を少量含む。
	2	茶褐色	中	なし	
37号	1	黒褐色	中	弱	全体に1~2 mmの小礫を少量含む。 白色粒子を少量含む。 20~30mmの礫を少量含む。 全雲母を少量含む。
	2	明黄褐色	中	中	
	3	明黄褐色	中	弱	
	4	黑褐色	中	弱	

土坑番号	土層番号	上色	粘性	しまり	含有物
38号	1	黒褐色	中	弱	1~2mmの小礫、金雲母を少量含む。
	2	暗褐色	中	中	50mm前後の礫、金雲母を少量含む。
	3	明黄色	中	中	全体に白色粒子を含む。
	4	黒褐色	中	強	焼土粒子、カーボン粒子を少量含む。
39号	1	明褐色	弱	強	1~2mmの小礫、金雲母を少量含む。
	2	灰褐色	中	強	白色粒子、50mm前後の礫を少量含む。
	3	灰褐色	弱	弱	焼土粒子、50mm前後の礫を少量含む。
40号	1	暗褐色	中	強	明黄色上のブロック混入。50mm前後の礫を少量含む。
	2	黒褐色	弱	弱	50~100mm前後の礫を含む。
41号	1	黒褐色	弱	中	全体に雲母を含む。
	2	黒褐色	中	弱	全体に砂粒を含む。
42号	1	黒褐色	弱	弱	全体に微砂粒を含む。
	2	明茶褐色	なし	なし	全体に微砂粒を多く含む。
	3	暗茶褐色	中	なし	全体に砂粒、雲母を含む。
43号	1	茶褐色	なし	強	全体に雲母、微砂粒、1mm前後的小礫を多く含む。
	2	黒褐色	なし	なし	全体に10~200mm前後の礫を含む。

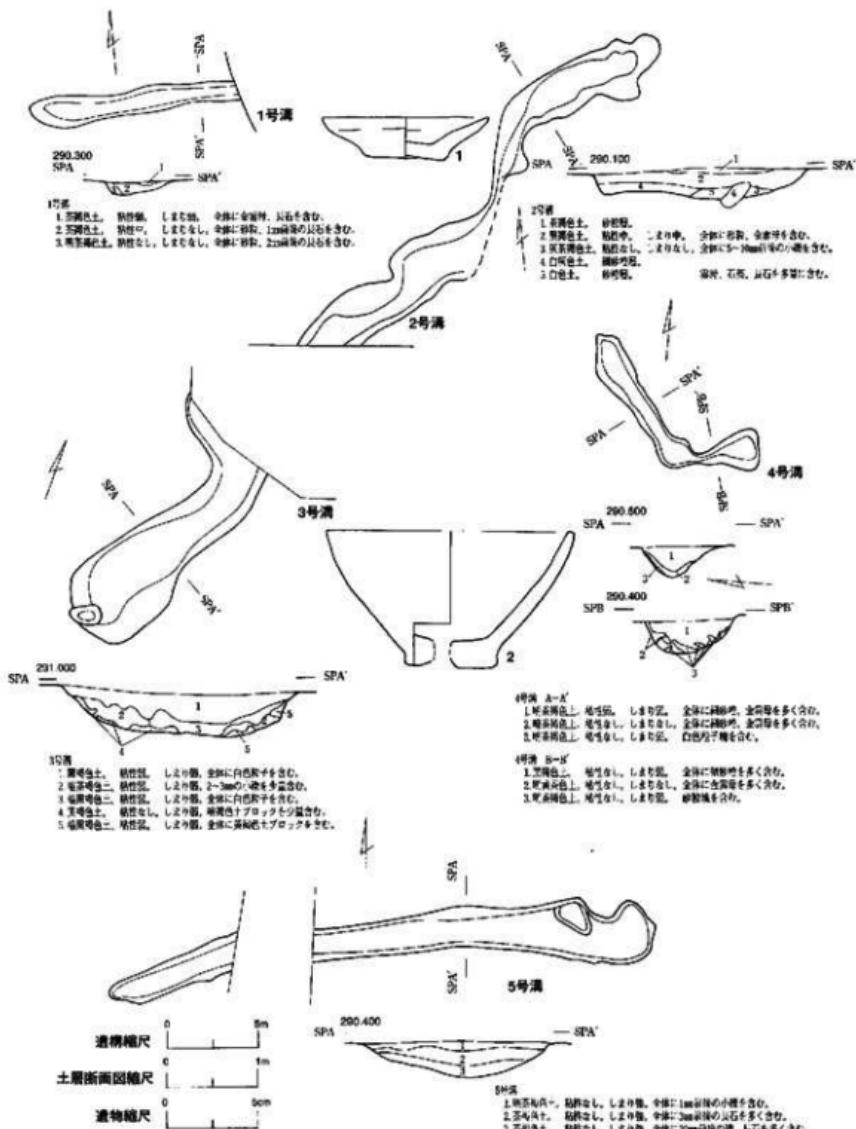
5. 溝跡（第38図、図版7）

【第5表】 溝跡観察表

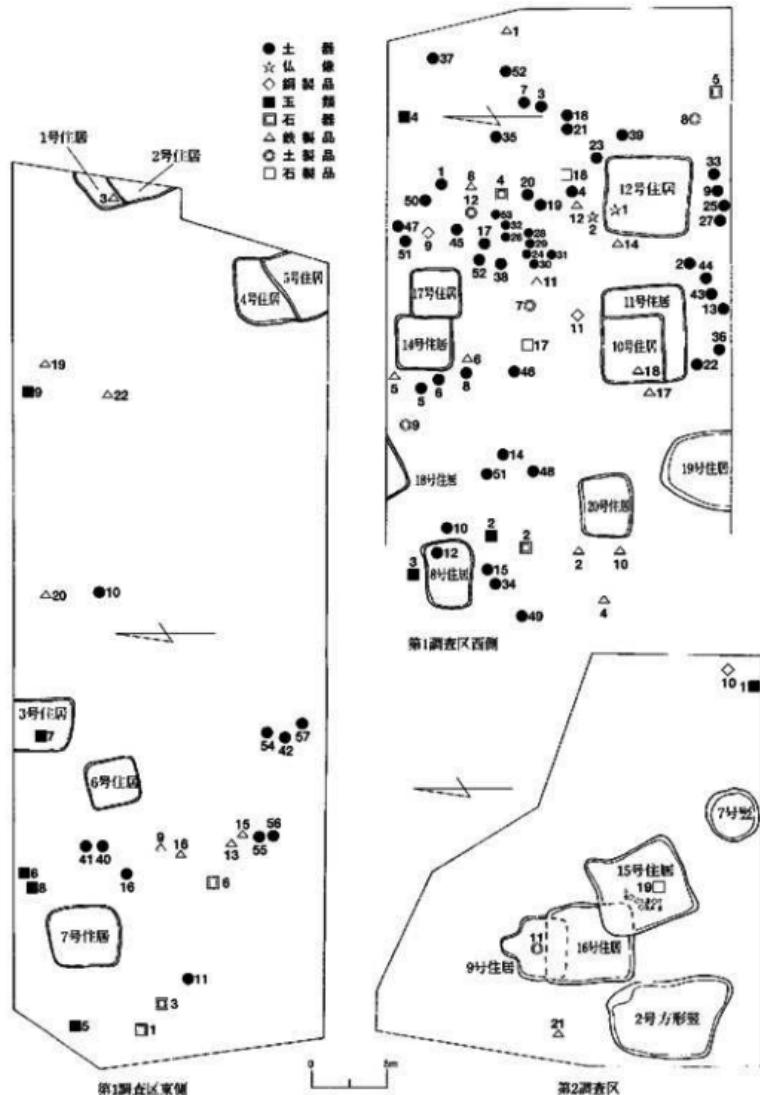
No.	調査区	グリット	幅(cm)	深さ(cm)
1	1	B-2 B-3	70	13
2	1	B-6・7 C-7・D-8	230	35
3	1	A-20 A-21	260	45
4	2		100	35
5	1・3	C-2 C-3	180	40

【第6表】 溝跡出土遺物観察表

No.	器種	器形	計測値	胎土色調	焼成	器形・技法の特徴	備考
1	土師質上器	小皿	器高 2.3cm 口径 9.2cm 底径 2.25cm	キメやや粗く、金雲母を多く含む	暗茶色	良好	底部に糸切痕が看取される。
2	土師器	瓶	器高 7.6cm 口径 13.6cm 底径 5.1cm	キメ細かく緻密	明茶褐色	良好	外面底部下方に縦方向のハケ目、底部中央に径8mmの円孔有。



第38図 1号～5号溝跡及出土遺物



第39図 造構外遺物出土分布図

第3章 遺構外遺物（一部遺構内含）

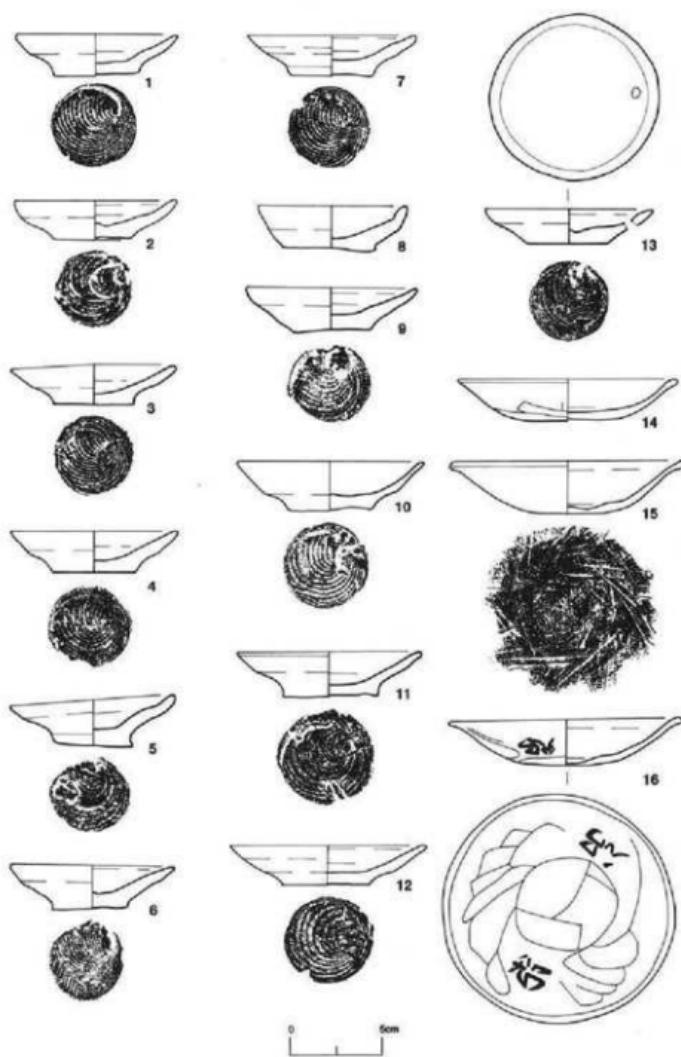
1. 土器（第40～43図、図版21～24）

【第7表】遺構外遺物出土土器観察表

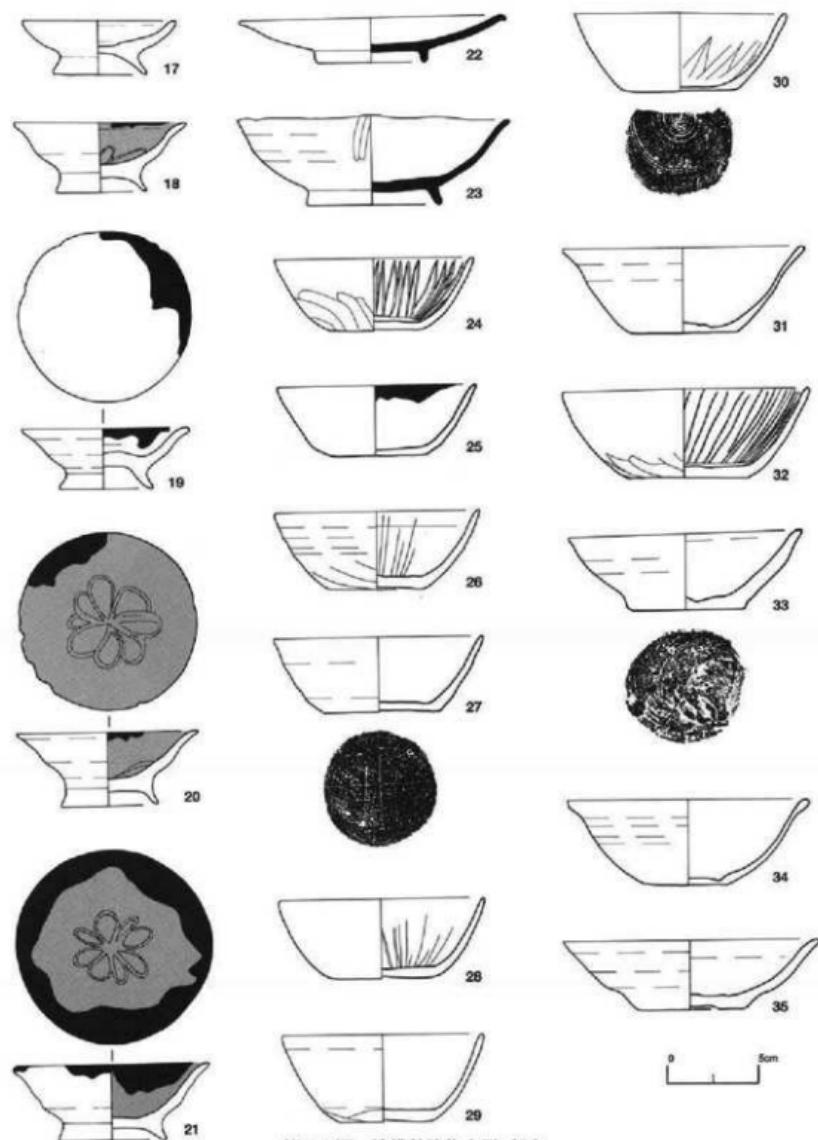
No.	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴	グリット
1	土師質土器	小皿	器高 2.4cm 口径 8.6cm 底径 4.6cm	キメ細かく緻密 金雲母を多く含む	暗茶色	良好	底部糸切痕有り ロクロ回転右	A-15
2	土師質土器	小皿	器高 2.25cm 口径 8.8cm 底径 4.35cm	"	"	良好	"	D-16
3	土師質土器	小皿	器高 2.25cm 口径 8.9cm 底径 4.15cm	キメ細かく緻密 金雲母を含む	暗茶色	良好	底部糸切痕有り	B-14
4	土師質土器	小皿	器高 2.3cm 口径 8.8cm 底径 4.7cm	キメ細かく緻密 砂粒と金雲母を含む	茶褐色	良好	底部糸切痕有り ロクロ回転右	C-15
5	土師質土器	小皿	器高 2.9cm 口径 8.8cm 底径 4.3cm	キメ細かく緻密 金雲母を多く含む	"	良好	底部糸切痕有り	A-17
6	土師質土器	小皿	器高 2.6cm 口径 8.7cm 底径 4.3cm	"	暗茶褐色	良好	底部糸切痕有り ロクロ回転右	A-17
7	土師質土器	小皿	器高 2.3cm 口径 8.9cm 底径 4.6cm	"	茶褐色	良好	底部糸切痕有り	B-14
8	土師質土器 (模倣)	耳状小皿	器高 2.5cm 口径 7.8cm 底径 5.2cm	キメやや粗く 金雲母、砂粒を多 く含む	"	良好	対をなす口縁部1ヶ所を体部 から内面にやや折り曲げてい る。底部糸切痕有り	A-17
9	土師質土器	小皿	器高 2.6cm 口径 9.1cm 底径 4.2cm	キメ細かく緻密 金雲母を多く含む	暗茶色	良好	底部糸切痕有り ロクロ回転右	D-15
10	土師質土器	小皿	器高 2.7cm 口径 9.8cm 底径 4.2cm	キメ細かく、金雲 母を多く含む	淡茶色	良好	底部糸切痕有り	A-19
11	土師質土器	小皿	器高 2.5cm 口径 9.8cm 底径 5.2cm	キメ細かく緻密 金雲母を多く含む 石英を少量含む	暗茶褐色	良好	底部糸切痕有り ロクロ回転右	C-12
12	土師質土器	小皿	器高 2.2cm 口径 10.4cm 底径 4.8cm	キメ細かく緻密 金雲母を多く含む	茶褐色	良好	底部糸切痕有り	A-19
13	土師質土器	小型環	器高 2.0cm 口径 9.0cm 底径 4.6cm	"	暗茶褐色	良好	体部に直徑5.5mmの円孔を有 す。底部糸切痕有り	D-16
14	土師器	皿	器高 2.3cm 口径 11.8cm 底径 5.1cm	キメ細かく緻密 小色粒子を多く含 む	茶褐色	良好	内・外面口辺部横ナギ仕上げ。 外面体部下半斜め方向のヘラ 削り	A-18
15	土師器	皿	器高 3.0cm 口径 12.4cm 底径 4.2cm	"	赤褐色	良好	内・外面口辺部横ナギ仕上げ。 外面体部下半は、粗雑なヘラ削り。 底部糸切痕有り。	A-20
16	土師器	皿	器高 2.6cm 口径 12.4cm 底径 5.2cm	"	明茶褐色	良好	内・外面口辺部横ナギ仕上げ。 体部外 側下半斜め方向へうきり。外側体部に 辺部糸切痕有り。ロクロ回転右	B-10
17	土師器	高台付小皿	器高 3.0cm 口径 8.2cm 底径 5.0cm	キメ細かく、金雲 母を多く含む	暗茶褐色	良好	ロクロ回転右	A-15
18	土師器	高台付小皿	器高 4.0cm 口径 9.3cm 底径 4.9cm	"	外側 暗茶褐色 内面 黒色	良好	内面口縁部媒痕付着。内面底 部に花卉状暗文有り。内黒土 器	C-14

No.	器種	器形	計測値	胎 土	色 調	焼 成	器形・技法の特徴	グリット
19	土師器	高台付小皿	器高 3.4cm 口径 8.80cm 底径 5.0cm	キメやや粗く 砂粒を多く含む	明茶褐色	良好	内・外面口辺部煤痕付着 ロクロ回転右	B-15
20	土師器	高台付小皿	器高 4.1cm 口径 9.6cm 底径 5.3cm	キメ細かく緻密 金雲母を多く含む	外面 暗褐色 内面 黒色	良好	内・外面口辺部煤痕付着 内面底部に花卉状暗文有り 内墨土器	B-15
21	土師器	高台付小皿	器高 4.3cm 口径 10.5cm 底径 5.9cm	"	外圍 明茶褐色 内面 黑色	良好	内・外面口辺部全体に煤痕付着。内面底部に花卉状暗文有り。内墨土器	C-14
22	須恵器	高台付小皿	器高 2.6cm 口径 14.0cm 底径 6.1cm	キメ細かく緻密 硬質	明灰色	良好		D-17
23	須恵器	高台付环	器高 4.9cm 口径 14.7cm 底径 7.2cm	"	灰白色	良好	外底、口縁部から全体にかけて約8 回転のヘラ括き塗が施される。 内面口縁から全体にかけて灰釉が 施される。底部糸切痕有り	C-14
24	土師器	环	器高 4.0cm 口径 10.6cm 底径 4.9cm	キメ細かく緻密	明茶褐色	良好	外面部下半に斜め方向のヘラ削り。 外面部底部へラ整形。 内面放射状暗文	B-15
25	土師器	环	器高 4.0cm 口径 10.8cm 底径 5.2cm	"	"	良好	一部口縁内外面に煤痕付着	D-15
26	土師器	环	器高 4.4cm 口径 11.0cm 底径 5.3cm	"	"	良好	内外面、口辺部横ナデ仕上げ。 外面部底部半斜め方向のヘラ削り。 内面に放射状暗文が施す。 底部糸切痕、周辺をヘラ整形。	B-15
27	土師器	环	器高 4.2cm 口径 11.3cm 底径 6.3cm	キメやや粗く 赤色粒子、砂粒を 含む	茶褐色	良好	外面部口縁横ナデ仕上げ。 外面部底部に「+」の削痕が看取 される。外面部糸切痕後、周辺 をヘラ整形。	D-15
28	土師器	环	器高 4.45cm 口径 11.1cm 底径 5.4cm	キメ細かく緻密	暗茶褐色	良好	外面口辺部横ナデ仕上げ。 内面に放射状暗文が施される。 底部糸切痕有り	B-15
29	土師器	环	器高 4.9cm 口径 10.8cm 底径 5.0cm	"	明茶褐色	良好	外面部下半に斜め方向のヘラ削り。 底部糸切痕有り	B-15
30	土師器	环	器高 4.4cm 口径 11.3cm 底径 6.4cm	"	"	良好	外面部下半に斜め方向のヘラ削り。 内面放射状暗文	B-15
31	土師器	环	器高 4.8cm 口径 13.0cm 底径 5.9cm	キメやや粗く 小石を多く含む	茶褐色	良好	外面部下半粗雑なヘラ削り。 底部糸切痕後、周辺をヘラ整 形。ロクロ回転右	B-15
32	土師器	环	器高 5.0cm 口径 13.4cm 底径 6.6cm	キメ細かく緻密	明茶褐色	良好	外面部下半斜め方向のヘラ削り。 底部ヘラ整形。 内面放射状暗文を施す。	B-15
33	土師質土器	环	器高 4.3cm 口径 12.6cm 底径 6.5cm	キメやや粗く 金雲母を多く含む	黑茶色	良好	底部糸切痕有り ロクロ回転右	D-15
34	土師器	环	器高 4.75cm 口径 12.7cm 底径 4.6cm	キメやや粗く 赤色粒子、砂粒を 含む	茶褐色	良好	外面部下半に斜め方向のヘラ削り。 底部ヘラ整形	A-20
35	土師質土器	环	器高 3.85cm 口径 13.6cm 底径 6.0cm	"	"	良好	底部糸切痕有り。 ロクロ回転右	B-14
36	土師器	环	器高 5.3cm 口径 15.5cm 底径 5.5cm	キメ細かく緻密 赤色粒子を多く含 む	明茶褐色	良好	外面部下半斜め方向のヘラ 削り。底部ヘラ整形。 ロクロ回転右	D-17
37	土師器	环	器高 5.9cm 口径 15.3cm 底径 6.1cm	キメ粗く 石炭、砂粒を多く 含む	外底 小褐色 内面 黑色	良好	内面放射状暗文 底部ヘラ整形 内墨土器	A-13

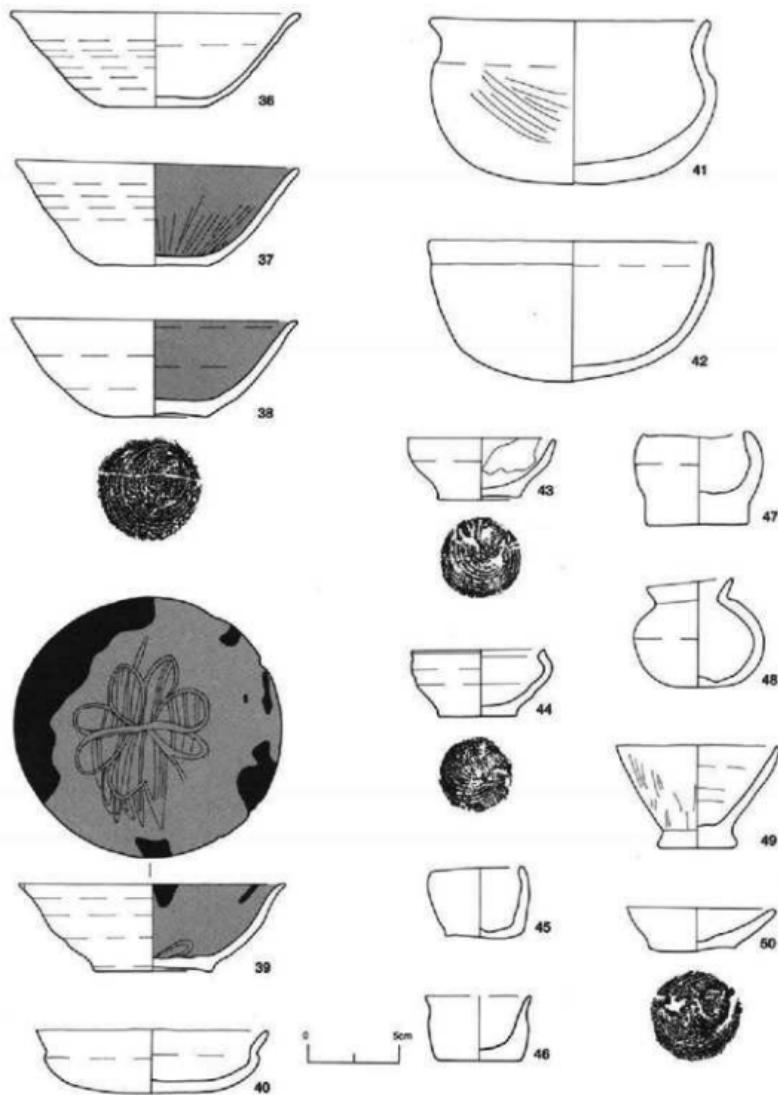
No	器種	器形	計測値	胎 土	色 調	焼成	器形・技法の特徴	グリット
38	土師器	壺	器高 5.5cm 口径 15.4cm 底径 5.2cm	キメ粗く 砂粒を多く含む	外面 淡茶色 内面 黒色	良	底部糸切痕有り 内黒土器	B - 16
39	土師質土器	壺	器高 4.85cm 口径 14.3cm 底径 6.4cm	キメやや細かく 金雲母を多く含む	外面 葉緑色 内面 青色	良好	内・外面部辺縁部付着 内面部花弁状暗文 底部糸切痕有り、内黒土器	C - 14
40	土 師 器	鉢	器高 3.5cm 口径 12.5cm 底径 4.9cm	キメ細かく緻密	茶褐色	良好	内・外面部方向にハケ目を施す。 外面部和輪方向にハケ目を施す。 内面部全体から部材にかけ て朱が施される。古墳時代後期	B - 10
41	上 師 器	鉢	器高 9.2cm 口径 15.1cm 底径 4.7cm	キメ細かく 赤色粒子を少疊合 む	外面 淡茶褐色 内面 黒色	良好	内・外面部ノブ上げ。内面部泥棒 方向にハケ目を施す。外面部泥棒 め方向にハケ目を施す。内里土器 底面に朱痕有り。古墳時代後期	B - 10
42	土 師 器	鉢	器高 7.8cm 口径 15.3cm 底径 4.1cm	キメ細かく緻密	明茶褐色	良好	内・外面部辺縁から部材に横 方向の磨き。底部不規則な磨 き。内面黒色処理	D - 8
43	土師質土器	小型壺	器高 3.45cm 口径 7.8cm 底径 4.5cm	キメやや細かく 金雲母を多く含む	暗茶褐色	良好	底部糸切痕有り ロクロ回転石	D - 16
44	土師質土器	小型壺	器高 3.7cm 口径 7.2cm 底径 4.3cm	キメ細かく 金雲母を多く含む	茶褐色	良好	体間にナカバ透加の凹孔を有す。この孔を中 心にして十箇所に墨で印字していること からこの孔は光明の孔を取り入れるものと考え られる。底部糸切痕有り、ロクロ回転石	D - 16
45	土 師 器	ミニチュア 土 器	器高 4.0cm 口径 4.6cm 底径 4.2cm	キメやや粗く 小石を含む	暗茶褐色	良好	作りは粗雑で底部に指頭痕が 看取られる	A - 15
46	上 師 器	ミニチュア 上 器	器高 3.6cm 口径 5.5cm 底径 4.6cm	キメやや細かく 石英、長石を含む	茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。 丁寧な作り。底部ヘラ整形	B - 17
47	土 師 器	ミニチュア 土 器	器高 5.2cm 口径 5.5cm 底径 5.5cm	キメ粗く 砂粒を多く含む	黄灰色	良	底部ヘラ整形	A - 15
48	土 師 器	ミニチュア 土 器 小 型 壺	器高 6.0cm 口径 4.5cm 底径 3.5cm	キメやや細かく 右英、長石を含む	明茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。 底部ヘラ整形	B - 18
49	上 師 器	ミニチュア 土 器	器高 5.7cm 口径 9.0cm 底径 4.1cm	キメ細かく緻密 金雲母、長石を含 む	暗茶色	良好	内面部方向のヘラ磨き。外面部 方向のハケ目後に縱方向のヘラ 磨き。底部成形	B - 20
50	土師質土器	耳状小壺	器高 3.0cm 口径 7.8cm 底径 4.5cm	キメやや細かく 金雲母を多く含む	茶褐色	良好	対をなす口縁部1ヶ所を体部 から内面にやや回り曲げてい る。底部糸切痕有り	A - 15
51	須恵器	円面鏡	現存高2.3cm 推定口径 16.5cm	キメ細かく 小石を多く含み、 硬質	茶褐色	良好	円形を呈し、裏表面の輪張周囲に縁を造 り、その外周から凹入り、凹の裏 面となる。裏面には次穴があるが表面缺陥、 孔孔の通し孔であることが考えられる。	A - 15
52	土 師 器	蓋	現存高約3.4cm 推定口径 15.0cm	キメやや細かく緻 密。小石を多く含 む	白茶色	良		A - 18
53	土 師 器	蓋	現存高約4.0cm 推定口径 22.8cm	キメ細かく緻密。 硬質	茶褐色	良好	據部分を欠損する。 内面部方向のヘラ磨きを施す。	B - 15
54	土 師 器	小型壺	器高 14.2cm 口径 13.8cm 底径 7.0cm	キメやや粗く、石 英、長石を多く含 む	茶褐色	良好	内面部辺縁横方向のハケ目。外面部 横方向に斜め方向のハケ目を施す。口辺 部横ナデ仕上げ。近部木炭痕を有す。	D - 8
55	上 師 器	小型壺	器高 16.5cm 口径 12.0cm 底径 6.6cm	キメやや粗く 石英、長石を多く 含む	暗茶褐色	良好	内面部横方向のハケ目を施す。 底部木炭痕有り。	D - 10
56	土 師 器	長脚壺	器高 32.0cm 口径 18.1cm 底径 6.8cm	キメやや粗く、赤 色粒子、石英を多 く含む	茶褐色	やや良	内・外面部辺縁横方向のナデ仕上げ。 外面部体部に縦方向のハケ目を 施す。底部木炭痕有り。	D - 10
57	土 師 器	長脚壺	器高 32.5cm 口径 20cm 底径 6.1cm	キメ粗く粗雑	淡褐色	良	内・外面部辺縁横方向のナデ仕上げ。 外面部は、二次的な焼成によって脚部 剥離が著しい。底部木炭痕	D - 8



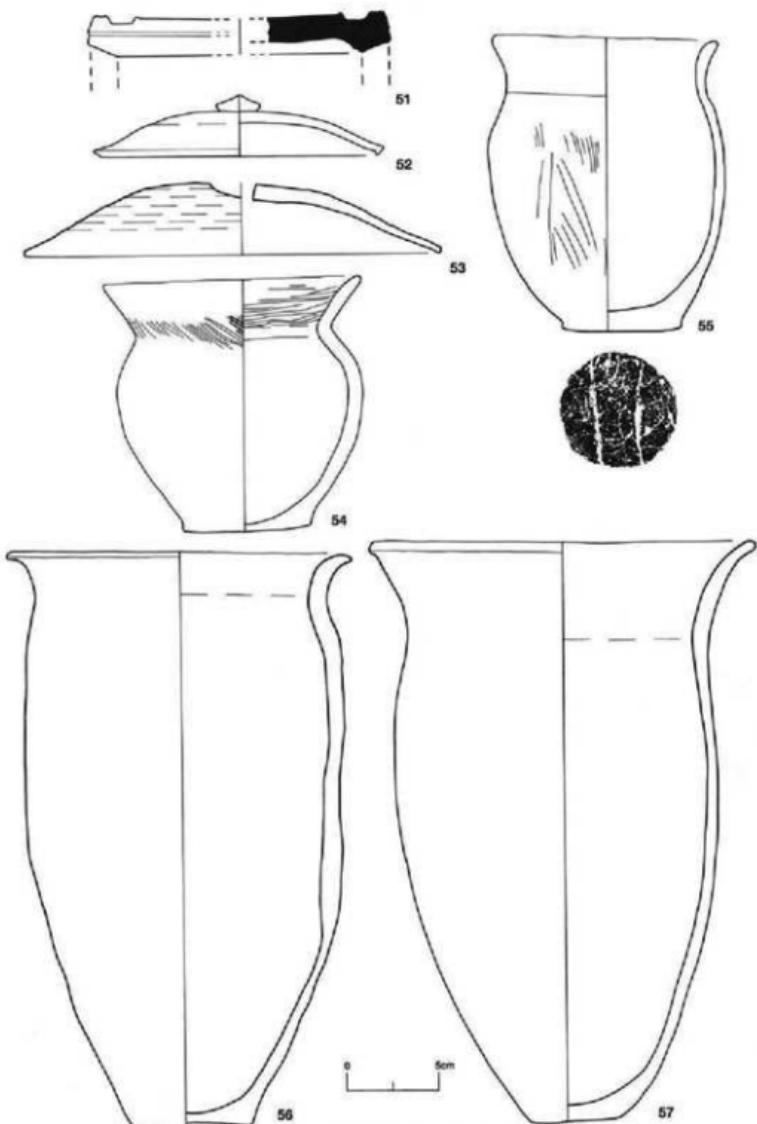
第40図 遺構外遺物土器(1)



第41図 遺構外遺物土器(2)



第42図 遺構外遺物土器（3）

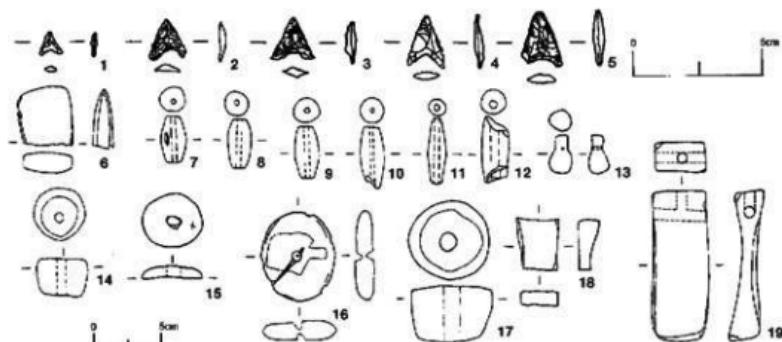


第43図 造構外遺物土器(4)

2. 石器・土製品・石製品（第44図、図版25）

【第8表】 石器・土製品・石製品観察表

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴	グリット
1	石 器	無茎石鏟	最大幅0.9cm 長さ 0.9cm 厚さ 0.2cm	石材 黒曜石	やや透明 黒色			B-12
2	"	"	最大幅1.0cm 長さ 1.6cm 厚さ 0.25cm	"	"			B-19
3	"	"	最大幅1.7cm 長さ 1.7cm 厚さ 0.35cm	"	"			C-12
4	"	"	最大幅1.4cm 長さ 2.05cm 厚さ 0.3cm	"	"			B-15
5	"	"	最大幅1.5cm 長さ 2.15cm 厚さ 0.4cm	"	"			D-14
6	"	磨製石斧	最大幅3.75cm 長さ 4.55cm 厚さ 1.55cm	石材 蛇紋岩	茶褐色		全体に入念に研磨され滑沢な面をなす。刃部両面は丁寧に研かれる。	D-10
7	土 製 品	土 簾	長軸 3.6cm 短軸 1.9cm	キメ細かく緻密	黑茶色	良好	中央部に膨らみを持ち、先端部は直線取りされている。外側は磨きが施されている。直径3.5mmの円孔を有す。	B-16
8	"	"	長軸 3.7cm 短軸 1.85cm	"	暗茶色	"	"	D-14
9	"	"	長軸 4.0cm 短軸 1.8cm	キメ細かく 砂粒を少暈含む	黑茶色	良	"	A-18
10	"	"	長軸 4.7cm 短軸 1.9cm	キメ細かく 砂粒を含む	明茶色	"	中央部に膨らみを持ち、先端部は直線取りされている。直径3mmの円孔を有す。片方の先端部破損	B-7
11	"	"	長軸 5.0cm 短軸 1.4cm	キメ細かく緻密	茶褐色	良好	中央部にやや膨らみを持ち、外側全体に磨きが施される。直径4cmの円孔を有す。片方の先端部破損	9号住居
12	"	"	長軸 5.7cm 短軸 2.05cm	キメ細かく緻密 赤色粒子を少暈含む	"	"	直径5mmの円孔を有す。両端部及び半面を欠損する。	A-15
13	"	不 明	長径 2.95cm 幅径 0.8cm 最大直径 1.4cm	キメ細かく 雲母・石英を含む。	"	"	端部に直径2.5mmの円孔を有す。	B-18
14	"	纺錘車	厚さ 2.9cm 直径 3.9cm	キメやや細かく、 小色粒子、長石を 多く含む。	"	"	中心に最大径7mmの円孔を持つ。孔を有す面は、ヘラ整形が施される。	B-13
15	"	"	厚さ 1.0cm 直径 3.9cm	キメやや細かく、 砂粒を含む。	"	"	中心に最大径9mmの円孔を持つ。凸面部に「X」の線刻がある。	A-15
16	石 製 品	石 簾	長軸 6.85cm 短軸 5.75cm 厚さ 1.5cm	石材 花崗岩	灰茶色		両面中央部に直径6mmの孔を持つ。(貫通しない) 両面及び端にV字状の刻みを持つ。	C-14
17	"	纺錘車	高さ 4.3cm 直径 6.2cm	"	灰白色		中央部に直径1.25cmの円孔を持つ。	B-17
18	"	砥 石	最大幅3.2cm 規格厚3.8cm 厚さ 1.6cm	"	暗灰色		使用面4面	C-14
19	"	"	最大幅4.3cm 長さ 11.6cm 最大厚2.3cm	"	黄灰色		使用面4面。上部の3面に直徑8mmの円孔を持つ、内部で「U」状につながる。	15号 住居

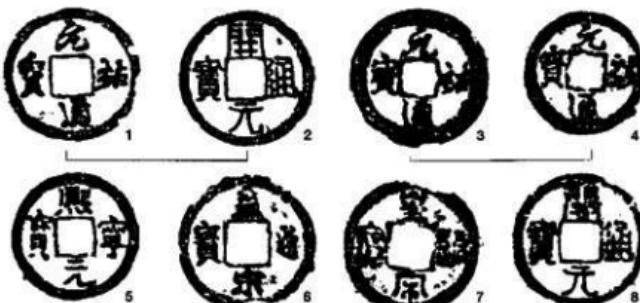


第44図 石器・土製品・石製品

3. 銅製品 (第45・46図、図版27・28・30)

【第9表】 古銭観察表

No.	銭貨名	国名	初鑄年	外縁径	内縁径	厚さ	備考
1	元祐通寶	北宋	元祐元年(1086年)	2.468cm	2.075cm	1.5mm	銭No 2と付着
2	開元通寶	唐	武徳4年(621年)	2.52cm	2.08cm	1.5mm	銭No 1と付着
3	元祐通寶	北宋	元祐元年(1086年)	2.495cm	1.790cm	1.25mm	銭No 4と付着
4	元祐通寶	北宋	元祐元年(1086年)	2.190cm	1.710cm	1.20mm	銭No 3と付着
5	熙寧元宝	北宋	熙寧元年(1068年)	2.305cm	1.915cm	1.41mm	
6	皇宋通寶	北宋	宋元年(1038年)	2.481cm	2.100cm	1.26mm	
7	皇宋通寶	北宋	宋元年(1038年)	2.440cm	1.982cm	1.18mm	
8	開元通寶	唐	武徳4年(621年)	2.450cm	2.095cm	1.42mm	



第45図 古銭

古銭 1～8は渡来銭である。すべて第2調査区の15号住居跡上の遺構確認面において一ヶ所にまとまって出土している。出土層位や15号住居の年代などから遺構には伴わない。

鐵 9は第1調査区A-15グリット黒色包含層中より出土している。小形柳葉式で全長は3.43cm、鐵身長2.07cm、鐵身幅0.93cm、重量2.69gを測る。

帶金具 10は第2調査区東側遺構確認面より出土している。帶金具の蛇尾具と思われる。半梢円形状を呈し、3角状に紙が配され、このうち2ヶ所に径1.9mmの紙が看取される。総長さ2.25cm、横幅2.3cm、厚さ2.9mmを測る。

特殊遺物 11は第1調査区C-16グリット黒色包含層中より出土している（凡例計測図）。重量12.5gを測る。

仏像 2軀とも第1調査区C-15グリットより出土している。1号仏像は12号住居跡の北壁や西側際の覆土上層より出土している。法皇は表10に示すとおりで、台座部分が欠損する。頭部は三角形状を呈しており顔面と頸部を分ける部分が段となってかすかに看取され、また、頭部が面長とほぼ同じ長さであること、蝶髪の痕跡が見られないことなどから宝冠を被せていたと考えられる。創立ちは磨耗が著しく見ることはできないがやや細面を呈す。

蓮弁裏中心部には長径1.398cm、短径1.065cm、厚さ0.281cmの梢円形状の突起があり、台座の欠損部と思われる。この欠損部から像正面に向かって左右に幅0.45cm、厚さ0.24～0.39cmの帯状隆起が蓮弁上まで延び、定印を組む肘におよぶ。背面腹部中央には径0.25cmの円形状突起が有る。背面からの突起厚は0.261cmで光背用の構と考えられる。

2号仏像は、1号仏像出土地点より北北東へ1.8mの上層確認ベルト内より出土した。法皇は表に示すとおりである。頭部は1号仏像と同じく三角形状を呈し、顔立ちは目、鼻、口とも肉眼ではっきりと看取できる。1号仏像に比べやや幅広の面立ちである。

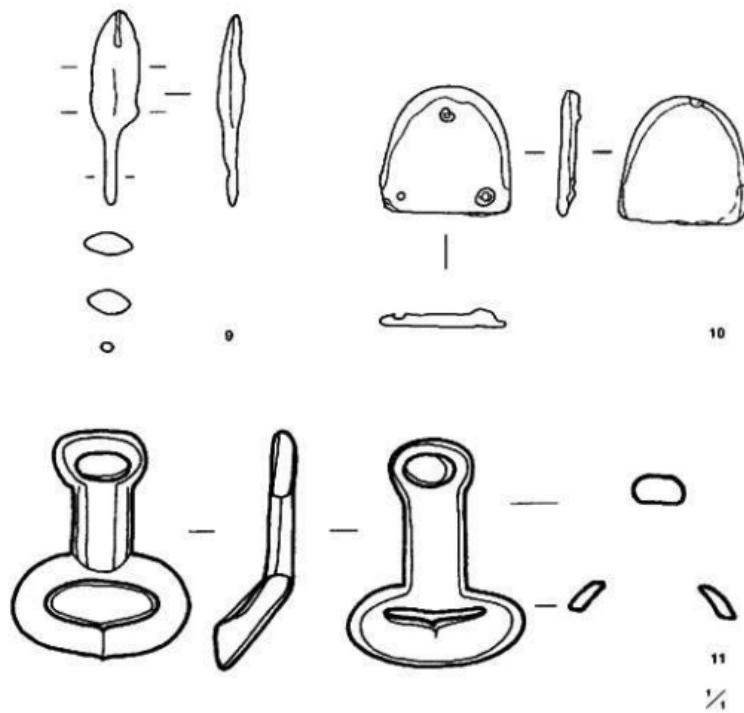
左肩から手首および左肩より左胸部、腹部にかけて衣を表現した無数の刺みが看取される。また、右肩より右二の腕にかけて3本の縦方向の刺みが見られ右は二の腕まで衣が覆われている表現となっている。背面は腰部中央から幅0.52cm、長さ1.19cmの帯状を呈した突起が蓮弁上まで延び接合される。

台座上部裏には蓮弁がかすかに看取できる。蓮弁下方より径1.32cmの台座軸（上敷茄子か？）が0.572cm延び、その下に残存径2.97cmの華盤があり、華盤と密着するかたちで球状の軸が続く（軸は下敷茄子か？）。軸の最大径は1.82cmである。その下が径4.182cmの有段（上・下軸）の樞座となる。樞座の底部は凹状を呈しているがほぼ中心部分に幅0.54cm、長

さ3、0.8 cmの帯状隆起が正面に向かって左右に延びる。両像とも底部に見られる帯状の隆起は、前後合わせ型の鋳型を組、鋳造した際にできた組合わせ部分と考えられる。

2号仏像柄座左右に幅1.6 cmの欠損ヶ所がある。又、胸部には鍍金が看取される。

2躯とも銅製一铸で無垢、腹前で足印をし、結跏趺坐、偏袒右肩の姿で、2号仏像には大冠台が看取される。宝冠阿弥陀如来坐像と考えられる。



第46図 銅 製 品

【第10表】 仏像法量表

(単位: cm)

各部位	總高	像高	頂一頸	面長	面幅	面奥	肩幅	胸厚	膝張	台座幅		台座奥	
										連弁	華蓋	下框	連弁
1号 仏像	5.46	4.50	1.89	0.80	0.81	1.09	1.64	1.23	3.06	3.34	—	—	3.35
2号 仏像	7.16	4.13	1.65	0.90	0.88	1.18	1.83	1.12	3.09	3.80	2.73	3.67	3.58
												2.97	4.24

4. 鉄製品(第47図、図版29)

1は鉗具である。第1調査区B-13グリット黒色包含層中より出土している。コ字型の鍼金の一辺は4.7cmである。

2は刀子で第1調査区C-20グリット黒色包含層中より出土している。刀部長さ11.4cm、茎部長さ6.2cm、刃最大幅1.9cm、同最小幅0.68cmを測る。片闊平造で刃部と茎部が約45度に折れ曲がる。

3は刀子で、1号住居より出土している。茎部を欠損する。現存長さ12.83cm、刃部長さ10.86cm、刃部幅1.74cmを測る。片闊平造

4は刀子で、6号方形壺穴状遺構より出土している。峰部が欠損する。現存長さ11.47cm、茎部長さ5.3cmで片闊である。

5は刀子で、第1調査区A-17グリットより出土。現存長さ13.65cm刃幅平均2.43cmを測る。現存部分は平造の刃部で、全体に木質が付着している。木質は鞘の可能性も考えられる。

6は刀子で、第1調査区A-17グリットより出土している。現存長さ12cm、茎部長さ4cm、刃部幅1.83cmを測る。刃先端部は欠損する。両闊平造。

7は、第3調査区F-2グリットより出土している。現存長さ8.67cm、茎部長さ4.8cmを測る。刃部の大部分が欠損する。両闊平造。

8は平根式鐵で、第1調査区A-15グリット黒色包含層中より出土。全長11.62cmを測る。三角形狭峰長茎鏡被式。

9は平根式鐵で、全長11.18cm、狭峰長茎鏡被式。第1調査区C-10グリット黒色包含層中山土。

10は平根式鐵で、第1調査区C-20グリット黒色包含層より出土している。全長10.47cmを測る。丸造狭峰長三角形式。

11は平根式鐵で、現存長さ7.95cm、鏡部長さ1.88cm、茎部長さ2.9cmを測る。第1調査区B-16グリット黒色包含層山土。廣扶脣扶範被式。

12は釘の固まりである。第1調査区C-15グリット黒色包含層中より出土、錫びによって釘が無数に塊った状態である。肉眼で釘先の4面が看取できる。

13は角釘で、第1調査区D-10グリット黒色包含層より出土している。現存長さ12.42cm、頭部径2.7cmを測る。先端部は欠損する。頭部は円形を呈し、片方へ引伸ばした形で中心軸とずれる。

14は角釘で第1調査区C-15グリット黒色包含層より出土している。長さ12.1cm、頭部は径1.98cmの円形状を呈す頭部は片方へ引伸ばした形で中心軸よりずれる。

15は角釘で同上地点より出土している。現存長さ7.65cm、頭部長径2cm、短径1.22cmの長方形を呈し片方へ引伸ばした形で中心軸とずれる。

16は角釘で全長11.25cm、頭部は長径2.13cm、短径0.9cmと長方形を呈す。頭部はやや片方へ引伸ばされている。C-10グリット黒色包含層より出土。

17は繩子で第1調査区D-17グリット黒色包含層より出土。全長10.37cm、全体がU字を呈し、擦み部分がΩ状を呈す。

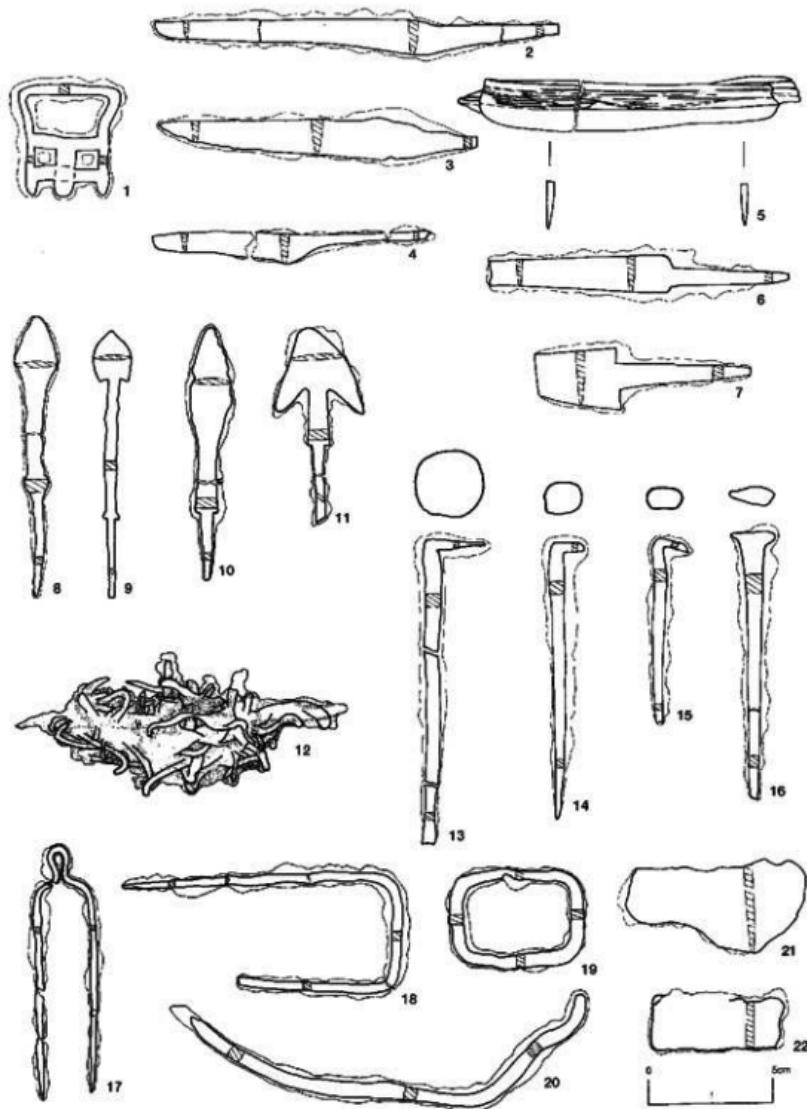
18は棒状鉄製品で10号住居より出土している。用途などは不明。

19はリング状の鉄製品で長方形を呈す。鉄具の外枠の金具に形が類似するが棒状止金具などの痕跡は看取できない。用途不明。第1調査区A-4グリット黒色包含層より出土。

20は棒状鉄製品で用途などは不明である。第1調査区A-7グリット黒色包含層より出土。

21は用途不明品、第2調査区西側遺構確認面出土。

22は用途不明品。第1調査区B-4グリット1号溝出土。長径5.6cm、短径2.57cm、厚さ0.77cmの長方形を呈す。



第47図 鉄製品

玉類(第48図、図版30)

本遺跡出土の玉類は全て包含層中より出土した。そのためこれら玉類の帰属する時期や性格を限定することは困難である。そこでここでは玉類の観察を行った上で、県内の出土例等からその性格を推測していきたい。

1. 勾玉(第48図1) 第2調査区より出土した。全長23mm、幅10mm、重量2.42gを測る。石材は滑石製で、逆C字形を呈する。表裏面共に砥石により丁寧に研磨される。背部及び腹部は細かな調整が行われており、穿孔は片側方向より施されている。
2. 白玉(第48図2) 第1調査区B-19グリッドより出土した。最大径12.5mm、高さ8mm、重量1.91gを測る。石材は勾玉と同様の滑石製で灰褐色を呈する。側面は砥石により縱方向に研磨されており、穿孔は片側方向より行われている。表裏面ともに研磨した痕跡が認められるが、凹凸が著しい。
3. 土製丸玉(第48図3) 第1調査区A-20グリッドより出土した。最大径12mm、高さ14mm、重量1.2gを測る。材質は土製で金雲母を微量に含む。欠損部分の観察より、成形の後に焼成されているため表面は黒褐色を呈する。穿孔は片側より行われており、上面には穿孔具を引き抜いたときに生じたと思われるバリが認められる。
4. ガラス製小玉(第48図4・5) 4は第1調査区A-14グリッドより出土した。最大径5mm、高さ4mm、重量0.12gを測る。色調はコバルトブルーである。若干縦に長く、内面の気泡が孔に沿っているため、細長いガラス管を短く切り、切断面に熱を加えてながらに成形した管切り技法により製作されたと思われる。5は第1調査区B-12グリッドより出土した。最大径3mm、高さ2mm、重量は0.02gを測る。色調は4とは若干異なり、濃青を呈する。作製技法は不明であるが上下の孔付近に気泡が集中しており、液体状に溶かしたガラスを鋳型に流し込んで製作された可能性もある。
5. 磁石状石製品(第48図6~8) 6は第1調査区A-10グリッドより出土した。最大径15mm、高さ7mm、重量は2.23gを測る。7は第3号住居跡より出土した。最大径15mm、高さ7mm、重量は1.99gを測る。6・7共に石英質で、色調は乳白色を呈する。表裏面共に平坦な面を持ち、側面は丸くなだらかに調整されている。8は第1調査区A-10グリッドより出土した。最大径18mm、高さ7mm、重量は2.91gを測る。材質は不明であるが、色調は黒色を呈する。6・7同様に表裏面は平坦で側面は丸くなだらかに調整が施されている。
6. 切子玉(第48図9) 第1区A-4グリッドより出土した。全長19mm、幅13mm、重量3.7gを測り、六角形を呈する。片側より穿孔されている。表面は使い込まれ、いずれも棱は丸みを帯びている。

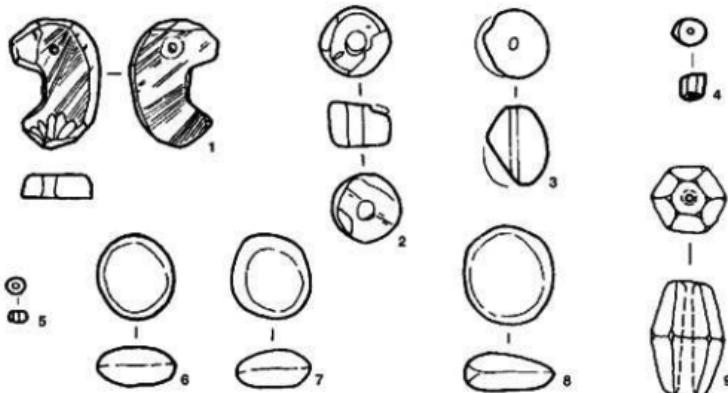
以上、遺物について観察を行った。次に遺物それぞれの性格について若干の所見を加えてみたい。滑石製勾玉と白玉は滑石製模造品である。滑石製模造品は祭祀に伴う遺物としての性格が色濃く、古墳時代中期の遺跡である甲府市伊勢町遺跡等で勾玉が確認されているなど¹¹、本県においては古墳時代中期頃にその出現が認められるものの出土例は希薄で

ある^③。以後、祭祀形態の継続性については不明であるが、二之宮・姥塚遺跡の複数の住居跡からも滑石製勾玉及び白玉が出土しているなど、滑石製模造品は奈良・平安時代までその出土例が知られている。本遺跡の性格が古墳時代後期及び平安時代の集落であること、また県内の該期の集落でこれらの事例が認められることから、本遺跡出土の勾玉・臼玉も同様の性格を持ち合わせている可能性がある。

蔵石状石製品は裝身具及びそこから派生した祭祀具としての性格を持った玉類とはその性格を異にするものと思われる。本遺跡では乳白色のものが2点、黒色のものが1点、合計3点が出土した。3点とも出土地点は異なっているが、大きさはほぼ均一で、全体の調整方法も共通している。桜井畠遺跡A地区^⑤においても、中世に位置づけられる第1号堅穴状造構で、「黒色の小石」が22点確認されている。本遺跡においては他に「碁」の存在を明確に示す遺物が出土していないため、これらの遺物が碁石であるとは直ちに断定できない。だが県内において「碁」という“遊び”的初現を考えるとでも、興味深い遺物である。

【註】

- (1) 甲府市『甲府市史』史料編第1巻原始・古代・中世 1989
 - (2) 宮沢公雄『山梨県における古墳時代の祭祀』『古墳時代の祭祀』東日本埋蔵文化研究会 1993
 - (3) 板本美夫『二之宮遺跡』山梨県埋蔵文化センター調査報告第23集 山梨県教育委員会 1987
 - (4) 木木健他『姥塚遺跡・姥塚無名塚』山梨県埋蔵文化センター調査報告第24集 山梨県教育委員会 1987
 - (5) 版本美夫・中山誠二『桜井畠遺跡A・C地区』山梨県埋蔵文化センター調査報告第54集 山梨県教育委員会 1990
- (石神孝子)



第48図 玉類

【第11表】 墨書き器一覧表

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形調整の特徴	出土位置
1	上師器	環	破片	砂粒を含む	茶褐色	良	外面体部に「火」の墨書き	D-7
2	上師器	環	破片	"	"	良	外面体部に「酉」の墨書き	B-11
3	上師器	環	破片	"	外面茶褐色 内面黒色	良	外面体部に「ヒ」の墨書きと擦剥あり。内墨土器	2号溝 (B-7)
4	上師器	皿	破片	"		良	外面底部に「木」の墨書き	12号 住居
5	上師器	環	破片	きめ細かい	"	良	外面体部に「火」の墨書き	3号方 形窓穴 遺構
6	土師器	環	器高 2.6cm 口径 8.7cm 底径 4.3cm	砂粒を含む	"	良	外面底部に「中」の墨書き	A-20
7	土師器	環	器高 4.3cm	きめ細かい	明茶色	良	外面底部に「セ」の墨書き	B-15
8	土師器	皿	口径 13.4cm	小石を含む	"	良	外面体部に「蠍」の墨書きが2ヶ所ある。玉縁口縁	7号 住居
9	土師器	環	底径 6.5cm	"	褐色	良	外面体部に「蠍」「口」の墨書き二ヶ所あり。	7号 住居
10	上師器	環	器高 4.8cm 口径 14.4cm 底径 5.7cm	微砂粒を多く含む	外面茶褐色 内面黒色	良	外面体部に「田」の墨書き	12号 住居
11	土師器	環	底径 6.5cm	小石を含む		良	外面体部に「身」の墨書き 内面に放射状略文あり	19号 住居
12	土師器	皿	器高 2.6cm 口径 12.4cm 底径 5.2cm	きめ細かい	明茶褐色	良好	外面体部に「蠍」の墨書きが二ヶ所あり。	B-10 (外)16

第4章 総括

はじめに

甲府盆地北部、特に中央部から北西部地域における8世紀から10世紀にかけての遺跡は甲府市北部東側に位置する大坪遺跡、桜井畠遺跡などが知られ、数回にわたり行われた発掘調査によってその全容が明らかになりつつある。昭和50年、同57年に調査が実施された大坪遺跡からは多量の甲斐型土器が出土し、その年代は8~10世紀に位置付けられ、遺跡の性格は土器生産地とされる。大坪遺跡から東へ約1.4kmの地点に桜井畠遺跡がある。本遺跡はA・C地区とB地区とに区分され調査が行われており、調査結果からA地区では8世紀から10世紀後半に位置付けられ、B地区は7世紀から10世紀末ごろの遺跡となる。桜井畠遺跡の北方約300mには7世紀後半の寺本廃寺へ瓦を供給した川田瓦窯跡が、さらに100m北西には甲斐國分寺への瓦供給が行われた土器遺跡がある。

また、大坪遺跡からは『甲斐国山梨郡表門』と記された刻書土器が出土しており、この地域が律令制下の甲斐国山梨郡に属し、政治的・経済的に大きな役割を果たしていたことが明らかになっている。一方甲府市北部西側から中巨摩郡北東部、北巨摩郡南東端部地域における8世紀から10世紀の歴史環境は考古学的調査の少なさから空白の状態であった。

今回の松ノ尾遺跡の発見、調査はこの地域における歴史的空白を埋め更に出土遺物の特殊性によって政治的・経済的背景の一端を探るうえで大きな成果が得られたと考えられる。

最後に出上した遺構、遺物について整理をし、まとめとする。

古墳時代

本遺跡における古墳時代の遺構は4号、5号、9号、15号、16号住居跡、及び6号方形竪穴状遺構で、いずれも後期に位置する。各遺構とも残存状況は良好に保たれ、遺物も一部まとめて出土している。

平安時代

本遺跡の出土遺物や遺構は10世紀及び11世紀後半を中心とするものが多く、甲府盆地北西部の平安時代の歴史研究を進める上で貴重な資料を提示することとなった。

遺構のなかでは6号住居跡が9世紀末から10世紀初頭でもっとも古い時期に属す。続いて11号住居跡が10世紀初頭から第3四半期に位置し、10世紀第4四半期に3号、7号、10号、12号住居跡、3号方形竪穴状遺構、10世紀末から11世紀初頭にかけて20号住居、11世紀代に19号住居跡、11世紀末に17号住居跡及び2号方形竪穴状遺構が属し、11世紀末から12世紀前半にかけて1号、2号、14号住居跡及び1号の方形竪穴状遺構が続くものと考えられる。8号、13号、18号住居跡については時期を特定できる遺物の出土がなかったため明確にはできないが住居規模などから平安時代に属するものと考えられる。

甲斐型編年	松ノ尾	時 期		遺 構
		I段階	6c末～7c前	
VII期	II段階	9c末～10c初	6住	
IX～XI期	III段階	10c初～10c第3四半期	11住	
XII期	IV段階	10c末	3住、7住、10住、12住、3堅穴	
XIII期	V段階	10c末～11c前	20住	
XIII～XIV期	VI段階	11c	19住	
XIV期	VII段階	11c末	17住、2堅穴	
XV期	VIII段階	11c末～12c前	1住、2住、14住、1堅穴	
		平安時代	8住、13住、18住 4・5・7堅穴	

第12表 遺構時期分類

黒色土層と遺構外遺物

第12表のとおり松ノ尾遺跡からは20軒の住居跡、7基の堅穴状遺構などが調査されているが、出土遺物をみると完形或いは復元可能な物のうち28%が遺構外からの出土となる。遺構外遺物の内の大部分が基本層序第IV層の黒色土からである。IV層は黒色を呈し、約30～40cmの厚さで堆積し、雲母、砂粒、層下位では20～40cmの花崗岩を含む。

遺構外遺物の特徴的なものを整理してみると、土器類では甲斐型編年第VII期及び第XV期に位置付けられる壺、小皿が多く見られ、凹面鏡も本層からである。また、土器以外では玉類として滑石製勾玉、水晶製切子玉、ガラス玉、滑石製白玉、鉄製品では鎌、刀子、銅製品では鎌、仏像、特殊遺物などがあげられる。

遺構内より出土する遺物は一般的であるのに対してIV層黒色土からの出土遺物は時代、種類とも古墳期から平安期までのものが混在しており統一性がみられない。

(註)

銅製小金銅仏像については現在関東地方で100軒をこえるが、の中には伝世品も多く、

発掘調査によって出土するものはあまり多くはない。出土する遺跡の性格は寺院跡、經塚遺跡、山岳墓場などの祭祀、信仰遺跡が大半で希薄に占墳からの出土もある。

小金銅仏も如来、菩薩、明王などの種類に区分でき、白鳳、奈良といった比較的古い時期には菩薩像が、平安時代後期には如来像が多く見られる。^(註3)

さて阿弥陀如来坐像の小金銅仏の代表的なものが和歌山県那智勝浦町那智經塚遺跡出土のものである^(註3)。阿弥陀如来坐像を中心に据え、帳座下方両側から蓮茎が伸び蓮華座を造りその上に脇侍菩薩立像を配す一基三尊形式の像である。また、埼玉県大里郡江南町野原占墳出土とされる宝冠阿弥陀如来坐像や同県桶川市旧大正院藏とされるもの、群馬県勢多郡宮城村白草庵寺^(註4)発見のそれぞれの宝冠阿弥陀如来坐像にも帳座左右に蓮茎の欠損部位が看取されることなどから現在は欠損し坐像単体であるが本来は脇侍を有す三尊形式のものであったと考えられる。松ノ尾遺跡2号仏像の帳座両脇にも蓮茎の痕跡が看取でき三尊形式であったと思われる。

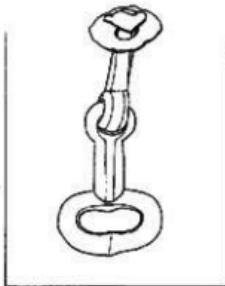
11世紀から12世紀にかけての所産と考えられる小金銅仏が各地で発見されているとはこの時期に小金銅仏の需要を増加させる何らかの仏教的要因が発生したと思われ、小金銅仏の山上は松ノ尾遺跡周辺の盆地北西部においても社会現象が浸透していた傍証となろう。また、この仏像が仏教的要因によって如何なる場所へ安置されていたのかという問題も今後の課題となる。

銅製特殊遺物について現在出土事例は知り得る範囲で本件も含め3例のみである。

千葉県印旛郡本笠村の宮内遺跡第4号土坑より出土した銅製品(図49)は鏡金具として報告^(註5)され、壺金具、座金、連繫壺金具から構成されている。名称について定まったものが無く、宮内遺跡での報告名称を用いると松ノ尾遺跡出土品は連繫壺金具ということになる。また、群馬県藤岡市株木B遺跡D H - 5 3号住居跡からも連繫壺金具が出土している。各遺物とも長さは4.6~5.4cmで形態などからみて同一用途の金具であろう。宮内遺跡は古墳時代住居跡26軒、奈良時代住居跡43軒、平安時代住居跡42軒が出土した規模の大きい集落遺跡であるが、仏教色の強い遺構は発見されていない^(註6)。また、株木B遺跡は集落遺跡で、古墳時代24、奈良時代23、平安時代住居跡52軒を含む139軒の住居が調査されている。

用途については不明であるが座金などは正倉院御物櫃の鍵取付け金具や経箱紐付金具などに見られるという。

宮内遺跡では9世紀末か10世紀初頭とし、株木B遺跡は古墳時代としている。松ノ尾遺跡出土品は遺物包含層からの出土で、同層からは勾玉、切子玉といった古墳色の濃い遺物や阿弥陀如来坐像といった平安時代、仏教色の濃い遺物が同時に出土しており、所産年代は検討を要する。



第49図 宮内遺跡出土鏡金具

まとめ

6世紀から7世紀にかけて遺跡周辺では赤坂台や千塚に古墳群が築造される。これまで古墳の調査は行われてきたが古墳に埋葬あるいは築造に関わった人々の生活に結びつく遺跡の調査は数が少なくその全容を解明するまでには至っていないかった。しかし、平成4年(1992)に甲府市千塚でおこなわれた複数遺跡の発掘調査では当該期の住居跡12軒が調査され、甲府盆地北西部荒川左岸における古墳時代後期の様相を考える上で大きな成果となった。

松ノ尾遺跡は荒川右岸の扇状地上に位置し西側には双葉、竜王両町に跨る赤坂台地が連なる。荒川左岸同様右岸地域もこれまでまとまった成果は得られていないかった。今回の調査では住居軒数こそ5軒と少數であったが当該期の集落の一部が明らかになったことは一つの成果と言えよう。赤坂台古墳群との相関関係が今後の課題となる。

基本層序IV層の黒色土層は遺跡東方を南流する荒川の氾濫によって形成されたものと思われる。IV層より出土する遺物中切子玉、ガラス玉、臼玉、勾玉、銅鏡、鐵鏡、刀子、帶金具などは古墳の副葬品として用いられるものである。県内でもこれら遺物が住居内から出土した例はあるが希薄で、また、遺跡西方の竜王2・3号墳出土の副葬品にその内容が酷似していることなど赤坂台や千塚などの周辺古墳群との関係を考慮すると遺跡北方に後期古墳が存在した可能性が考えられる。

平安時代については9世紀末から12世紀にかけての15軒の住居跡が調査された。周辺地域で当該期の住居跡がまとまって調査されたのは初めてである。調査範囲に限界があり調査区から南北にかけて遺跡の規模は広範囲に亘ると考えられる。

4・5号住居跡など古墳時代後期の遺構の堆積、残存状況は極めて良好な状態を保っていたのに対し8世紀末から9世紀初頭と考えられる6号住居跡をはじめとし12世紀初頭まで連續と続く各住居跡の堆積状況は砂粒、小石、礫などが全体に含まれ、カマド、住居壁などの残存も極めて悪い状態である。第IV層直下に平安期遺構が位置することなどから東方の荒川が起した水害を重ねて受けたことが推察される。

11世紀末から12世紀初頭の所産と考えられる仏像については1号仏像が10世紀末に位置付けられる12号住居跡の覆土上層から、2号仏像がIV層中位のやや砂粒、小石が多く含まれている箇所から、それぞれ出土しており、遺構に伴わないといため詳細については今後の課題となるが佛教信仰を行い、その象徴たる小金銅佛を持ち得る社会状況が松ノ尾遺跡周辺で成立していたことは事実である。また、壺、高台付壺、皿、小皿の出土遺物中灯明容器に用いられたと考えられるものが10%を占める点も注意しておきたい。やや離れるが遺跡東方約9kmに所在する甲府市桜井畠遺跡A地区においても灯明皿等が多く出土している。また、玉類で報告した墓石状石製品など出土遺物に類似点がみられるのも興味深い。

桜井畠遺跡周辺は6世紀以降に古墳の築造が活発に行われ、横根、桜井、人藏経寺の各古墳群が成立しており、また、北西約1.5kmにある東畠遺跡からは平安期の金銅製觀音菩薩立像

が出土している。そして先に述べた寺本庵寺への瓦供給地である川田瓦窯跡や土師器生産跡とされ「甲斐国山梨郡表門」の刻書土器が出土した大坪遺跡などがある。

桜井畠遺跡からは庇付き掘立柱建物跡や住居床面に瓦を敷き詰めたもの、灯明皿などが多く出土していることなどから周辺の集落遺跡とは異なった性格を持つ特殊性が指摘されている。^(註9)

桜井畠遺跡A地区及び周辺遺跡の性格、それを取り囲む地形的環境と松ノ尾遺跡及び四辺遺跡、地形的環境が類似している点は今後の調査、研究をしていく段階で注意しておく必要があろう。また、水害によって堆積したと考えられるIV層黒色遺物包含層中に12世紀半ば以降の遺物が含まれていない点も今後の課題となる。

註1 林 宏一論考

註2 佐藤昭夫論考

註3 東京国立博物館編 P232 「阿弥陀如来半像及左脇侍像2軒」 『那智経塚遺宝』

註4 埼玉県立博物館編 『燃る光彩—関東の出土金銅仏—』

註5 小金銅仏の阿弥陀如来像は11世紀から12世紀所産のものがほとんどで、経塚などからの出土が大半であることなどから法華経を通して極楽浄土の考え方との関係も指摘されている。(井上一稔論考)

註6 宮内遺跡調査報告書中、同遺跡出土の特殊遺物について原田 敏氏が報告をしておりその中で遺物を「鉄製鍍金具」と呼称し、その構成品を座金、壹金具、連鑿壹金具としている。

註7 宮内遺跡発掘調査報告書

註8 註7に同

註9 桜井畠遺跡A・C地区

〈引用・参考文献〉

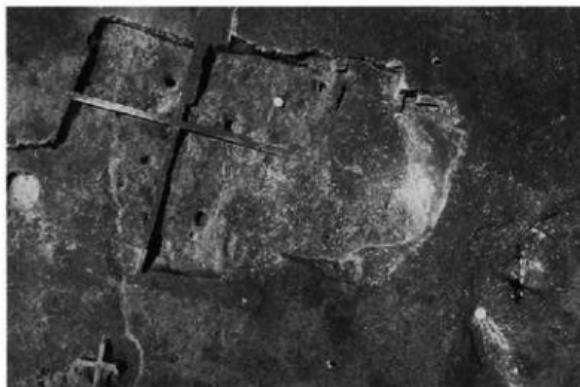
- 後藤 守一 1939 「上古時代鉄器の年代研究」『人類学雑誌』54巻4号
- 末木 健他 1979 『山梨県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書－北巨摩郡双葉町地内2・中巨摩郡竜王町地内－』山梨県教育委員会
- 林 宏一 1982 「古代東国の大金銅仏－出土仏を中心に－」
『歴史手帖』10巻10号 名著出版
- 坂本 美夫他 1983 「奈良・平安時代土器の諸問題－柏原國と周辺地域の様相－」
神奈川考古第14号 神奈川考古同人会
- 信藤祐仁 1984 『大坪遺跡』甲府市教育委員会
- 関秀夫他 1985 『那智経塚遺宝』東京国立博物館
- 甲府市史編纂委員会編 1989 「奈良平安時代の遺跡」『甲府市史資料編第1巻原始・古代・中世』
- 坂本 美夫他 1989 『桜井畠遺跡(B地区)』山梨県教育委員会
- 佐藤昭夫 1989 「小金銅仏について－《武藏の金銅仏》展によせて－」
『武藏の金銅仏』町田市立博物館
- 中山誠二他 1990 「桜井畠遺跡A・C地区」山梨県教育委員会
- 甲府市史編纂委員会編 1991 「平安期集落の発達」『甲府市史通史編第1巻原始・古代・中世』
- 井上一稔 1991 「宝阿弥陀如来坐像の研究 その展開」『年報』第9号
(財)鹿島美術財団
- 丸山治雄他 1991 「株木B遺跡」藤岡市教育委員会
- 平野修・藤原功一 1992 『宮ノ前遺跡』茎崎市遺跡調査会
- 瀬田正明 1992 「山梨県内出土の腰帶具について」『山梨県考古学協会誌』第5号
山梨県考古学協会
- 甲斐型土器研究グループ編 1992 「甲斐型土器－その編年と年代－」山梨県考古学協会
- 林 宏一 1993 「出土金銅仏－関東地方を中心に－」
『甦る光彩－関東の出土金銅仏－』埼玉県立博物館
- 内山理彦他 1994 「宮内遺跡発掘調査報告書」木暮村・御印施都市文化財センター
- 高野玄明 1995 『根田遺跡』山梨県教育委員会

図版

図版1



4・5号住居跡全景
(北より)



9・16号住居跡全景
(垂直)



15号住居跡全景
(垂直)

図版2

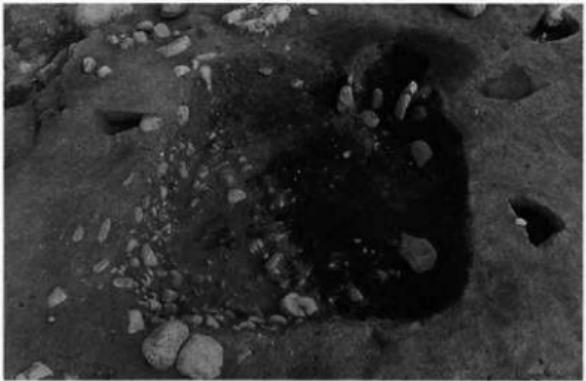
1・2号住居跡全景
(西より)



3号住居跡全景
(西より)



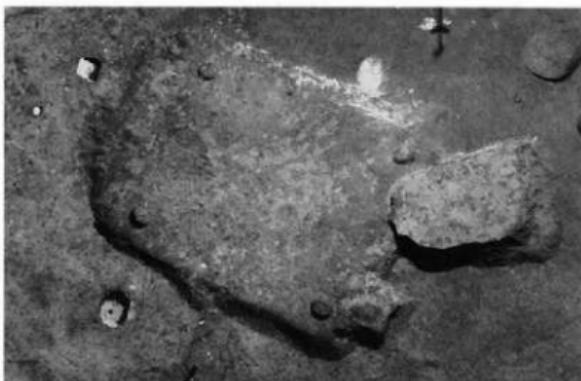
6号住居跡全景
(西より)



図版3



7号住居跡全景
(南より)



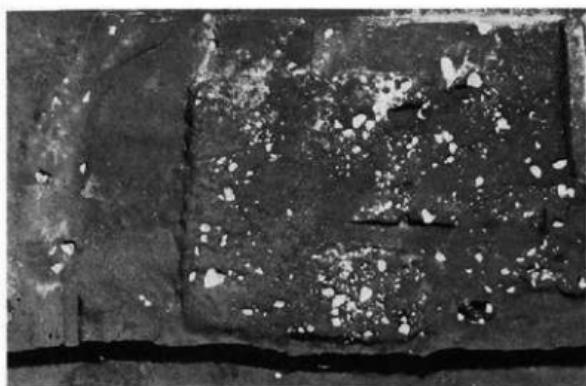
8号住居跡全景
(垂直)



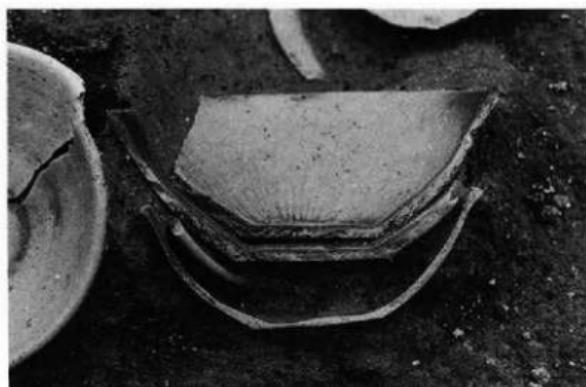
10・11号住居跡全景
(垂直)

図版4

12号住居跡全景
(垂直)



10号住居
土器出土状況



12号住居
土器出土状況



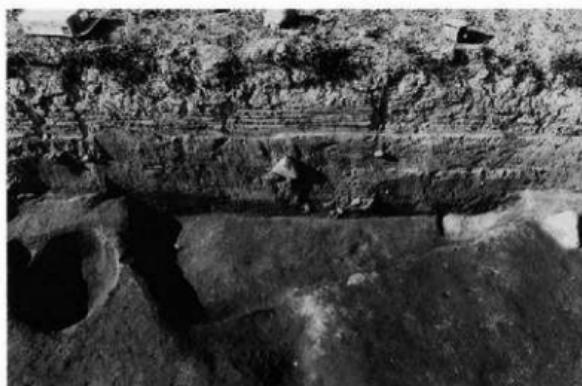
図版5



14号住居跡全景
(西より)



17号住居跡全景
(南より)



18号住居跡全景
(南より)

図版6

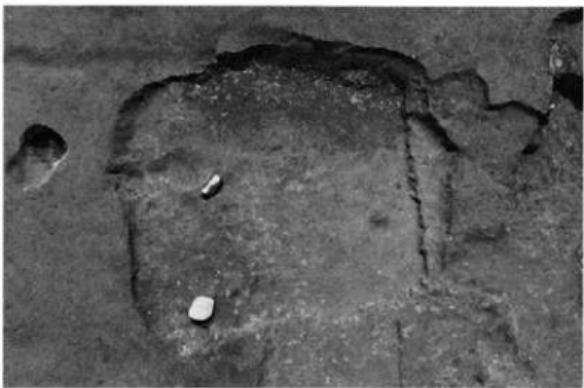
19号住居跡全景
(北より)



19号住居
羽釜出土状況



20号住居跡全景
(垂直)



図版7



1号溝跡
(東より)



3号溝跡
(西より)

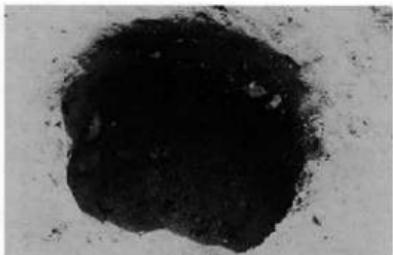


4号溝跡
(南より)

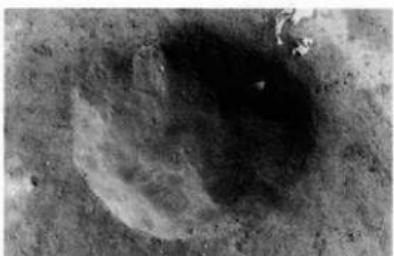
图版8



1号土坑全景



2号土坑全景



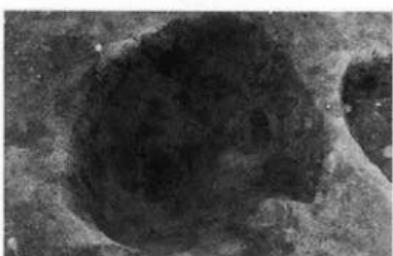
3号土坑全景



4号土坑全景



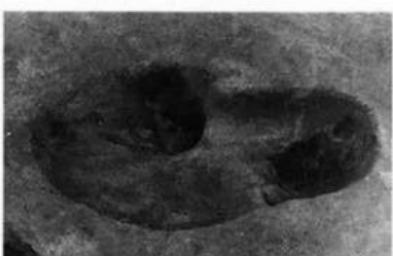
5号土坑全景



6号土坑全景



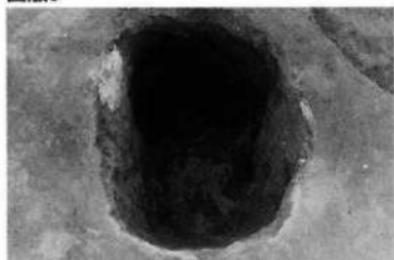
7号土坑全景



8号土坑全景

1~8号土坑全景

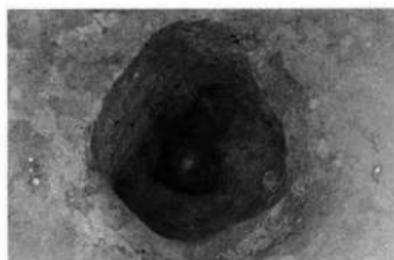
图版9



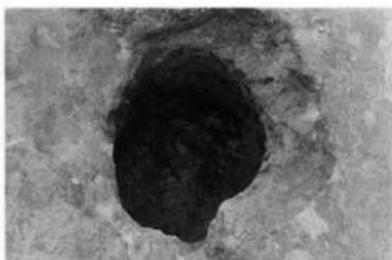
9号土坑全景



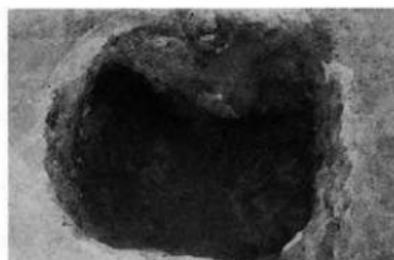
10号土坑全景



11号土坑全景



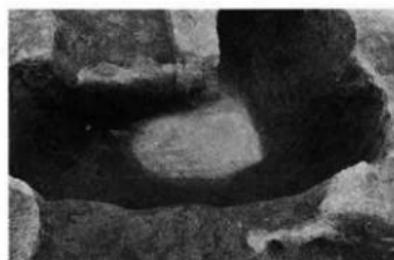
12号土坑全景



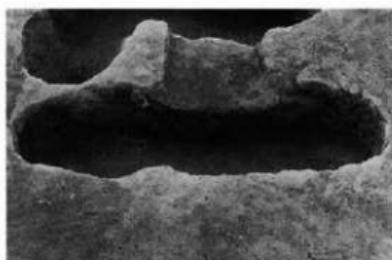
13号土坑全景



14号土坑全景



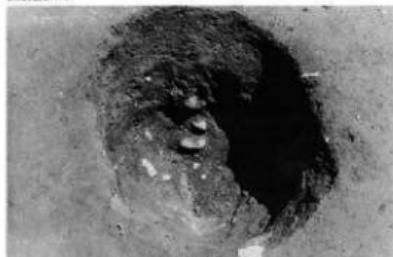
15号土坑全景



16号土坑全景

9~16号土坑全景

图版10



17号土坑全景



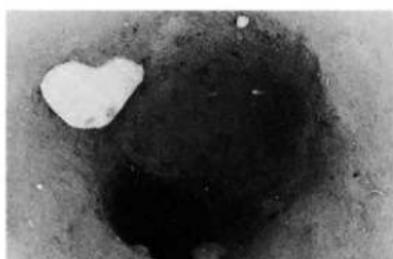
18号土坑全景



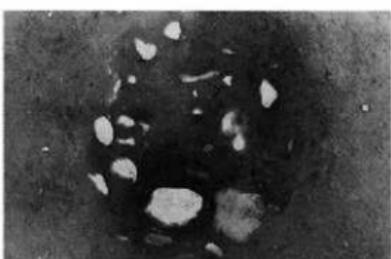
19号土坑全景



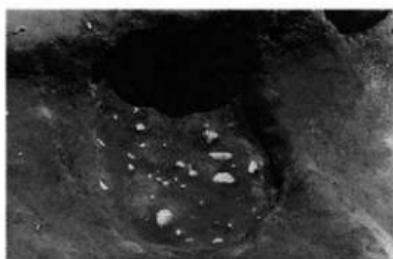
20号土坑全景



21号土坑全景



22号土坑全景



23号土坑全景



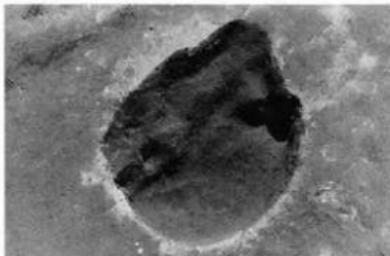
24号土坑全景

17~24号土坑全景

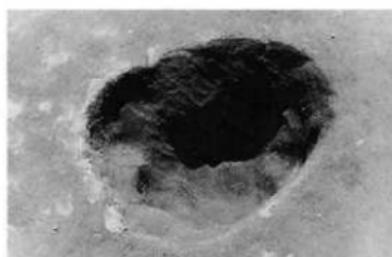
图版11



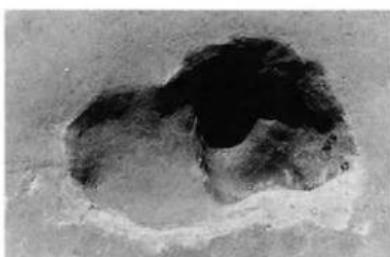
25号土坑全景



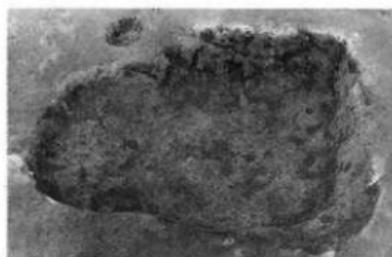
26号土坑全景



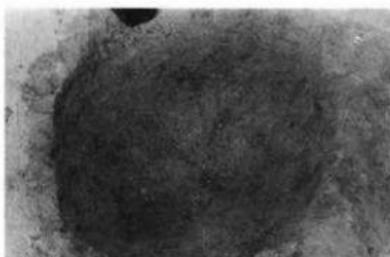
27号土坑全景



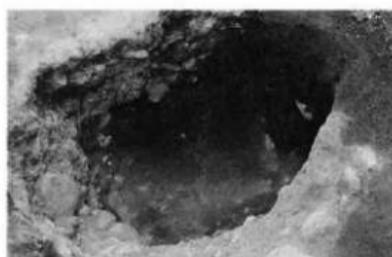
28号土坑全景



29号土坑全景



30号土坑全景



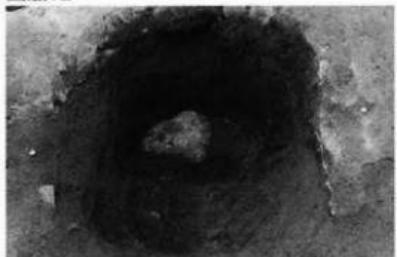
31号土坑全景



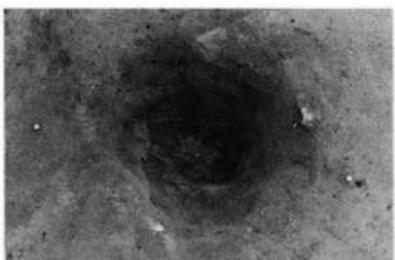
32号土坑全景

25~32号土坑全景

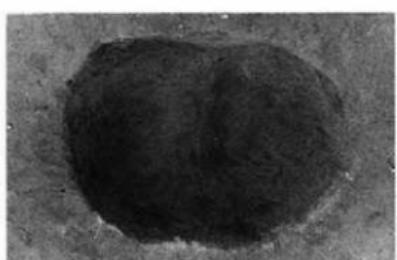
图版12



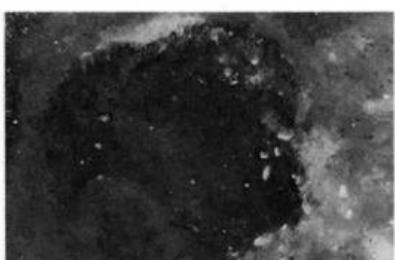
33号土坑全景



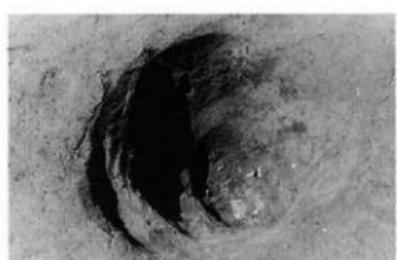
34号土坑全景



35号土坑全景



36号土坑全景



37号土坑全景



38号土坑全景



39号土坑全景



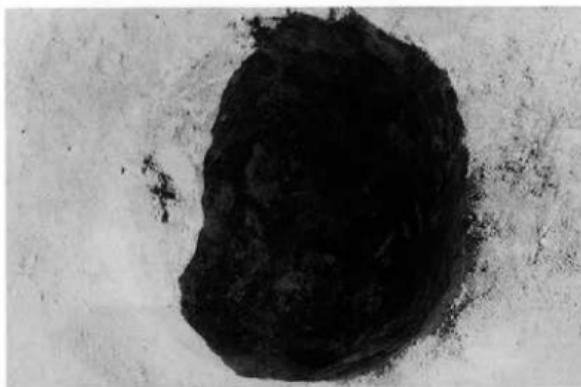
40号土坑全景

33~40号土坑全景

图版13



41号土坑全景



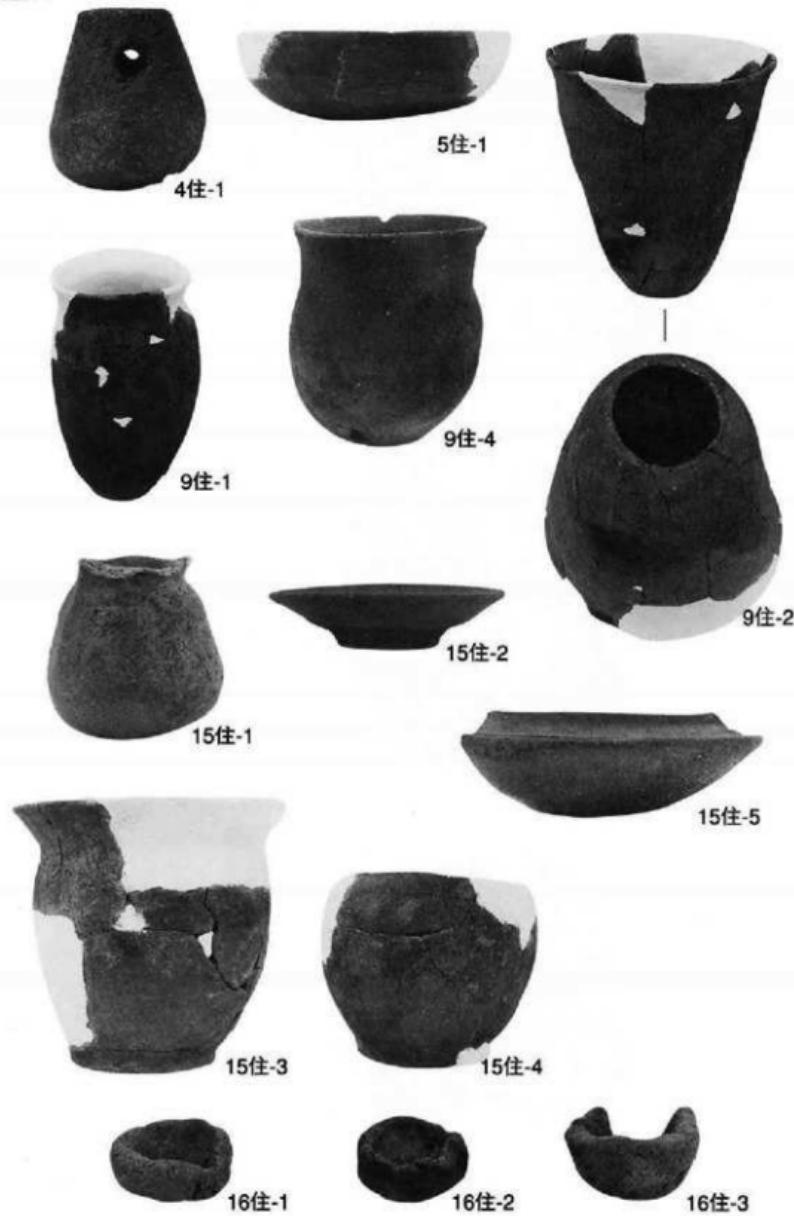
42号土坑全景



43号土坑全景

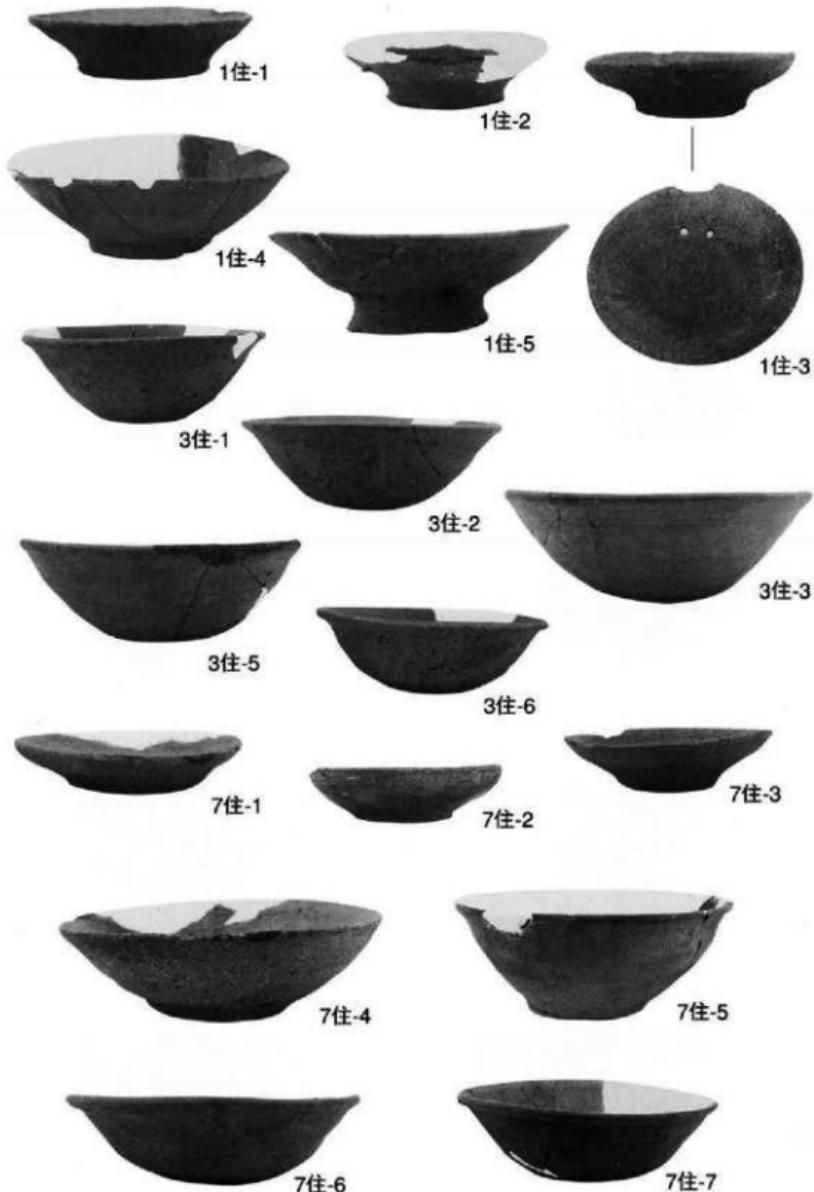
41~43号土坑全景

図版14



4・5・9・15・16号住居跡出土遺物

図版15



1・3・7号住居跡出土遺物

図版16



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



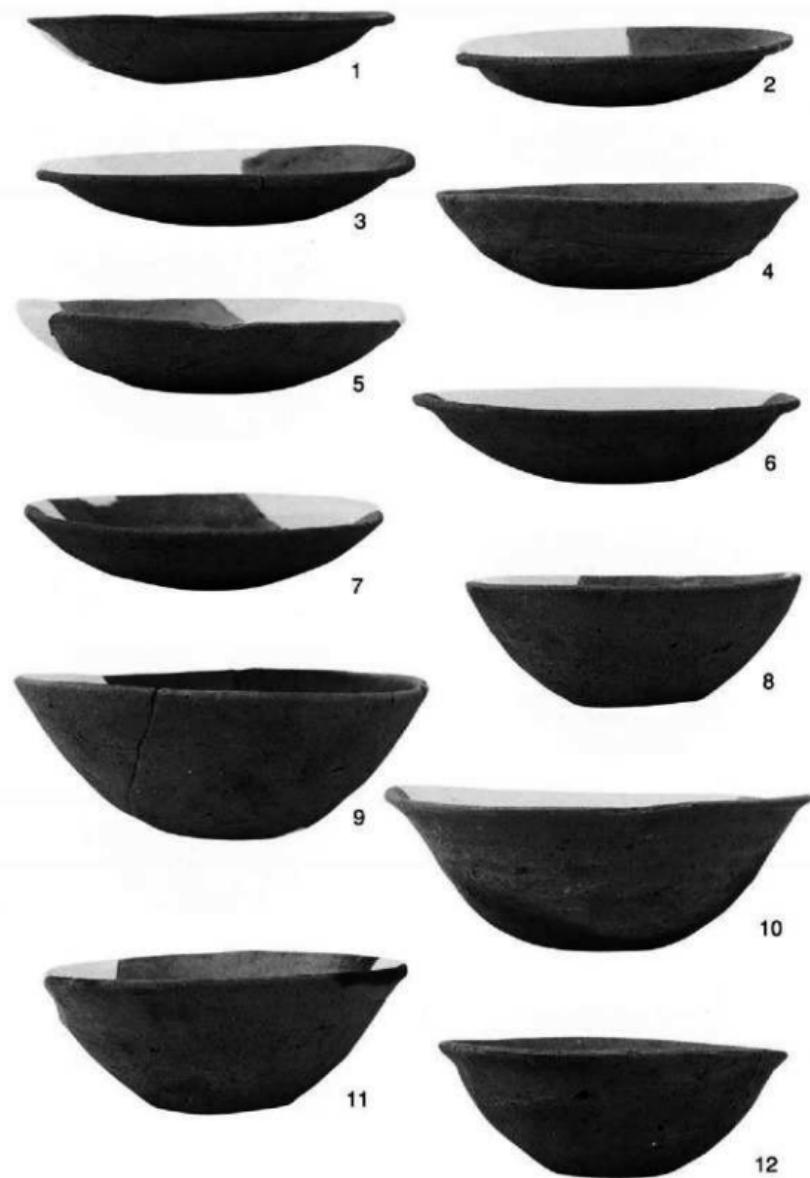
11



12

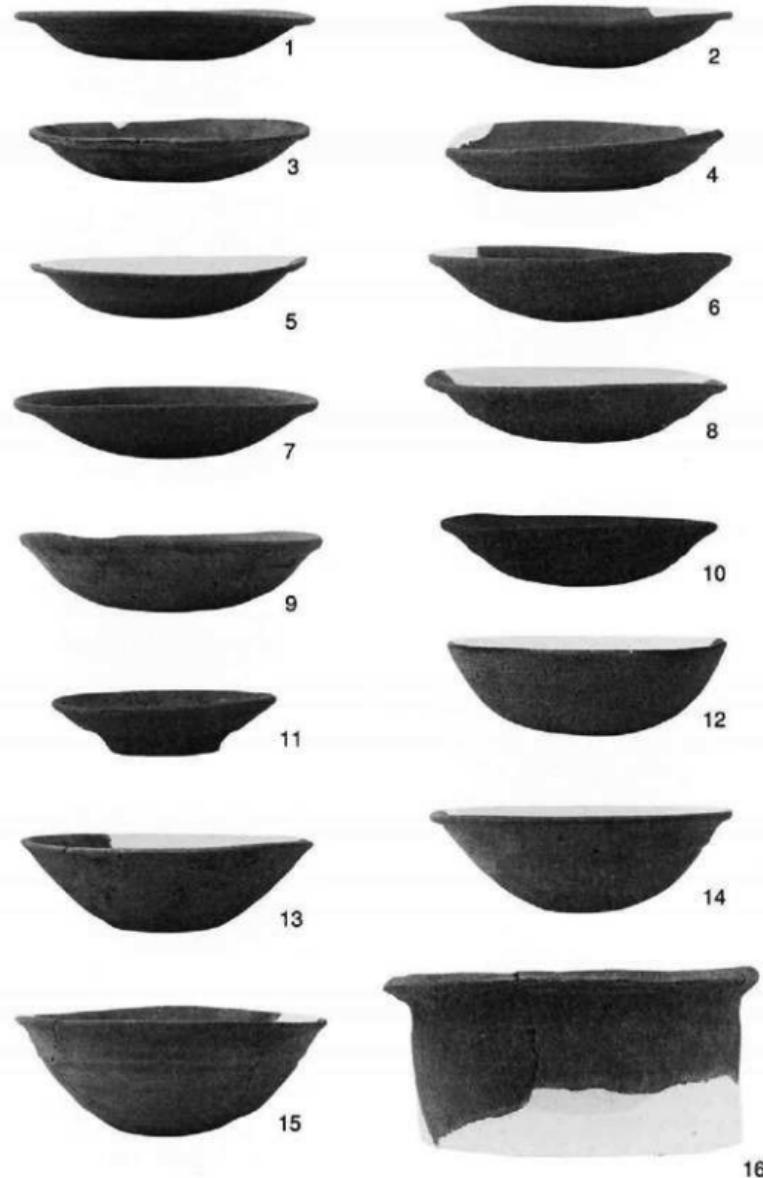
10号住居跡出土遺物

図版17



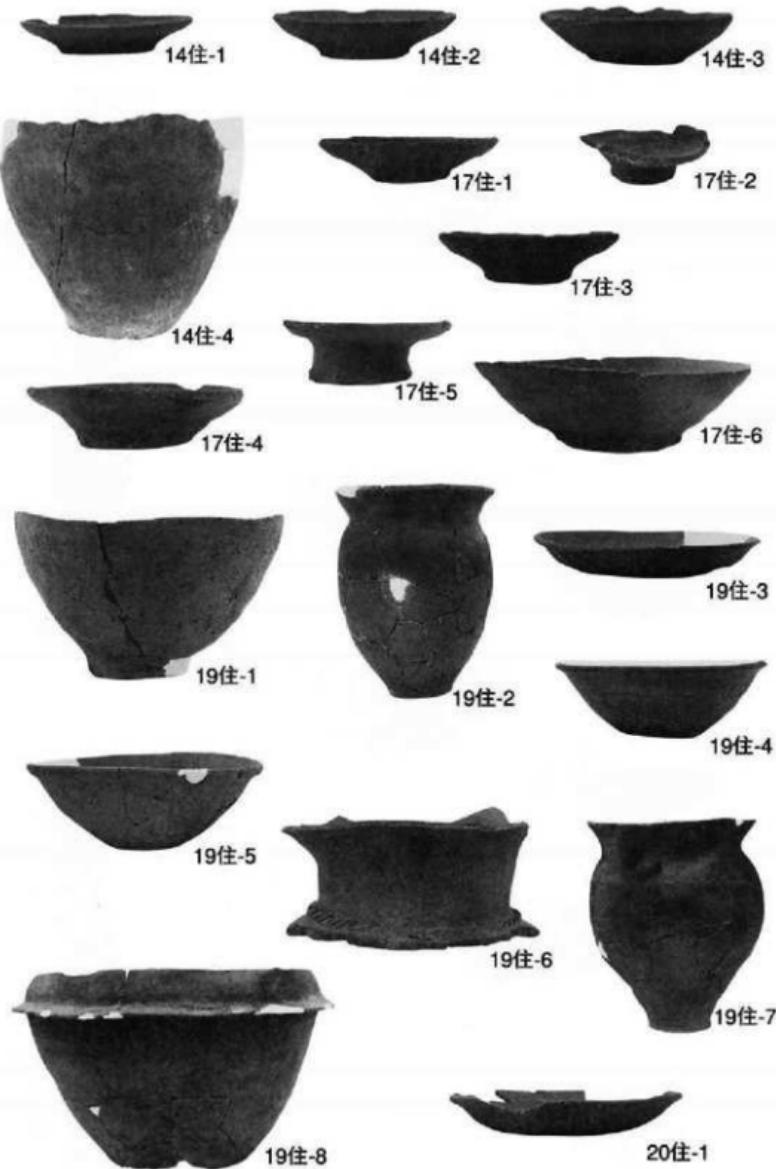
11号住居跡出土遺物

图版18



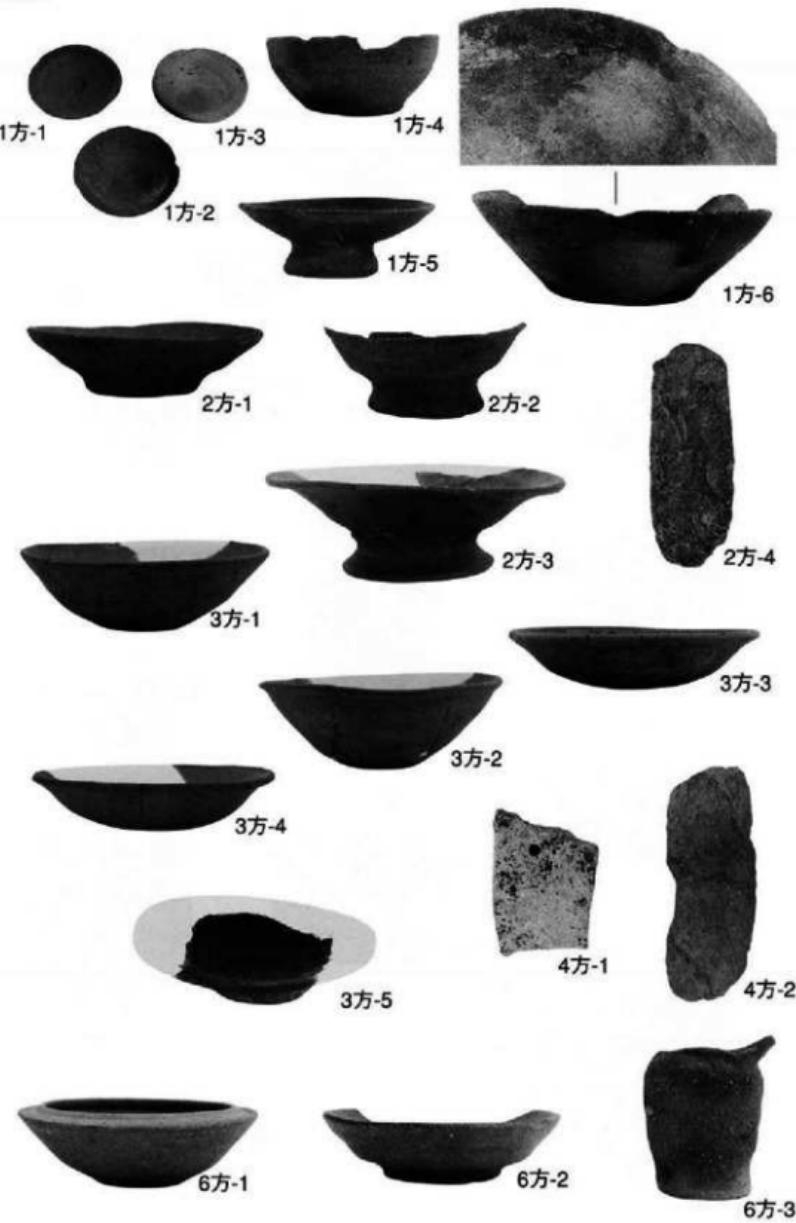
12号住居跡出土遺物

図版19



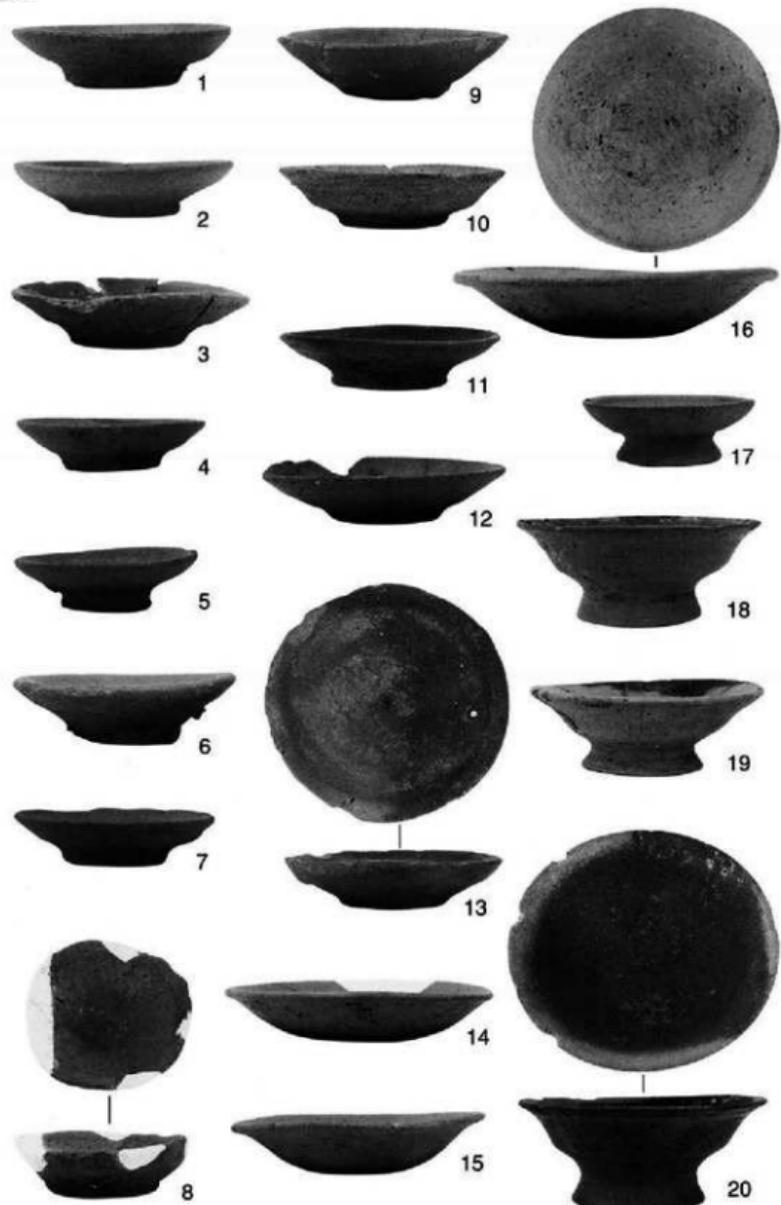
14・17・19・20号住居跡出土遺物

図版20



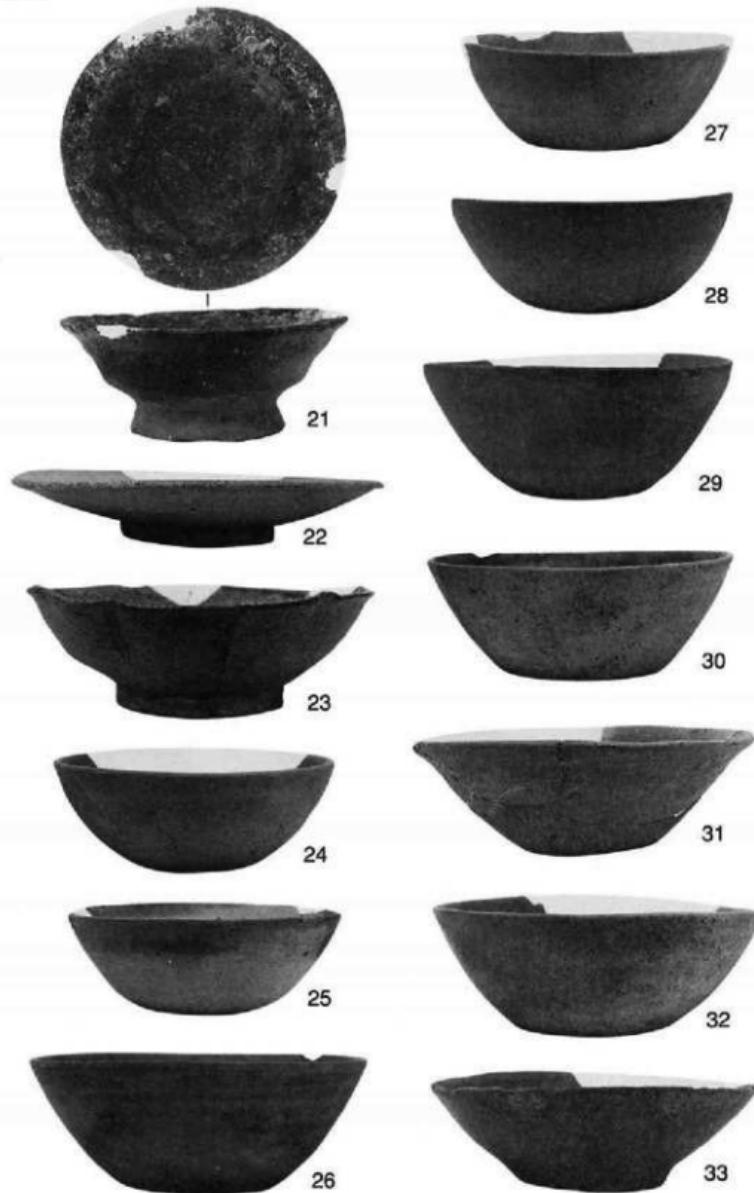
1・2・3・4・6号方形竪穴状造構出土遺物

図版21



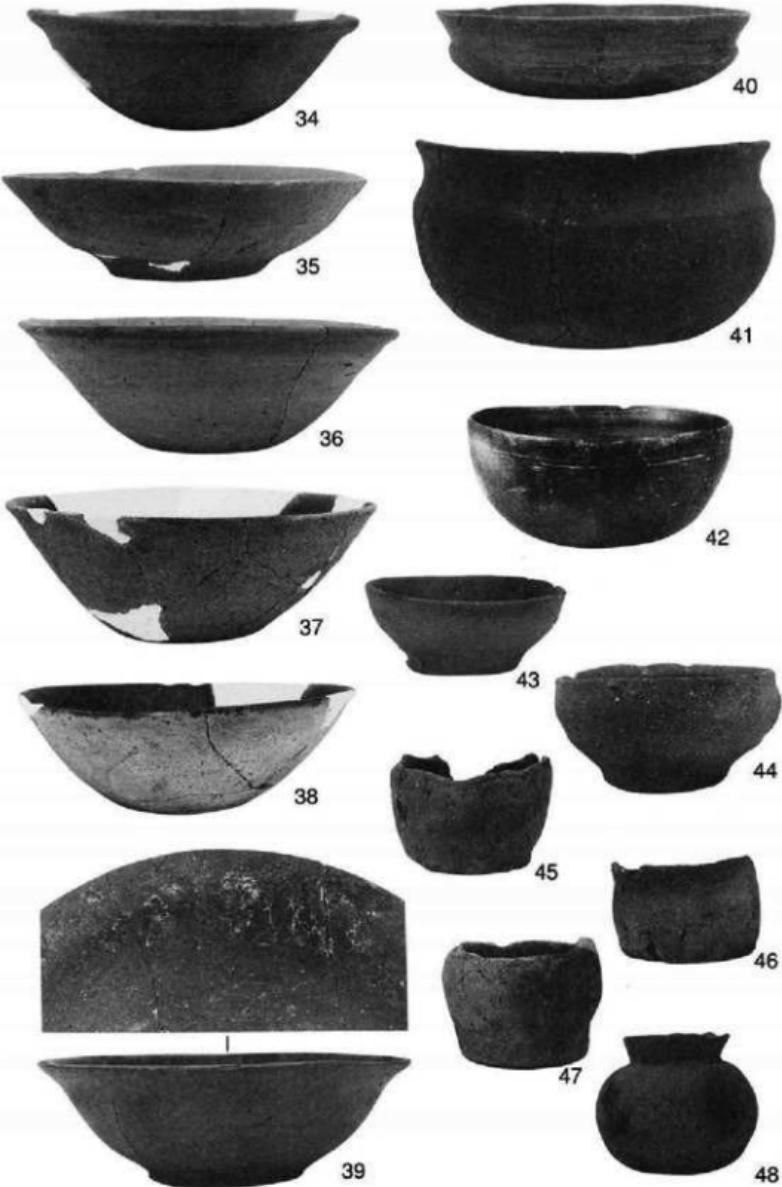
遺構外遺物土器 (1)

図版22



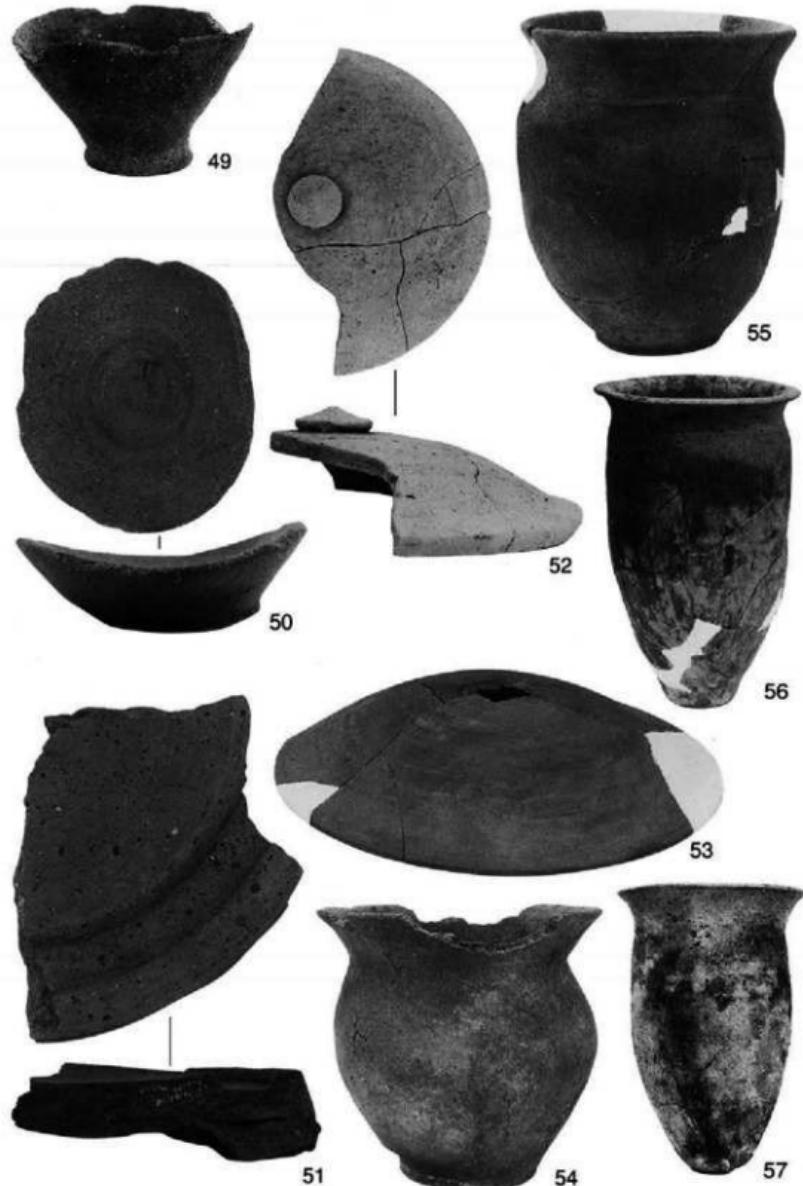
遺構外遺物土器 (2)

図版23



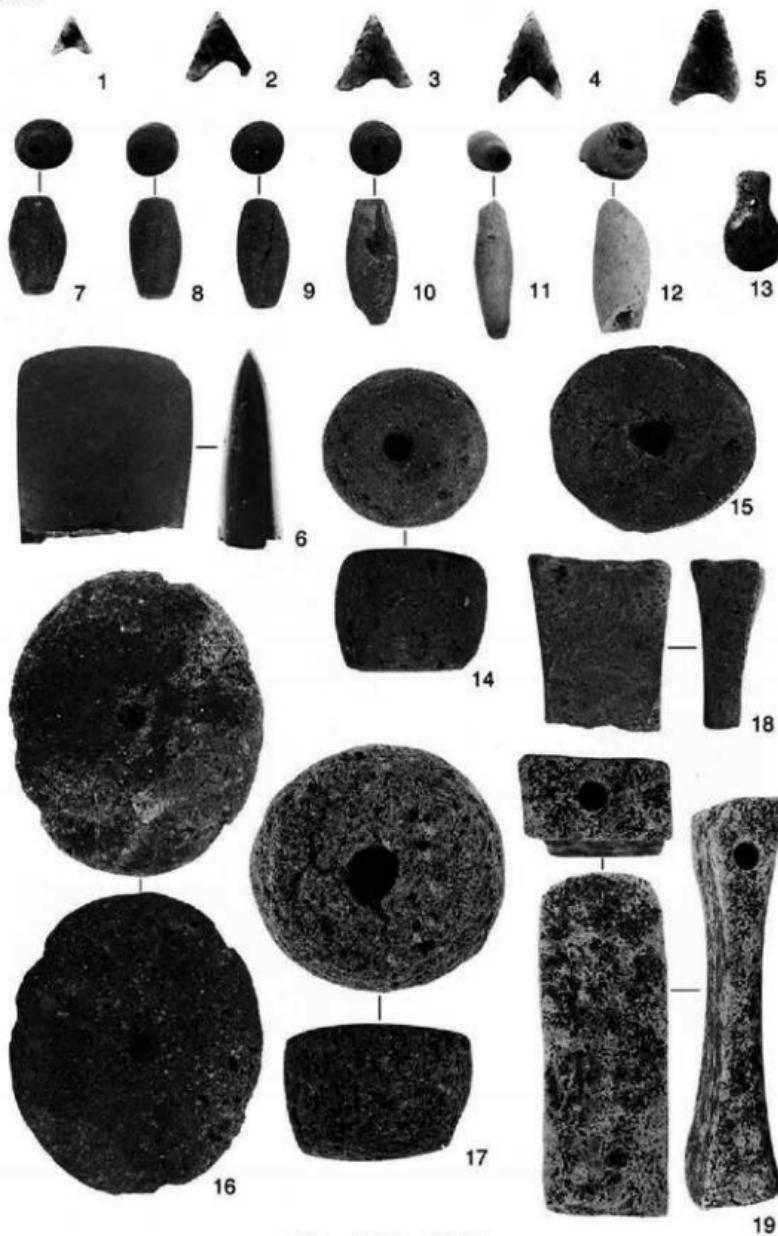
遺構外遺物土器 (3)

図版24

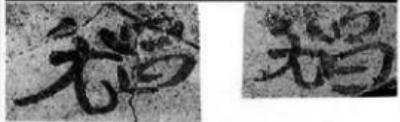
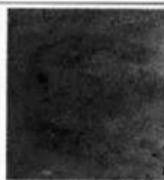
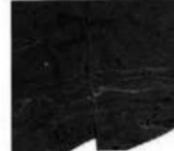
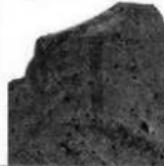


遺構外遺物土器 (4)

図版25



石器、土製品、石製品

	D-7 グリット 外面体部 「灰」 1	
	B-11 グリット 外面体部 「百」 2	
	2号溝 外面体部 「と」 3	7号住居跡 外面体部 「火」 8
	12号住居跡 外面底部 「木」 4	
	3号方形竪 穴状遺構 外面体部 「古」 5	12号住居跡 外面体部 「田」 10
	A-20 グリット 外面底部 「中」 6	
	B-15 グリット 外面底部 「キ」 7	 B-10 グリット 外面体部 「鍋」 12



1号仏像 正面



2号仏像 正面



左侧面



左侧面



右侧面



右侧面



1号仏像 背面



2号仏像 背面

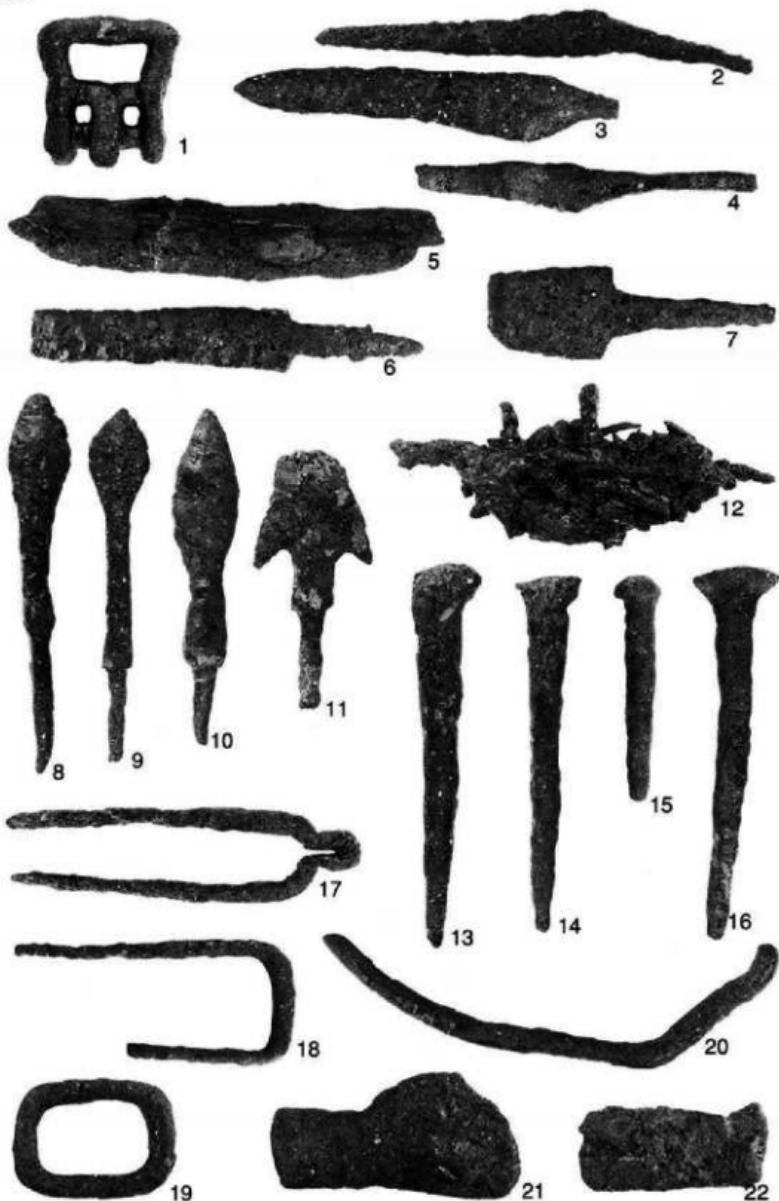


台座底部



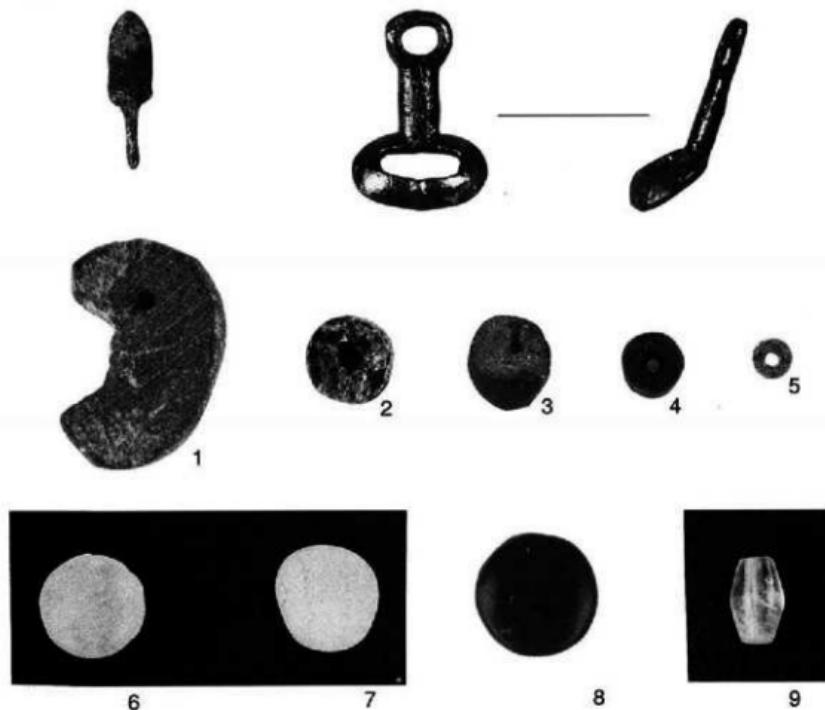
台座底部

図版29



鉄製品

図版30



銅製品・玉類・発掘調査参加者

報告書抄録

ふりがな	まつのおいせき						
書名	松ノ尾遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	敷島町文化財調査報告書						
シリーズ番号	5						
編著者名	大嶋正之						
編集機関	敷島町教育委員会						
所在地	〒400-01 山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020						
発行年月日	平成8年(1996)3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
松ノ尾遺跡	山梨県 中巨摩郡 敷島町大字下条 1094外	193828	50		平成8年 10月19日 ～ 平成7年 3月31日	7,000	都市計画道路 愛宕町下条線 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
松ノ尾遺跡	集落跡	古墳時代 平安時代	住居跡 20 土坑 43	土師器 壺・皿 甕	平安時代後期小金輪仏が出土		

敷島町文化財調査報告第5集

松ノ尾遺跡

発行日 1996年3月31日
 発行 敷島町教育委員会
 印刷 イトウ印刷
 山梨県中巨摩郡敷島町大字下条920-1
 TEL 0552-77-8152

